

# 茨城県梶巾遺跡

大賀小学校校舎建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

大宮町教育委員会  
梶巾遺跡発掘調査会

昭和60年3月

# 茨城県梶巾遺跡

井上 義安 植田 友次 編  
千種 重樹 大芦あさ子

大宮町教育委員会  
梶巾遺跡発掘調査会

昭和 60 年 3 月

## 序 文

梶巾遺跡発掘調査は、昭和59年4月から6月まで3ヶ月間実施されました。この遺跡は、久慈川にそって南にのびる標高64m、水田面からの比高約30mの舌状の中位段丘の東縁部にあたる畑地一帯にあります。昭和50年11月に一部発掘が行われ、先土器時代の包含層が確認され、石核・磨石・縄文土器片・弥生土器片などが発見された重要遺跡であります。今回、大賀小学校の校舎建設に伴う発掘となつたものでありますが、この古くから文化の栄えたこの地に、学校が建設されることはまことに意義深いものがあります。

このたびの発掘調査によって、弥生時代の住居址2、古墳時代の住居址4のほか、多数の縄文時代の土壙が検出され、この地域における古代の人ひとの生活の一端を知る上で貴重な資料が得られました。

この調査にあたり、全面的なご支援とご指導をいただきました茨城県教育庁文化課のご厚意と、調査員の皆様はじめ関係各位のご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

この報告書が、郷土愛の心を培う貴重な資料として、広く皆様方にご活用されることを心から期待いたします。

昭和60年3月

大宮町教育委員会

教育長 吉田一満

## 例　　言

- 1 本書は、茨城県那珂郡大宮町人字小祝字中道 247 番地(梶巾遺跡)の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、昭和 59 年 4 月 10 日から 6 月 20 日まで実施した。
- 3 発掘調査面積は、大賀小学校々舎建設敷地 1,904 m<sup>2</sup> と、A 確認調査区 112 m<sup>2</sup> と、B 確認調査区 110 m<sup>2</sup> の合せて 2,126 m<sup>2</sup> である。
- 4 発掘調査は、昭和 59 年 3 月 26 日に、梶巾遺跡発掘調査会(会長鈴木勝一文化財保護審議会長)を組織し、井上義安を担当者とし、植田友次・千種重樹・大芦あさ子と地元作業員の協力により実施した。
- 5 本書に掲載した写真は、井上義安が撮影したものを使用した。
- 6 遺物整理・図面作成・原稿執筆などは、発掘終了後、大洗町ひいがま遺跡調査団事務所に遺物を保管し、那珂湊市櫛原神宮社務所と植田友次宅を使用して、2 月 29 日まで実施した。
- 7 整理作業の担当と内訳は下記のとおりである。  
井上 義安(遺構図面のトレース・土器実測図・本文執筆・レイアウト・総括)  
植田 友次(土器復元)  
千種 重樹(遺構図面のトレース・石器実測図・本文執筆)  
大芦あさ子(写真図版・拓影図・レイアウト)  
整理補佐員として、郡司浩之・磯崎薫・長谷川照子が協力した。
- 8 出土遺物は、大宮町教育委員会(吉田一満教育長)の責任で保管されている。

## 本文目次

序 文	吉田一満
例 言	
挿図目次	
図版目次	
I はじめに	1
II 遺跡の位置と地勢	1
III 発掘調査区と調査方法	3
IV 遺構の分布状況	5
V 縄文時代土壙の調査	7
1 第1号土壙	8
2 第2号土壙	11
3 第3号土壙	17
4 第4号土壙	19
5 第5号土壙	21
6 第6号土壙	22
7 第7号土壙	23
8 第8号土壙	26
9 第9号土壙	29
10 第10号土壙	32
11 第11号土壙	33
12 第12号土壙	35
13 第13号土壙	36
14 第14号土壙	41
15 第15号土壙	44
16 第16号土壙	50
VI 弥生時代住居址の調査	55

1 第4号住居址	55
2 第6号住居址	64
<b>VII 古墳時代住居址の調査</b>	<b>73</b>
1 第1号住居址	73
2 第2号住居址	80
3 第5号住居址	91
4 第7号住居址	97
5 第3号住居址	99
<b>VIII 発掘・確認調査区出土の遺物</b>	<b>100</b>
<b>IX ま　と　め</b>	<b>103</b>
梶巾遺跡発掘調査会役員	104
発掘調査従事者	
遺物整理従事者	
謝　　辞	

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡付近地形図 (○印 脱巾遺跡) .....	2	第22図 第8号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	26
第2図 遺跡地層模式図 .....	3	第23図 第8号土壤出土土器拓 影図 .....	27
第3図 発掘調査区域図 .....	4	第24図 第8号土壤出土石器実 測図 .....	28
第4図 遺構(住居址・土壤)分 布図 .....	6	第25図 第9号土壤実測図 .....	30
第5図 第1号土壤実測図 .....	8	第26図 第9号土壤出土土器拓 影図 .....	31
第6図 第1号土壤出土土器実 測図・拓影図 .....	9	第27図 第10号土壤実測図 .....	32
第7図 第1号土壤出土上石器実 測図 .....	10	第28図 第11号土壤実測図・遺 部出土状態図 .....	33
第8図 第2号土壤実測図 .....	11	第29図 第11号土壤出土土器実 測図 .....	34
第9図 第2号土壤遺物山土状 態図 .....	12	第30図 第12号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	35
第10図 第2号土壤出土土器実 測図 .....	13・14	第31図 第12号土壤出土土器拓 影図 .....	36
第11図 第2号土壤出土土器拓 影図 .....	15	第32図 第13号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	37
第12図 第2号土壤出土石器実 測図 .....	16	第33図 第13号土壤出土遺物状 態(断面)図 .....	38
第13図 第3号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	17	第34図 第13号土壤出土土器実 測図 .....	39
第14図 第3号土壤出土土器拓 影図 .....	18	第35図 第13号土壤出土土器拓 影図 .....	40
第15図 第4号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	19	第36図 第13号土壤出土石器実 測図 .....	41
第16図 第4号土壤出土土器実 測図・拓影図 .....	20	第37図 第14号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	42
第17図 第5号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	21	第38図 第14号土壤出土土器実 測図 .....	43
第18図 第6号土壤実測図 .....	22	第39図 第14号土壤出土土器拓 影図 .....	44
第19図 第6号土壤出土土器実 測図 .....	23	第40図 第15号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	45
第20図 第7号土壤実測図・遺 物出土状態図 .....	24	第41図 第15号土壤出土土器実 測図 .....	47・48
第21図 第7号土壤出土土器実 測図 .....	25		

第42図	第15号上塙出土土器拓影図	49	第63図	第1号住居址柱穴実測図	
第43図	第16号土壤実測図・遺物出土状態図	50	第64図	第1号住居址遺物出土状態図	76
第44図	第16号土壤遺物出土状態図	51	第65図	第1号住居址土器接合関係図	77
第45図	第16号上塙出土土器拓影図	52	第66図	第1号住居址出土土器実測図	78
第46図	第16号土壤出土土石器実測図	53	第67図	第1号住居址出土紡錘車実測図	79
第47図	第4号住居址実測図	55	第68図	第2号住居址実測図	81・82
第48図	第4号住居址柱穴実測図	56	第69図	第2号住居址出土土器実測図	83
第49図	第4号住居址遺物出土状態図	57	第70図	第2号住居址出土土器実測図	85・86
第50図	第4号住居址土器接合関係図	58	第71図	第2号住居址土器接合関係図	87
第51図	第4号住居址出土土器実測図	59・60	第72図	第2号住居址出土土器実測図・拓影図	88
第52図	第4号住居址出土紡錘車実測図	61	第73図	第2号住居址出土紡錘車実測図	89
第53図	第4号住居址出土砥石・炉石実測図	62	第74図	第2号住居址出土炉石実測図	90
第54図	第6号住居址実測図	64	第75図	第5号住居址実測図	91
第55図	第6号住居址柱穴実測図	65	第76図	第5号住居址遺物出土状態図	92
第56図	第6号住居址炉址実測図	66	第77図	第5号住居址土器接合関係図	93
第57図	第6号住居址遺物出土状態図	67	第78図	第5号住居址出土土器実測図	95・96
第58図	第6号住居址土器接合関係図	68	第79図	第7号住居址実測図	97
第59図	第6号住居址出土土器実測図	69	第80図	第7号住居址出土土器実測図・拓影図	98
第60図	第6号住居址出土土器拓影図	70	第81図	第3号住居址実測図	99
第61図	第6号住居址出土炉石実測図	72	第82図	発掘調査区山土土器拓影図	101
第62図	第1号住居址実測図	74	第83図	確認調査区(道路幅部分)出土土器拓影図	102

## 図版目次

- 図版第 一 遺跡の遠景<東より撮影>  
遺跡より東方の景観
- 図版第 二 発掘調査の状況<第2号住居址>  
遺跡調査の状況<第6号住居址>
- 図版第 三 第1号土壤埋没状態<東側より撮影>  
第2号土壤埋没状態・遺物出土状態  
<南側より撮影>
- 図版第 四 第4号土壤埋没状態<南側より撮影>  
第5号土壤全景<南側より撮影>
- 図版第 五 第7号土壤埋没状態<南側より撮影>  
第7号土壤遺物出土状態(阿玉台  
式土器)<東側より撮影>
- 図版第 六 第9号土壤埋没状態<南側より撮影>  
第11号土壤埋没状態<南側より撮影>
- 図版第 七 第12号土壤埋没状態<南側より撮影>  
第13号土壤埋没状態<南側より撮影>
- 図版第 八 第1号住居跡全景<北側より撮影>  
第1号住居址遺物出土状態(S字  
状口縁土器・纺錐車)<東側より  
撮影>
- 図版第 九 第2号住居址全景<北側より撮影>  
第2号住居址遺物出土状態<東側  
より撮影>
- 図版第一〇 第3号住居址遺物出土状態<南側  
より撮影>  
第4号住居址遺物出土状態<南側  
より撮影>
- 図版第一一 第5号住居址全景<北東側より撮影>  
第5号住居址遺物出土状態<東側  
より撮影>
- 図版第一二 第6号住居址全景<北側より撮影>  
第6号住居址遺物出土状態<南側  
より撮影>
- 図版第一三 第1号住居址柱穴P<sub>1</sub>(左), P<sub>4</sub>(右)  
底面の状態  
第4号住居址柱穴P<sub>1</sub>(左), P<sub>4</sub>(右)  
埋没状態
- 図版第一四 土壙出土土器 1~4(第2号上  
壤) 5(第7号土壤) 6(第11号  
土壤) 7(第13号土壤) 8~9(第  
15号土壤)
- 図版第一五 第4号(上2段)第6号(下段)住居  
址出土上上器・炉石・砾石
- 図版第一六 第5号住居址出土土器

## I はじめに

茨城県の久慈川と那珂川に挟まれた河岸段丘上に位置する大宮町は、面積約83Km<sup>2</sup>、人口25,546人を擁し、県北の産業・経済・教育・文化の面で中核的な役割を担っている。

昭和30年に近隣の玉川村・大賀村・大場村・上野村と世喜村・静村・塩田村の一部を合併して誕生した大宮町は、新町建設5か年計画を策定し、教育行政の面では老朽校舎の解消、中学校の統合促進などが実施されてきた。町の北部地区にある大賀小学校は、昭和43年に一部改築が行われてきたが、その後における校舎の老朽化も進み、社会情勢の進展と合せて、教育環境の整備が緊要な課題となっていた。町当局は、先般隣接する台地上の畠地に用地を求め、新たに校舎・運動場の建設を行うことに決定した。

しかしながら、この一帯は、かつて小学校の野球場造成に際し、縄文時代中後期の土器破片が出土したこともあり、また昭和50年には、茨城県歴史館の諸氏による先土器時代の遺物も発掘されており、考古学上著名な周知の遺跡である。

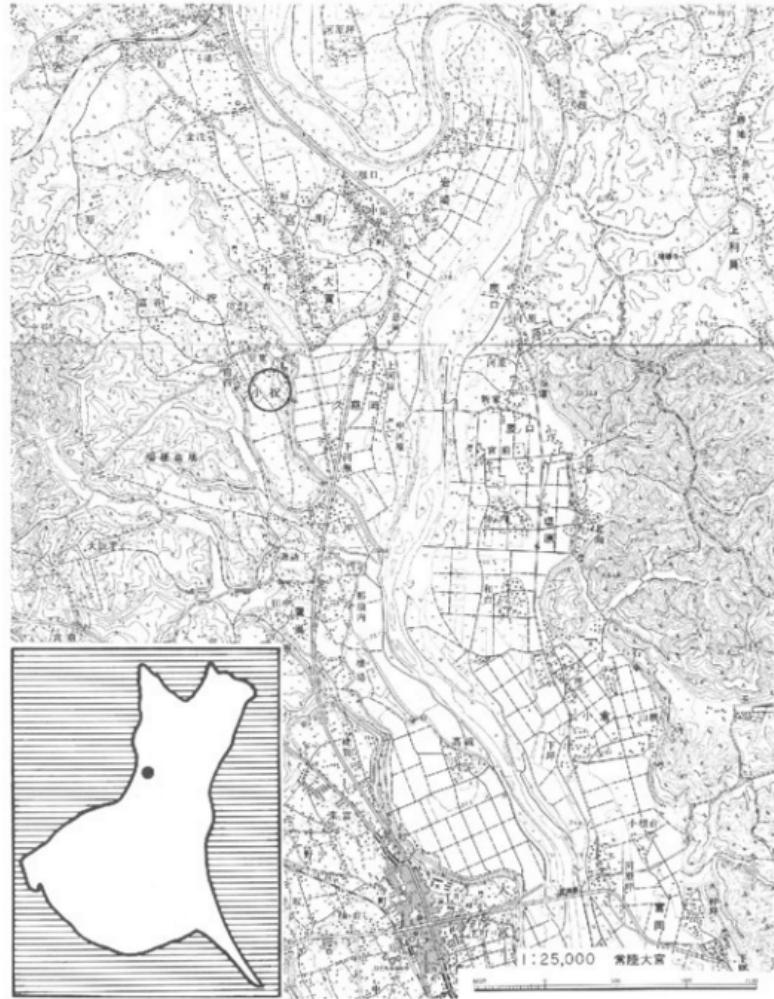
大宮町教育委員会は、県文化課と種々協議を重ね、最終的に発掘調査を実施して記録保存の処置を講ずることに決定した。この発掘調査には、当初の予定では外山泰久氏が担当者となって発掘を行う手筈になっていたが、諸般の事情から昨年の3月下旬に急遽それが変更され、私たちが引受けことになった。3月26日に梶原遺跡発掘調査会(会長鈴木勝一)を組織し、4月10日から校舎建設地の全面発掘と、道路拡幅部分、運動場の一部について遺構確認のための調査を開始したのである。発掘調査には、県文化課、調査会の諸先生はじめ地元作業員諸氏のご協力をいただき有意義な調査ができることに対し、あらためて深い敬意を表したいと思う。

## II 遺跡の位置と地勢

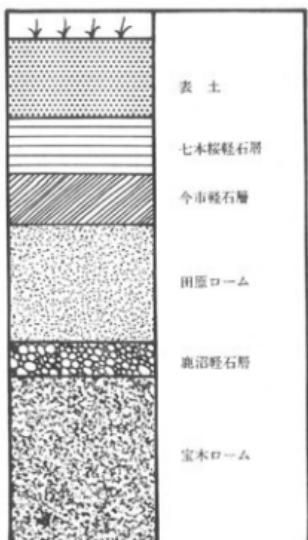
本発掘地点は、大宮町大字小祝字中道に所在する。ここでの遺物の散布状況をみると、隣接する梶原地内にまで広く散在しており、今回の調査に関連する遺構が埋没しているとみて大過ないであろう。この付近一帯は、先般県歴史館が先土器時代の遺物を発掘した地点を含めて、梶原遺跡と呼称しているので、本地点もその中に包括して取扱いたいと思う。

大宮町は、久慈川と那珂川にはさまれた那珂郡のほぼ中央に位置し、巨視的にみれば、北に標高200m前後の山地がつづき、南に標高15~30mの沖積地が河川の周辺に分布し、北高南低の地形的特色が認められ、河岸段丘もよく発達している。町の北部、大賀地区には、久慈川に沿っていくつかの中位段丘がみられるが、その中の一つに久慈川を臨んで南に細長く舌状に張出した小

祝の台地がある。この台地は、地形図からも窺知できるように、標高 65～64 m の平坦面を形成している。遺跡は、こうした台地の先端部より約 700 m ほど奥まった地点で、中央より東縁にかけて存在する。先土器時代に人間が居住はじめ、縄文時代の中後期をへて、弥生・古墳時代に



第1図 遺跡付近地形図



第2図 遺跡地層模式図

至るまで、極めて長期にわたり遷地されてきている。それは単に地形的な面ばかりでなく、食料資源の獲得あるいは生産に適合した場所であったからであろう。

遺跡の地層断面を観察すると、表土直下には、男体火山末期の噴出物である赤橙色の軽石(浮石)層が堆積する。これは七本桜軽石層・今市軽石層と呼ばれ、大宮町の村田地区、那珂川・久慈川に面する中位段丘面にみられる。この軽石層は田原ロームの上部に相当し、下部のロームは約1mづき宝木ロームに移行する。このロームの上部付近に黄色の鹿沼軽石層が10~20cmの厚さで介在している。本地点の層序概要は以上のように説明できると思う。今回発掘した縄文時代の土壤には、この宝木ローム上部、鹿沼軽石層の付近まで掘下げて構築したものがみられる。

### III 発掘調査と調査方法

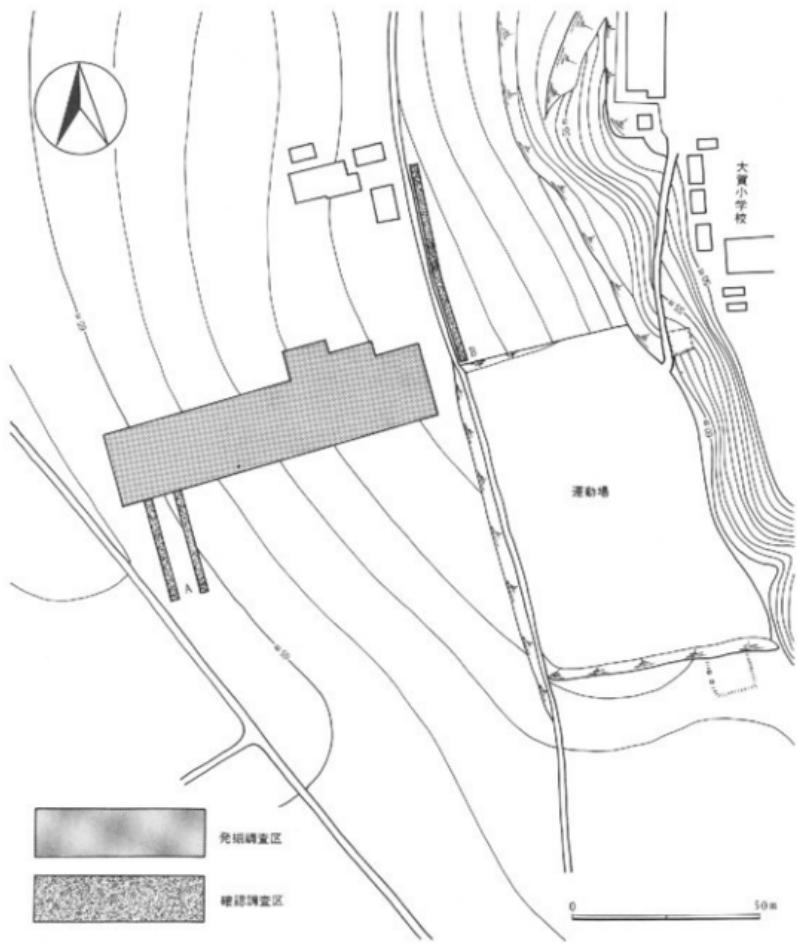
今回の調査は、大賀小学校の建設工事に伴う発掘である。調査の区域は、県文化課の指導により、町教育委員会と調査員との間で協議した結果に基づき、遺構が完全に破壊消滅してしまう範囲と、そうでない部分について、遺跡を保存する観点から次のように対処することとした。

① 校舎建設敷地 工事で完全に破壊されることが確定している。したがって、その範囲(1,700m<sup>2</sup>)は、当然のことながら全面発掘しなければならないのである。もし区野外に遺構が跨って発見された場合は、この部分を拡幅し遺構の全容を調査することにした。

② 校 庭 校舎南側の校庭になるところは、全面的に盛土となって保存されることに決した。しかし、農道東側の比較的表土が浅い部分については、遺構存否の確認調査を実施することにこれをA確認調査区とした。確認面積は112m<sup>2</sup>である。

③ 通学道路 校舎北側の農道を拡幅して通学路とする部分は、表土が50cmほど堆積しており、遺構が埋没していても直接破壊を受ける心配はない。けれども、拡幅部分(55m×2m)については、これをB確認調査区として遺構の有無を調べることにした。確認面積は110m<sup>2</sup>である。

校舎建設地内については、耕作土(表土)を全面削除した後に、一単位4×4mの方眼を組んで発



第3図 発掘調査区域図

掘区を設定した。原点は北西隅に置き、西から東に横軸をとりアルファベット記号を表示し、北から南の縦軸にアラビア数字(算用数字)を用いた。各グリットは、アルファベット記号に従って東側に順次拡張した。マイナス番号の数字は、遺構の一部が露出し完掘するために拡張したグリット番号を示す(第3・4図)。

A確認調査区は、校舎建設地内に設定したグリット横軸に直交して南側に幅2m、長さ28mのトレンチ2本を入れて試掘した。この付近は表土が浅く、僅かに20cm前後である。遺構・遺物は存在しなかった。

B確認調査区は、道路の拡幅部分に幅2m、長さ55mのトレンチを入れて確認作業を行った。トレンチの南半部に土壤、住居址らしい遺構の一部が認められ、北半部には、縄文中期の阿玉台式土器破片、磨消縄文を伴う弥生土器の破片などが少量出土した。

調査は、遺構が確認できた時点から記録することにした。すべての遺物を原位置のまま柱状に残し、出土地点・レベルを記録し、合せてその状態を観察して収納することは、個々の遺物を研究上の基礎資料として活用する際に重要な意味をもつことになる。したがって、私たちが從来から終始一貫堅持してきた基本方針である“原位置”論的調査法を、今回も可能な限り採用実践することにしたのである。

#### IV 遺構の分布状況

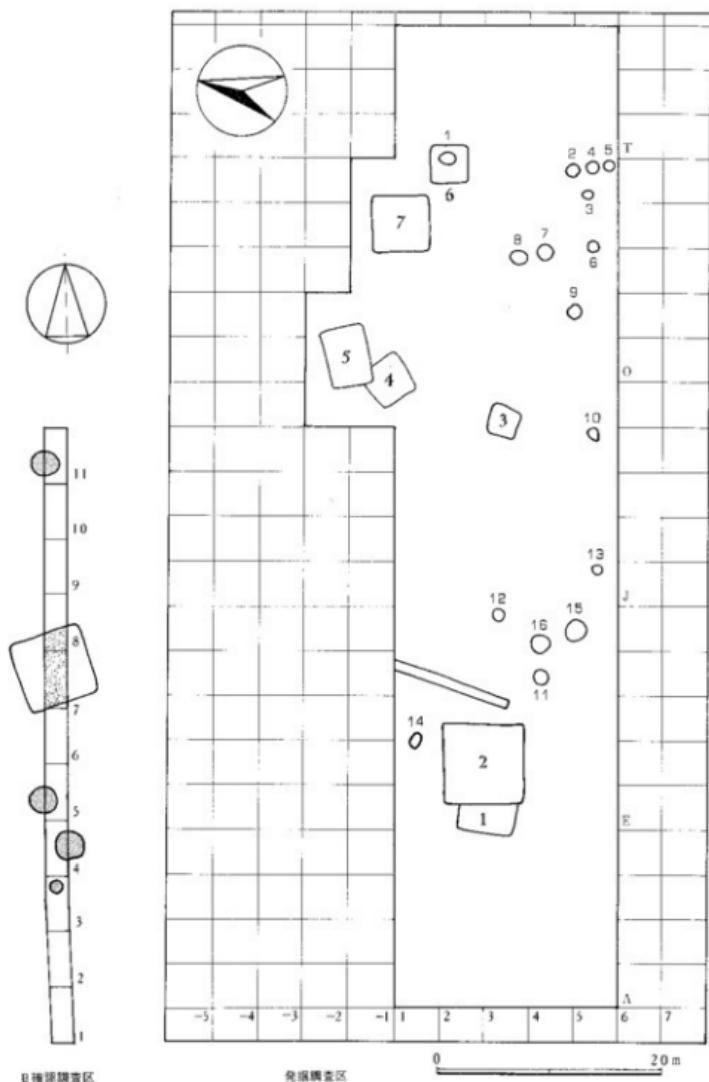
本遺跡は、『大宮町史』(昭和52年3月)によれば、大賀小学校グランド造成工事に際して、阿玉台式・堀之内式・加曾利B式土器破片、各種石器類、十王台式土器破片が発見され、昭和50年11月の発掘においては、先土器時代の尖頭器・石刃などが、ローム層上部から出土したことが記述されている。発掘地点の現地踏査は3月26日に行った。その折り表採した遺物は、すべて中期縄文土器の破片であって、弥生土器や土師器類は見当らなかった。こうした予備知識と土器破片の散布状況から、縄文時代中期の住居址または土壤の存在を予想していた。しかし、発掘を開始してみると、縄文時代中期以外にも弥生時代、古墳時代の遺構が出現してきたのである。

発掘区内の検出遺構は、土壤、住居址、溝状遺構などで、下記のように分けられる。

① 縄文時代中期土壤	16基	② 弥生時代後期住居址	2軒
③ 古墳時代前期住居址	2軒	④ 古墳時代中期住居址	2軒
⑤ 時代不明住居址	1軒	⑥ 溝状遺構(時期不明)	1本

縄文時代の土壤は、ほとんどのものが中期の阿玉台式期に属している。発掘区の西側(5基)と東側(9基)にほぼまとまった状態で存在するような傾向の片鱗が窺われる。

住居址は、弥生時代後期(十王台式)のものから、古墳時代前期(五領式)、同中期(和泉式)に属するものまで存在する。遺構数は予想外にすくなかったけれども、未発掘の部分には、こうした種類の遺構が多数埋没し、大きな集落を構成しているように思われる。



第4図 遺構(住居址・土壤)分布図

## V 繩文時代土壌の調査

今回発掘した土壌は、すべて縄文時代中期の前半に属しており、その総数は16基となる。遺構分布図からみた土壌の散在状況は、発掘中央より西側のH・14グリットと東側のR4・5グリッドを中心とした地点に、それぞれのまとまりがみられ、未発掘の南側にひろがるように考えられる。この時期の住居址が未発見なので、これと土壌がどのように関わっているか不明である。

土壌の平面的な形状は、円形または不整円形を呈するものが多く、その規模は、一覧表に示したように大小さまざまで一定しない。断面形は大部分底部が外方に大きく開き袋状を呈する。この中には開口部の大きさにくらべ、頸部が著しく狭くなり、深さ1mを越える土壌もある。これは底部の掘削と排土にかなりの困難をきたすであろう。このような土壌は、頸部付近の壁面に崩落がみられ、また危険も伴うため半蔵方式による平面発掘を実施した。結果的には、埋没土砂の観察と断面図の記録をより一層正確なものとすることができた。

出土土器の大部分は、縄文時代中期のものであるが、阿玉台式ないし東北南部の大木7b式・同8a式に対比される土器群、更にはこの地域に発達をみた日立市歴史遺跡第7群土器を指標と

縄文時代土壌一覧表

(計測単位 cm)

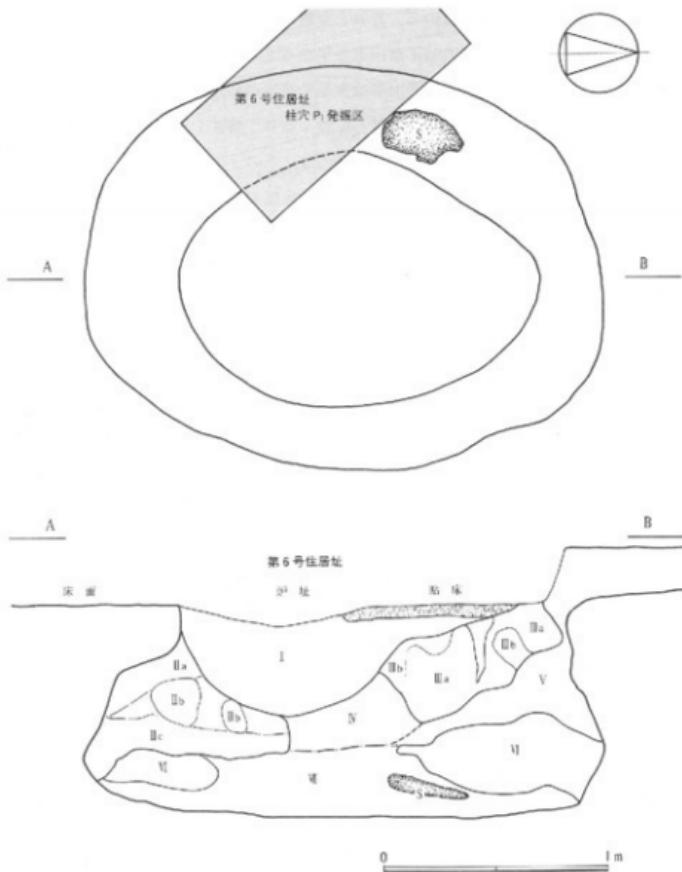
番号	平面形	開口部	頸部	底部	深さ	出土 遺物	備考
D 1	椭円形	200?	110×160	180×230	120	阿玉台式土器少量、凹石1個。	第6号住居址構築時に上部破壊
D 2	略円形	120	60?	125×130	65	阿玉台式~大木7b式	
D 3	椭円形	70×90	63	140	73	阿玉台式土器少量	
D 4	略円形	110	65	150	100	阿玉台式土器少量	
D 5	円形	100	95	135×140	50	阿玉台式土器少量	
D 6	略円形	160	90	160×170	137	阿玉台式土器少量	
D 7	略円形	145×160	110	180×200	110	阿玉台式土器少量	
D 8	略円形	110	—	230×240	95~110	阿玉台式土器、凹石	
D 9	椭円形	110?	80?	170×200	100	阿玉台式~大木8a式	
D 10	椭円形	100×125	—	—	36	—	風倒木痕?
D 11	略円形	125×130	40	200×210	110	阿玉台式土器少量	
D 12	略円形	110	65	165×180	95	阿玉台式土器少量	
D 13	略円形	100?	50?	215×220	110	阿玉台式土器、凹石	
D 14	楕丸長方形	85×125	—	130×160	45	阿玉台式土器少量	
D 15	略円形	190	—	220×240	145	大木8a式期土器	
D 16	略円形	160×170	—	240×250	120	大木7b式~同8a式期	

するような土器群に大別される。

### 1 第1号土壤(第5・6・7図、図版第三)

本土域は、第6号住居址の炉址の直下に存在する。住居址床面の精査時には、全くその痕跡が認められず、炉址および柱穴(P<sub>1</sub>)の半裁発掘によって発見された土壤である。もし従来の方法を踏襲していたならば、完全に見落していったかも知れない。

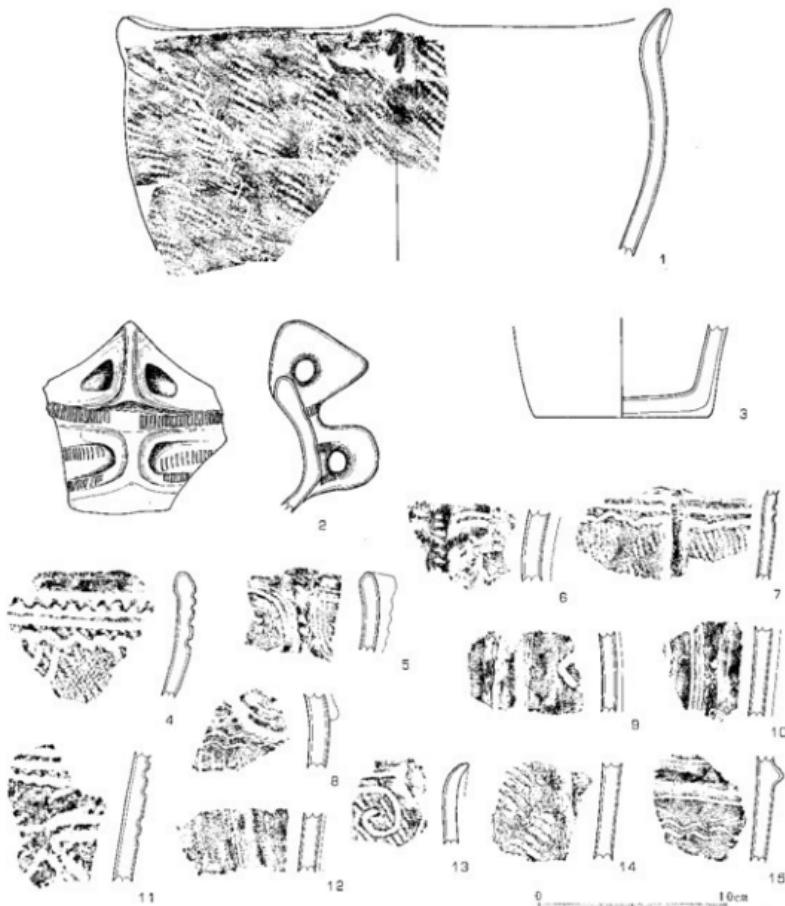
土壤は、第6号住居址構築の際に約25cmの深さまで掘削破壊され、炉址以外の部分には精巧



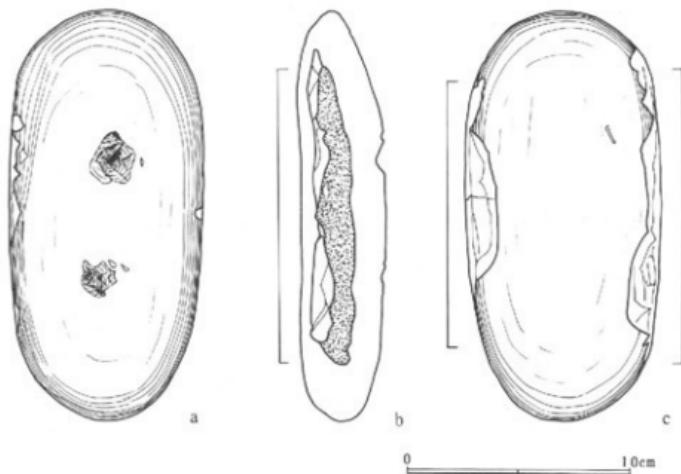
第5図 第1号土壤実測図

な貼床が厚さ6cmに施されていた。住居址床面で確認できたプランは楕円形に近く、底面の形状も大体これに一致している。確認面の大きさは、東西110cm、南北160cmを測る。断面形が袋状をしているので、開口部の直径は、南北方向で約200cm程度の大きさになると思われる。深さは破壊された部分を含めると120cmになる。

埋没土層は3層に大別される。A-Bセクションで堆積状態をみると 最下層(VII)は褐色土で



第6図 第1号土壙出土土器実測図・拓影図



第7図 第1号土壙出土石器実測図

周縁部にローム塊(VI)が存在する。その上部に粘土質の暗褐色土(IV)があり、周壁から中央に傾斜あるいはブロック状に赤橙色の軽石層(II b・III)が崩落したように堆積し、最上部はローム粒子を少量混入した黒色土(I)となっている。炉址の北側の土壤面は、住居址の壁際まで貼床が施されている。土壤内の土砂は、入為的に埋め戻したものと、頸部付近の軽石層が崩落して堆積したものとある。これについては後述する土壤の中に典型的な事例が存在する。

出土遺物は少量である。西壁寄りの底面上 12cm の褐色土内に大形の自然石をはじめ、土器の破片は底面付近から出土した。土器は、無文地の上に隆起線文を貼付し、半截竹管工具で有節線文や角押文を配したものと、地文に繩文を有し竹管文の刺突列を加えたり、平行あるいは波状の角押文、渦巻文などの複合文様がある。小波状を呈し外反する口縁に小さい突起を有する 1 は、斜繩文と結節文を組合せている。下小野式に相似した意匠文をもつが新しくなると思われる。

石器は、最大長 18.3 cm、幅 8.5 cm、厚さ 3.8 cm の扁平な自然石の片面(a)に 2 個のくぼみ、両側縁に長さ 12~13 cm、幅 1.5 cm の敲打による使用痕を残している。

本土壙は、中期前半に構築されたものと考えられる。阿玉台系と日立市諿訪遺跡に多出した第 6・7 群近似土器(諿訪系)が混在して発見されている。

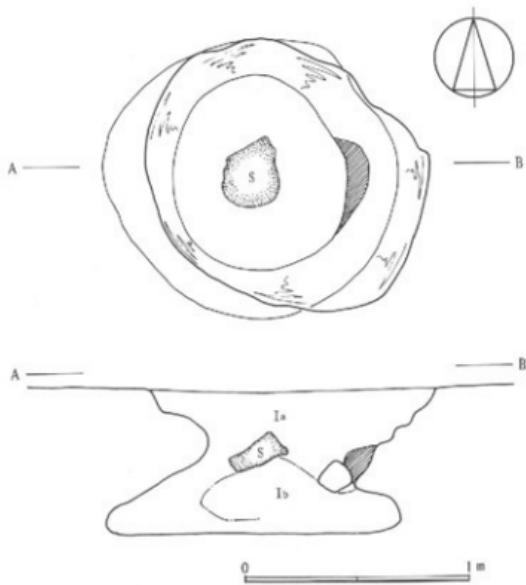
## 2 第2号土壌(第8・9図、図版第三・図版第一四1~4)

本土壌は、発掘区の東端、S4グリット内の第4号土壤北側に位置する。

確認面でのプランは、西側が略円形を呈しており、東側にプランの乱れが目立つ。これは土壤の最も狭くなる頸部の壁(赤橙色の軽石層)が崩落したときに、これに続いて上部の壁面も崩落したために多少変形したことは確かである。土壤掘削時の形状は略円形であったと推察される。

開口部の直径は約120cm、底部は約125cm、深さ65cmを測る。断面形は底部を大きく外方に開いた袋状を呈する。頸部(実測図A-Bセクションの右側)は、壁面から内部に突出した軽石層の土塊が中程まで崩落しているので、かなり広くなっているが、当初の大きさは約60cmくらいではなかったろうか。平面形のプランは確認時の形状であり、半截後の断面と多少相違するところもあって、平面図と断面図が一致しない。

埋没土はほとんど相似した同一性状の黒色土である。上層はローム粒子を僅かに混入し、下層は焼土粒子を含み黒色味がやや強くなる。これは漸移的に変化しており、明瞭な区分線を引くことが困難である。頸部付近の土層が、七本桜軽石層に相当し、この部分の東壁(断面図右側の斜線部分)が大きく崩れて落下している。掘削時の形状は西側壁と同様であったと思われる。



第8図 第2号土壤実測図

**遺物の出土状態** 土壌内の平面分布は、北壁周縁を除いて平均的に散在している。この散布状態を断面に投影してみると、①床面上に一括廃棄された復元可能な土器を含むグループ、②頸部付近から開口部に散布する小破片を主としたグループ、以上のように分けられるかも知れないが土壌の廃棄と直接かかわるグループは①であろう。

出土遺物の総数は62個を数える。内訳は、復元土器および破片が53個、凹石1個、自然石9個である。土器の表裏関係は、表15個(28%)、裏24個(46%)、立ち14個(26%)という割合を示している。

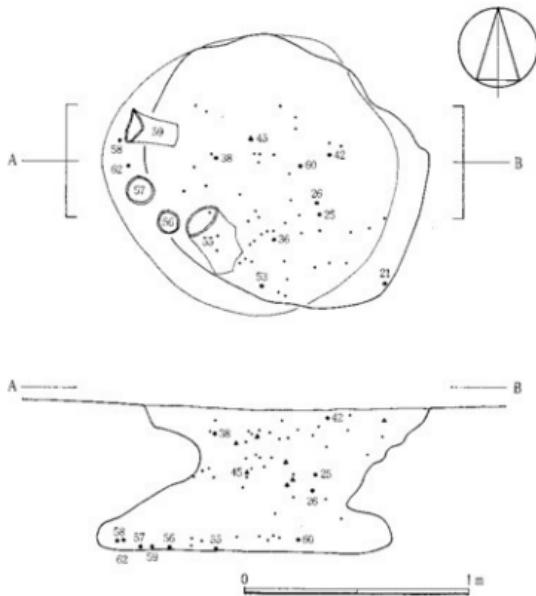
接合資料は2例存在する。資料1は底面上から出た復元土器であり、資料2は頸部付近のレベルから出土している(記載順序は、土器番号・表△・裏▽・立ち△・床上レベルcmである)。

接合資料1<深鉢形土器口・胸部> 55△0・58▽5 (接合距離70cm, 高低差5cm)

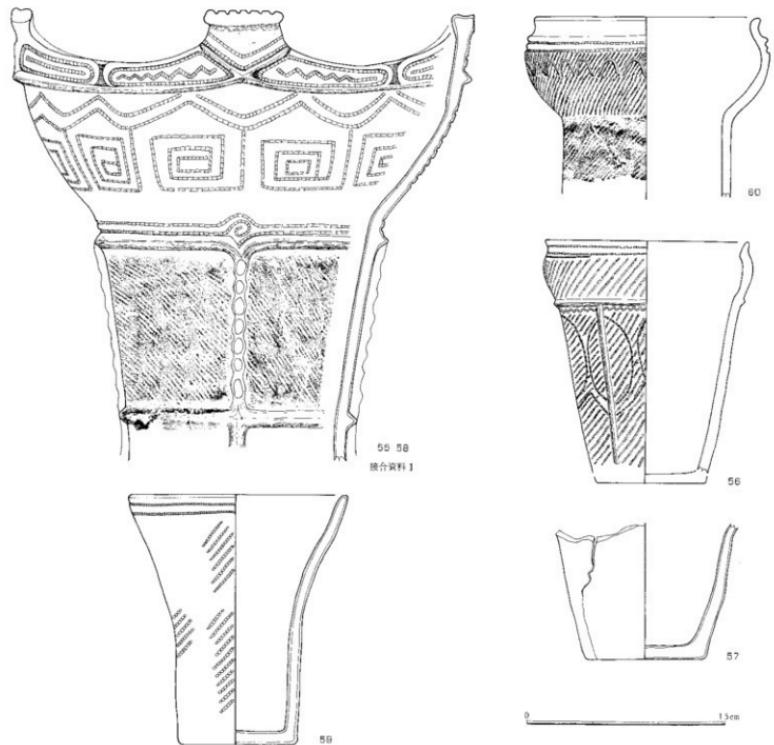
接合資料2<深鉢形土器口・辺部> 26▽26・25▽34 (接合距離5cm, 高低差8cm)

第10図の接合資料1を含めた56・57・59・60の土器は、その出土状態から一括廃棄されていることは確実である、土壌の時期決定に有力な資料となるものである。

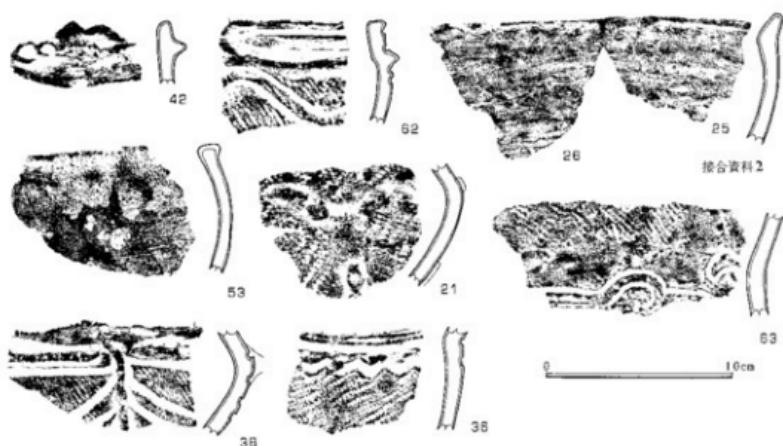
**土 器(第10・11図)** 出土土器は、底面上に一括廃棄された土器群と、上半部に散在する



第9図 第2号土壌遺物出土状態図



第 10 図 第 2 号土壤出土土器実測図



第11図 第2号土器群出土土器拓影図

土器群とに分けられる。前者は復元可能な上器を主体とし、後者はすべて破片類である。

接合資料1(55・58)は、底面上から出土した土器である。器形は、口辺部を内湾曲させて大きく開く深鉢形を呈し、波状口縁を形成する波頂部に把手、内側に段を有する。口径約35cm、胴下半部を欠損した現器高は約33cmである。

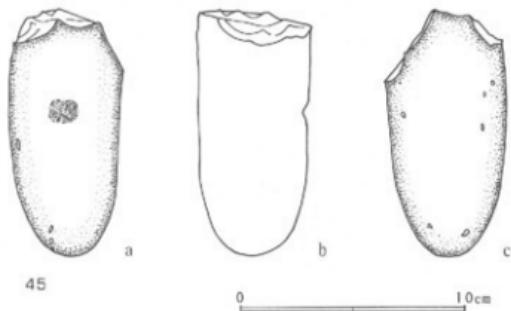
口辺部と胴部の文様帶は、頸部に貼付した隆起線で分離される。口辺部の区画内に施される沈線は、すべて半截竹管工具の外側を用いた有節沈線の手法である。こうした沈線は、隆起線に沿って、あるいは単独に施され、鋸齒状、弧状、渦巻状の方形区画、Y字状隆起線の上方空間に渦巻文を描出したりして、独特の文様構成をとっている。

胴部の文様帶は、頸部から垂下する隆起線によって4単位に区画される。その区画は、口縁の波頂部が基準となって割付けされ、そこにY字状の構成をとる。懸垂する隆起線は、胴部の中間で格子状に分割され、内部に縄文を充填する。縦位の隆起線上にかぎり指頭押圧が連続的に施される。

60の土器も底面上出土である。平縁の深鉢形であって、円筒形の胴部に内湾曲して開く口辺部がつき、口縁が外反する。口径約17cm、胴下部を欠損している。

口辺部は、細い隆起線で区画し、縄文を地文とした上に、半截竹管工具の外側を使用した有節沈線が2列に配され、その下方に逆U字状の沈線を並列して複合意匠文を構成する。胴部は地文の縄文だけが押捺される。

56の上器は、口辺部が弱く内湾曲して開く平縁の深鉢形で、口縁内側に稜をもつ。口径15.5cm、



第12図 第2号土壤出土石器実測図

底部を欠損している。現器高約17cmの小形の土器である。

文様帶は、縄文地の上に構成され、口辺部と胴部に分離する。口辺部は、口縁に沿って有節線文を2~3列配しただけで他の意匠文はみられない。胴部は、横と縦に配した細い隆起線文で区画され、鋸歯状沈線や隆起線を中心とする弧状を描く有節線文が対称的に施文される。

59の土器は、円筒形の胴部からゆるやかに外反して開く深鉢形を呈する。口縁は平縁である。口径約17cm、器高19cmを測る。

地文の斜縄文は、全体に浅く押捺されているために、器面が摩滅しているところは残っていない。口縁部の特徴的文様は、2本の縄文原体を押捺した側面圧痕文である。この施文手法は、東北南部の大木7b式に対比して考えることのできるものである。

57は、胴下半部に相当し、上部は内湾曲または外反する口辺部に続く、無文の土器である。この他に第11図62・63を除く破片が、土壤の上半部から出土している。

**石器(第12図)** 長楕円形の自然石を利用したもので、先端の一部(実測図の上端)が欠失している。これは使用によって折損したものらしい。実測図a面のほぼ中央に、直径約1cm、深さ4mmの小さいくぼみが1個存在する。現存長約11cm、最大幅5.3cm、厚さ5cmを測る。石質は砂岩である。

本土壤は、大木7b式期に廻棄埋没したものと見做される。

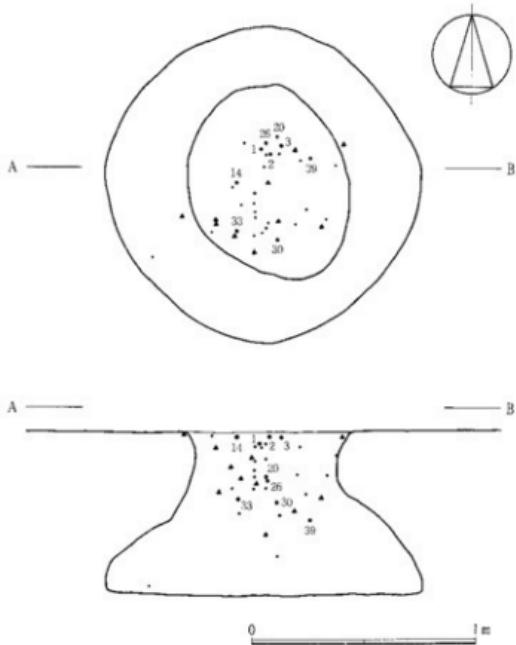
## 3 第3号土壙(第13・14図)

S 5 グリットの第4号土壙西側に発見された土壙である。保存状態は良好である。

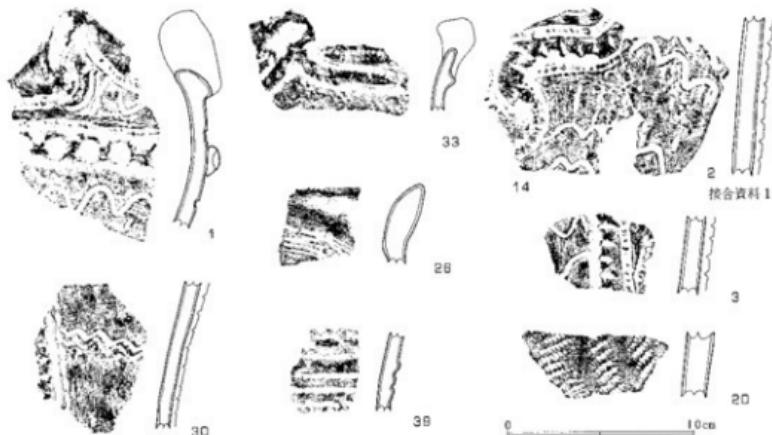
開口部のプランは楕円形に近く、その大きさは東西約70cm、南北約90cm、底面径140cm、深さ73cmを測る。開口部の直径より頸部が若干小さくなつて、内湾しながら外側に開き、底面は平坦となる袋状の断面を呈する。比較的よく原形をとどめている土壙である。

土壙内部には、ローム粒子を僅かに混入した軟らかい黒色土が充満し、壁面から崩落したような軽石層のブロックは全く混在していない。また、埋没土の断面を観察しても、上層と下層を区別できるような層相の変化は認められなかった。

土壙内における遺物の出土状態は、平面分布をみると、大部分の遺物は開口部の範囲内に散在する。その在り方を断面図に投影すると、下底部は皆無の状態で中層より上部に多く存在している。土器は小破片となつたものが多く、これらが砂岩質の自然石と混在して発見された。



第13図 第3号土壙実測図



第14図 第3号上塙出土土器拓影図

出土遺物の総数は40個である。その内訳を調べると、土器破片27個、自然石13個で石器は含まれていない。土器破片の表裏別の比率は、表11個(41%)、裏16個(59%)という数字になる。

このような表裏別の出土比率は、堅穴住居址の場合に比較してなんら変るところがない。この数字は、人間の廃棄(投棄)行動にかかる事象の一端と理解することができると思う。

土器は全体に小破片が多く、拓影図に使用できるもののが少ない。土器破片の中には、確認面近くから出土した胴部破片2と14の間に接合関係が認められる。

土器の意匠文は、無文地の上に隆起線を貼付し、それに沿って角押文・爪形文を配したり、沈線を波状に描くものが多くみられる。大部分の破片には隆起線文を伴っていて、その上部に刻目や指頭痕を押し並べている。こうした文様とは別に斜縞文を押捺し、隆起線文を付したり、または角押文を施文した破片も若干存在する。

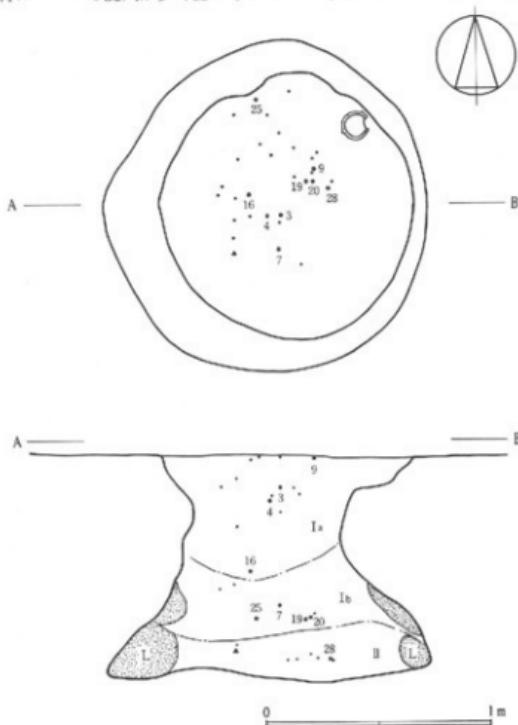
以上のような土器破片から、本土墾の廃絶は阿玉台式期と考えられる。

## 4 第4号土壌(第15・16図、図版第四)

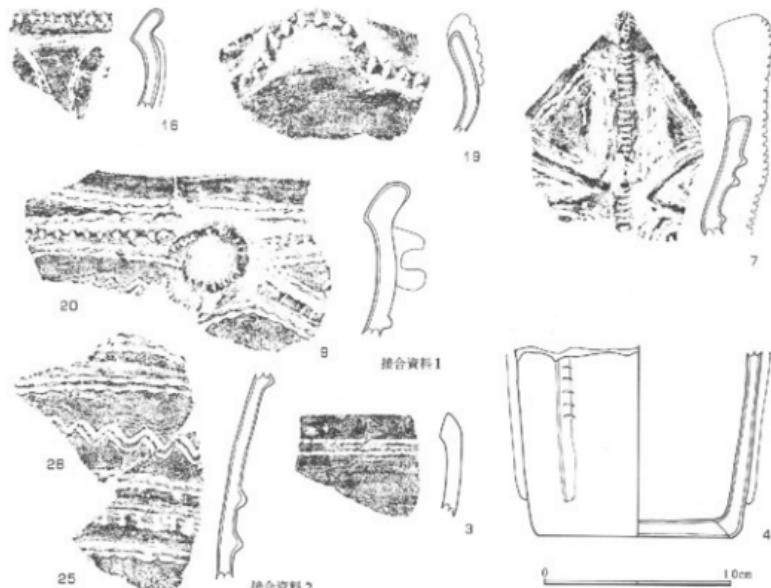
本土壤は、S 5グリット内に存在し、第2・5号土壤のほぼ中間に発見された。保存状態は良好である。

確認面のプランは略円形を呈する。開口部の直径は約110cm、頸部65cm、底径約150cm、深さ約100cmを測る。断面形は、開口部から頸部が狭くなり、袋状に底部がひろがっている。底面は西壁に寄った部分がすこし高くなっている。

埋没土砂は2層に区分できる。底面上の土砂(II)は、ローム粒子や木炭細片を混入する黒褐色土である。その上に黑色土が堆積している。これはローム粒子の混入度によって漸移的ではあるが2層に細分される。IとIIの区分線は、周壁付近が不明瞭であり、この部分には崩落したロームではないが、特にロームの混入が多く認められる。人為埋没を示す堆積である。



第15図 第4号土壤実測図



第 16 図 第 4 号土壙出土土器拓影図

土壤内の遺物の出土状態は、ドット・マップで示したとおり開口部の範囲内に散在する。断面図に投影したドットの垂直分布は、確認面から底面近くまでまばらに存在し、特に変わった傾向は認められない。

遺物は、土器の破片 28 個と自然石が 1 個出土している。この中に接合資料が 2 例存在する。接合資料 1 の口辺部は、平面的には近接しているが上下のレベル差が 70cm 程ある。下層から出た接合資料 2 はレベル差約 20cm、接合距離約 50cm を有する。おそらく同一個体の破片であろう。

出土土器は、隆起線の貼付が主体的文様になっているものと、これの施文がみられないものがある。前者は口辺部に環状の隆起線や棒状の区画文を配し、これに沿って半截竹管工具の内側で押したような有節線文を施している。洞部は格子状に隆起線を貼付し、有節線文や鈍歯状文を施文する。また隆起線上には刻目も付加される。後者の隆起線を貼付しない土器をみると、口縁に沿って 2 列の有節線文の施文が認められる。工具は半截竹管の内側を使ったものであろう。口縁は、波状を呈するものと平縁があり、内湾曲して開く器形である。口縁裏側は丸味がつくもの、稜をもつもの、稜線あたりから口縁を外側に折り曲げたようなもののがみられる。こうした土器の内容は阿玉台式 II 類のものに対比されよう。

## 5 第5号土壙(第17図、図版第四)

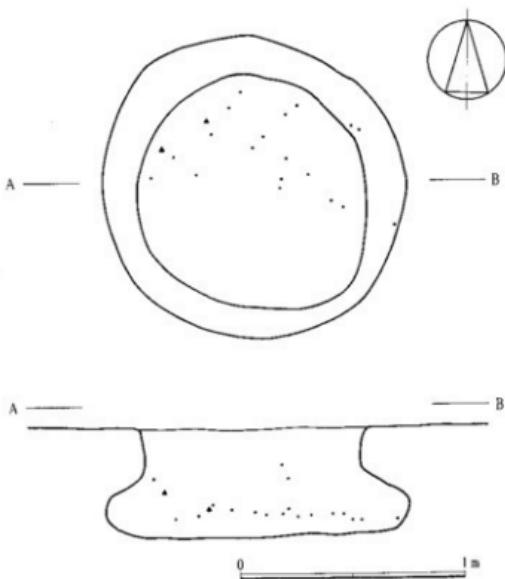
第4号土壙の南側、S5グリット内に発見された土壙であって、保存状態は良い。

形状は円形を呈する。開口部の直径は約100cm、頸部は僅かに狭くなつて95cm、底部は約140cm、深さ50cmを測り、規模の小さい袋状土壙である。

埋没土は、第3号土壙と類似し、ローム粒子を僅かに混入した黒色土だけが堆積し、セクション面からは層相に変化がみられない。

遺物の出土状態を記録したドットをみると、大部分が土壙の北半部にまばらに散在し、レベル的には底面上10cm前後のところに包含されているものが多い。

総数21個の遺物が出土している。その内訳は、土器破片18個と自然石3個である。土器破片は一体に小破片で拓影図を省略した。底部破片1個を除き、大部分のものには、隆起線文がみられ、両側に複列の角押文が施文されている。阿玉台式II類に含まれる破片であろう。

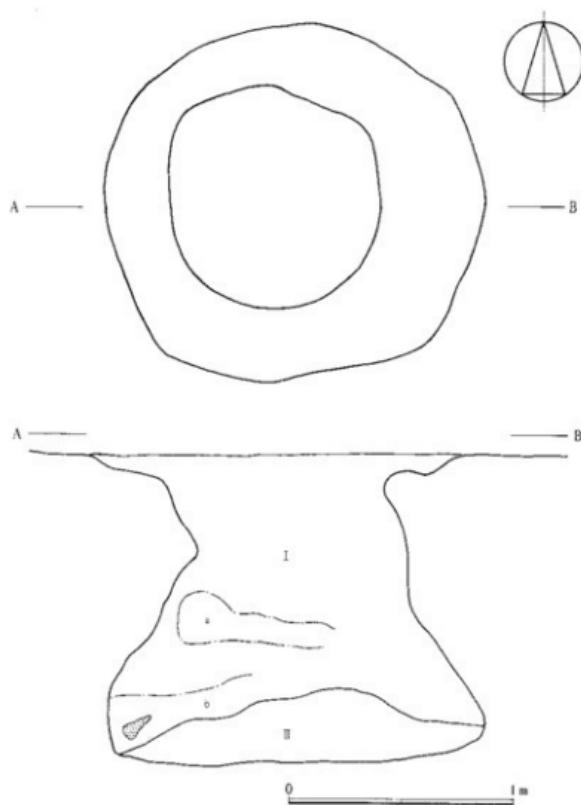


第17図 第5号土壙実測図

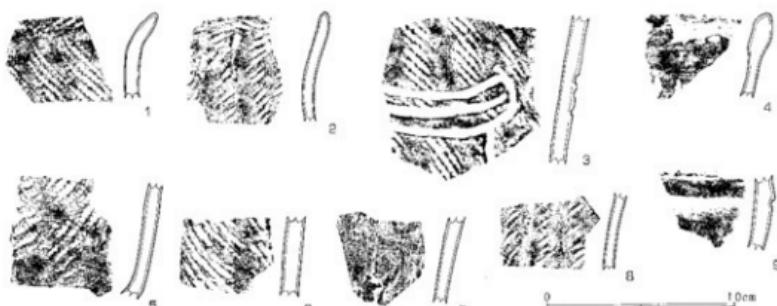
## 6 第6号土壌(第18・19図)

発掘区のQ・R 5グリットに跨って発見された土壤で、保存状態は比較的良好である。開口部のプランが不明瞭であったために、平面プランと断面図が一致していない。A-Bセクションで計測した開口部の直径は160cmを有する。頸部付近(確認面下約20cm)が赤褐色の軽石層に相当し、この土砂がI層下部に混入しているので壁面(頸部)が崩落していることは確実であろう。断面図の直径は90cmである。頸部から袋状にひろがって底部に移行する。底部の大きさは170cm、深さ約140cmを測る。

埋没土は、底面上にロームを主体とした黄褐色土がレンズ状に堆積し、その上部が黒色土とな



第18図 第6号土壤実測図



第19図 第6号土壌出土土器断面図

っている。a・bの範囲内は黒色味の強い部分で漸移的に変色する。この層の下部にロームのブロックや軽石層の落下したと思われる土砂が混在している。

遺物は、土壌の規模が大きい割に少量であって、頸部付近と1層の下部に11個の小破片が混入していた。無文地に爪形文列を並べたもの、降起線文に沿って角押文を配したものと、繩文地の上に太目の沈線を引いたものなどがみられる。

土壌の規模と形状からみて、他の土壌同様に阿飞台式期のものと考えられる。

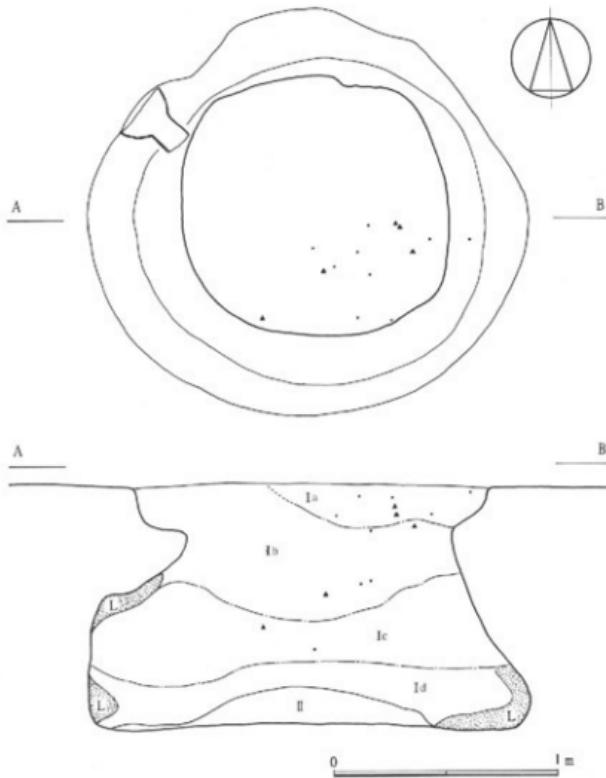
### 7 第7号土壌(第20・21図、図版第五)

第6号土壌の北側、Q4グリットに位置する。

プランは略円形を呈する。開口部の大きさは東西約160cm、南北約145cm、頸部約110cm、深さ約110cmを測る。底径は東西が約200cmであるのに対し、南北が180cmと若干短くなる。断面形をA-Bセクションでみると、東側(B)は頸部から大きく外湾しながら開き、西側(A)は外方に開き内湾気味に底部へ移行する。左右の断面は、かなり不均衡ではあるけれども、一応袋状の仲間に入れてよいだろう。底面はほぼ平坦である。

埋没土は2層に大別される。I層とII層の分離は、非常に明瞭であるが、I層内の細分は漸移的である。底面上にレンズ状の堆積を示すII層はロームの再埋没土である。周辺部には壁面の崩落を思わせるような軟らかいロームが認められる。I層(黒色土)はローム粒子の混入度合によって、a ローム粒子を僅かに含む、b ローム粒子をaより多量に含む、c 黒色味が強く焼土を混入する、d ローム粒子を多量に含む土層に分けられ、一応の目安として細分線を入れた。土壌断面図から窺われるように、ロームや黒色土砂は、自然的に土壌内に流れ込んで堆積した層相を示していない。

遺物の出土状態は、ドットを使った平面分布図でみると、中央より東南側に少量散布する程度で、その他の空間には深鉢形土器(北西壁寄りの底面上出土)を除き全く検出されない。土壌の規模

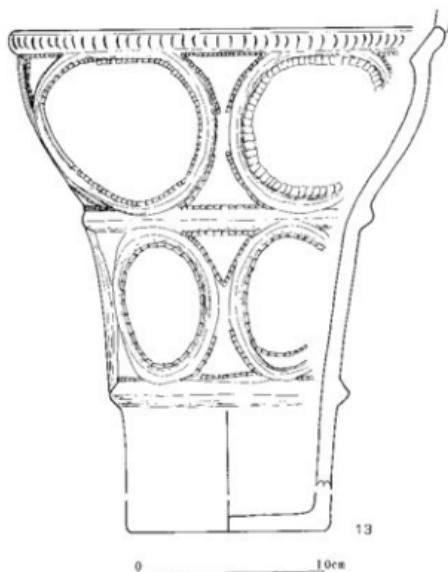


第20図 第7号土壤実測図

と比較して遺物は貧弱である。A-Bセクションに投影した垂直分布は、I dとII層中に深鉢形土器が存在し、他のドットはI cから開口部にかけて散在する。量的には開口部(I a)付近に多くなる。

土壤内から出土した遺物の総数は僅かに15個を数える。その内訳は、底部を欠失した深鉢形土器1個と小破片が9個、自然石が5個である。

復元された土器(第21図)は、口径23.5cm、高さ27cmである。器形は、キャリバー形の深鉢で、平坦な口縁の一端に把手が作られていたらしく幅10cmの痕跡を残し、内側に明瞭な稜が認められる。口辺部は幅が広くなり大きく内湾曲して開き、胴部は円筒形に近い形状となる。



第21図 第7号土壙出土土器実測図

文様は、口縁・頸部・胴部の中間に断面三角形または丸みをもった隆起線を横に貼付して、口辺部と胴部に区画を作り、各区画内は更に隆起線でもって円匯文(構内に近いものもある)が構成される。隆起線文は口縁のものだけに刻目が付されている。この隆起線の両側には、一般に半截竹管の内側を用いた細い爪形文、まれに幅広い爪形文が施される。またこうした爪形文を伴わない隆起線文だけのところもある。本土器の爪形文については、半截竹管の内側、まれに外側を使用しているところもあるが、これを曳きずりながら施文した黒浜式風の爪形文、つまり阿玉台式Ⅲ類中の爪形文に近似しているといえよう。

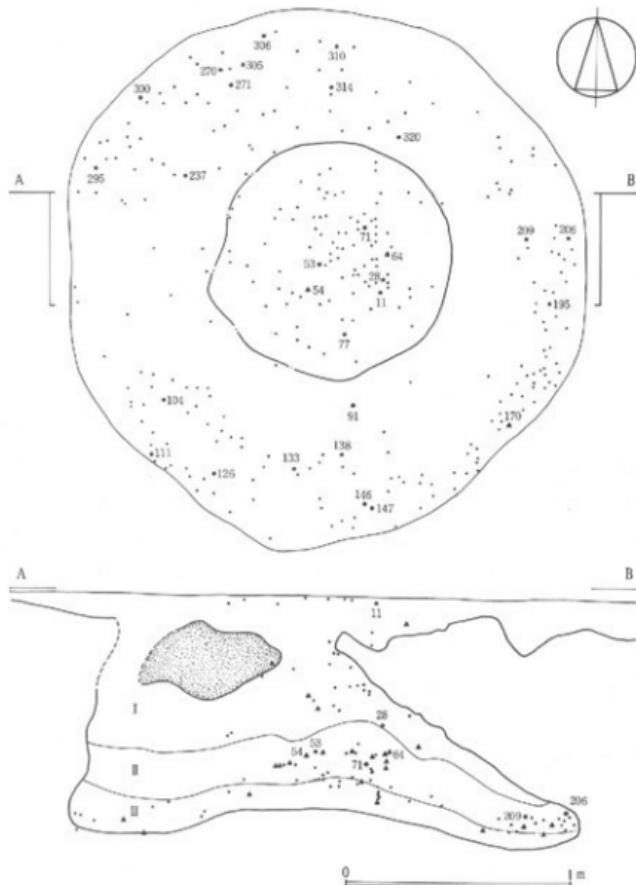
胎土に金雲母末を混入し、焼色は赤褐色ないし黒褐色を呈する。器面の整形は全体に粗雑である。

本土壙も阿玉台式期に廃絶されたものである。

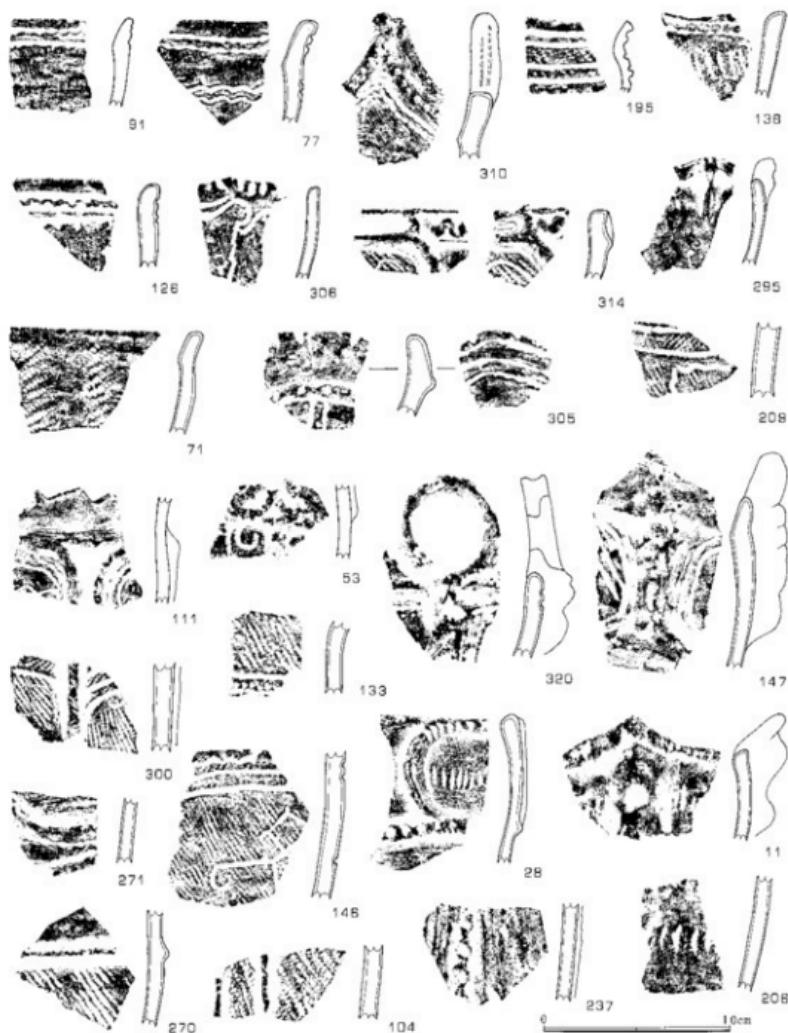
### 8 第 8 号 土 壤(第22・23・24図)

発掘区のQ・R 5 グリット内に検出した土壤である。

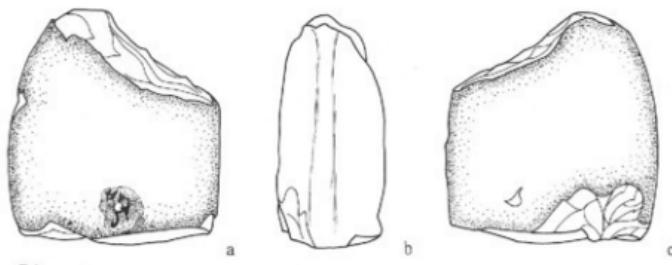
開口部の周辺が若干低くなり、西壁付近が大きく崩落していたために、プランの確認が非常に困難で、平面図の口径は一部推定によるところがある。形状は、他の土壤例からみて略円形であろうと思う。大きさは推定口径約110cm、底径は東西230cm、南北240cm、深さ中央部で95cm、周壁付近で110cmである。断面形は、東西壁の形状に著しい相違がみられ不均衡である。



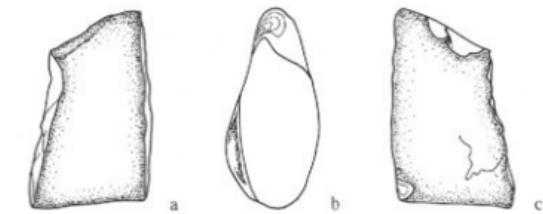
第22図 第8号土壤実測図・遺物出土状態図



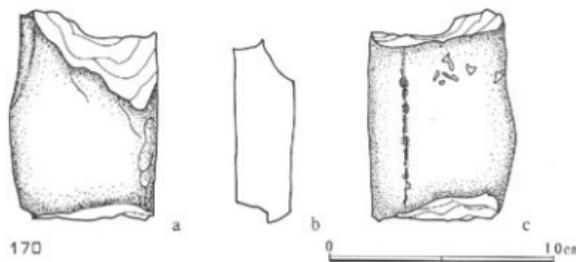
第23図 第8号土壤出土土器拓影図



54



64



170

0

10cm

第24図 第8号土壤出土石器実測図

埋没土は、明瞭な区分線をもって3層に分離され、次のように説明できる。

- I 黒色土 ローム粒子と木炭細片を僅かに含んでいる。この層中には、石英粒・スコリア  
・角閃石などを含んだ赤橙色の軽石層の大きな土塊が混入している。これは西  
壁から内部に突出した頭部が剝離したもので、第2号土壤でも認められた。
- II 茶褐色土 ローム粒子を多量に含んだ攪拌土砂である。
- III 黒褐色土 少量のローム粒子と木炭細片を混入した軟らかい土砂である。東端の区分線は  
漸移的である。

土壙内には多量の遺物が包含されていた。平面分布図でみると、開口部付近と東壁から南壁縁に沿う幅30cmの円弧を描く帯状空間に多く集積し、北西壁縁は全面に散在する程度である。遺物総数323個のうち開口部付近のⅠ層中に散在するものは11%（36個）で、他の大部分は垂直分布が示すようにⅡ～Ⅲ層内に含まれる。東南および北西壁縁の遺物は、当然のことながらⅢ層を中心いて89%（287個）が集積している。東南壁の袋状に細くなった先端部の遺物は、故意に詰込んだとは考えられず、中央底面上に土砂が三角形状に堆積したときに投棄転落・土砂埋没があったのではないかろうか。Ⅲ層東端の区分線が約40cmほど不明瞭（漸移的）になっていることは、おそらくこの間の事象と関係があるように思われる。

遺物の総数は323個である。内訳は土器破片218個、石器3個、自然石102個となる。土器の表裏関係は、表90個（41%）、裏109個（50%）、立ち19個（9%）という割合を示している。この関係は他の土壙の事例とほとんど変わらない。

出土土器は中期前半のものが出土している。縄文を地文として、その上に太い沈線で平行線文・渦巻文、角押文、三角形状隆起線文などを複合的に施した類は、初頭の五領ヶ台式に対応して考えられよう。

隆起線文を伴った多くの土器には、半截竹管の内側や柳葉状工具を用いて複列の有筋線文、角押文、平行沈線文などの施文がみられる。またアナグラ属貝殻の腹縁を押した138の類も僅かに混在する。こうした文様の土器は阿玉台式Ⅱ類の内容に相似している。

石器54は欠損品である。平滑なa面に直径2cmほどのくぼみを有し、b面中央に細長い彫痕がある。他の2個の破損品にも一部に使用痕が認められる。材質はいずれも砂岩質の扁平な自然石が選ばれている。

#### 9 第9号土壙（第25・26図、図版第6）

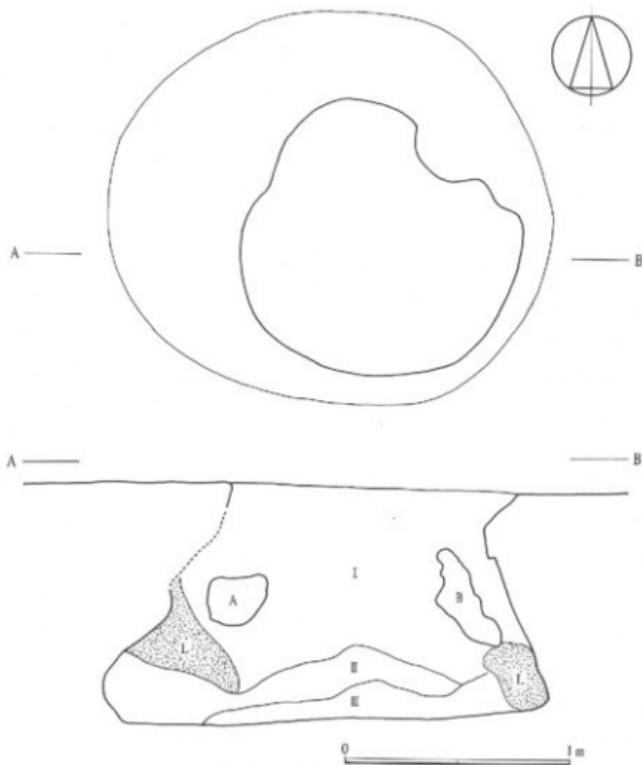
本土壙は、発掘区のP4・5グリットに位置する。

プランは略円形を呈する。開口部の南壁は、円弧を描くけれども、北側が壁の崩落によりかなり乱れている。本来の開口部は椭円形に近いものであったと思われる。

開口部の直径は、推定約110cm。頸部は周壁が全面に崩落して広くなっているが、おそらく、80cm前後であったと思う。袋状にひろがる底部の径は、東西200cm、南北175cmを測り、深さは約100cmである。底面は全体に平坦となっている。

埋没土は、次の3層に区分できる。区分線は比較的明瞭である。

- I 黒色土 ローム粒子を僅かに混入した軟らかい土砂である。頸部の内側に突出した部分が赤橙色の輕石層にあたり、ここが大きなブロックとなって剝離落下している。この剝離したブロック（A・B）は周壁にみられる。また底面周壁際にも、壁面の崩落と考えられるロームが約30cmの厚さに堆積している。



第25図 第9号土壤実測図

II 黄褐色土 挖削したロームを再埋没したもので、黒色土を混入しない。  
 III 暗褐色土 ロームに黒色土を僅かに混入し、微細な木炭灰を含んでいる。  
 埋没土砂は、以上のように説明でき、人為的に埋め戻されていることは確実である。  
 遺物は、拓影図に示した他に、同様の小破片が約20個と自然石(砂岩)1個があって、これらは  
 I層の黒色土中より出土している。土器は、隆起線文を伴うもの、無文のもの、縄文を施文した  
 ものに分けられる。隆起線文を伴う9は、その両側に有節線文が複列に施文された阿玉台式であ  
 る。無文の7は口辺部の破片である。1は大形の浅鉢形土器で、口縁の隆起帯は窓枠状に区画さ  
 れる。5も無文の口辺部であるが、幅広い口唇に刻目を有する。浅鉢形土器であろう。



第26図 第9号七塚出土土器折影図

縄文施文の2・3・4・6・8は、阿玉台式に属しない一群である。この手の土器の文様は、主として口辺部に隆起線で棒状文やY字状文を配し、あるいは溝巻文を構成したり、円弧を描く場合もある。胴部においては縦と横の区画にも使用される。こうした隆起線に沿って単列または複列でこそ太目の有節沈線を施したり、縄文地の上に有線沈線だけで渦巻、円弧、蛇行、直線その他の意匠文を配した例も多い。

この仲間はどうした訳か県内の報告例が非常に少ない土器群である。先に日立市御訪遺跡の土壙群から出土した土器の中に良好な相似資料が存在する。発掘を担当した鈴木裕芳氏が、第7群土器(第6群土器の一部を含む)として分類したグループがこれに該当しよう。同氏が注目したように確かに問題の多い土器群であり、今後の類例の増加を待ちたいと思う。

### 10 第 10 号 土 壤(第 27 図)

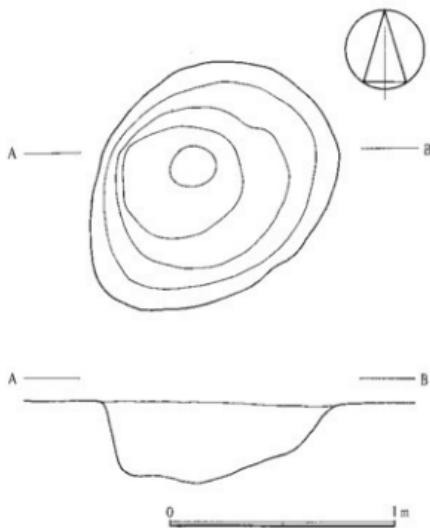
発掘区の東側と西側に分れる土壤群の中間、M 5 グリットに位置する。

平面形は椭円に近い、大きさは 100×120cm で深さ 36cm を測る。断面形は、西壁寄りが深く東壁に移行するにしたがい浅くなり舟底状を呈する。底面は全体に軟弱で袋状土壤にみるような固さが認められない。

埋没土は、全体にローム粒子を含んでいる土砂で黒褐色を呈する。A-B のセクション面には全く層相に変化がみられず、同一性状の土砂であろうと思われる。

遺物については、土壤内の埋没土中から土器破片、その他の石器類、自然石などが全然発見されなかった。

土壤の形状、埋没土の性状、遺物の皆無である点などを総合し、他遺跡の近似した土壤(大洗町千天遺跡ほか)に比べてみると似通ったところが多い。本土壤を縄文時代のものと考えるより、性格不明の落込み(風倒木痕)とした方がよさそうである。



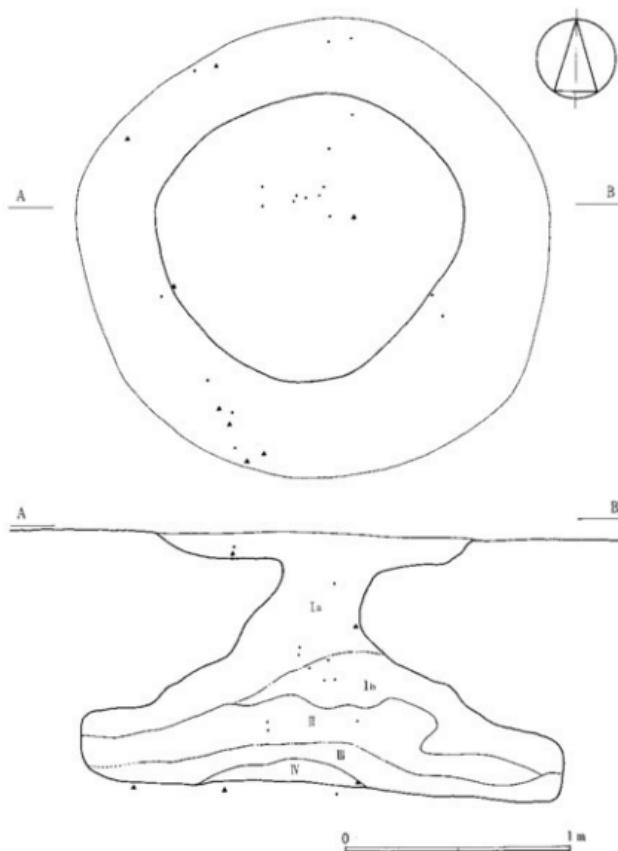
第 27 図 第 10 号 土壤実測図

## 11 第 11 号 土 壤(第28・29図、図版第六)

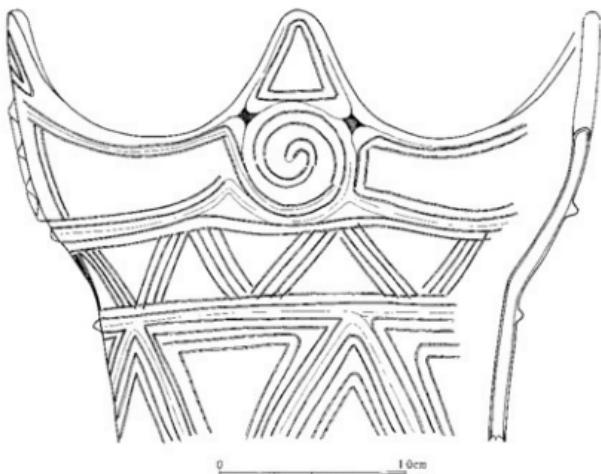
第16号土壤の西側、H 4 グリット内に位置する。保存度は、壁面に崩落がみられず全体として良好な土壤である。

確認面・底面のプランは略円形を呈する。開口部東西 125 cm、南北 130 cm、頸部は極端にせまくなつて約 40 cm、底面 210 cm、深さ 110 cm を測る。断面形は、皿状に大きく開く開口部から頸部をへて再び外方にひろがる袋状を呈する。

埋没土は、人為的に埋め戻されており、層相からみても自然堆積の状態を示していない。袋状



第28図 第11号土壤実測図



第29図 第11号土壤出土土器実測図

土塙の場合、その断面図は推定または想像の域をでないので、半裁発掘方式を採用し、より正確な断面図を作成する必要がある。その結果、埋没土は次の4層に区分できることが判明した。

- I 黒色土 上層はローム粒を僅かに混入し、下層はローム粒を多量に混入し、木炭粒も含んでいる。層相は下層に移行するほど褐色の度合が強くなる。I a と I b の区分線は漸移的に変色する。
- II 黄褐色土 中央付近にロームが多く、袋状に突出する周縁付近は黒色が強くなる。
- III 黒褐色土 黒色土とロームを攪拌した土砂で、中央付近が漸移的に変色する。
- IV ローム 再埋没したロームで軟らかい。

遺物は、各層に6～7個ぐらいの数で出土し、総数は27個(土器破片20個、自然石7個)である。本土壤の代表的な破片を復元実測すると第29図のような土器になる。口辺を内湾曲させた深鉢形を呈し、山形の大きな波状口縁をついている。文様は、隆起線で口辺に区画文や渦巻文、胴部に区画文を配し、隆起線に沿って半截竹管の内側を用いて沈線を施文している。工具の動かしかた次第では、部分的に平行沈線文、有節線文を構成する。また幅広の区画内にはこれの単独施文もみられる。胎土に金雲母末を多量に含んでおり、阿玉台式II類の特徴が窺われる土器である。

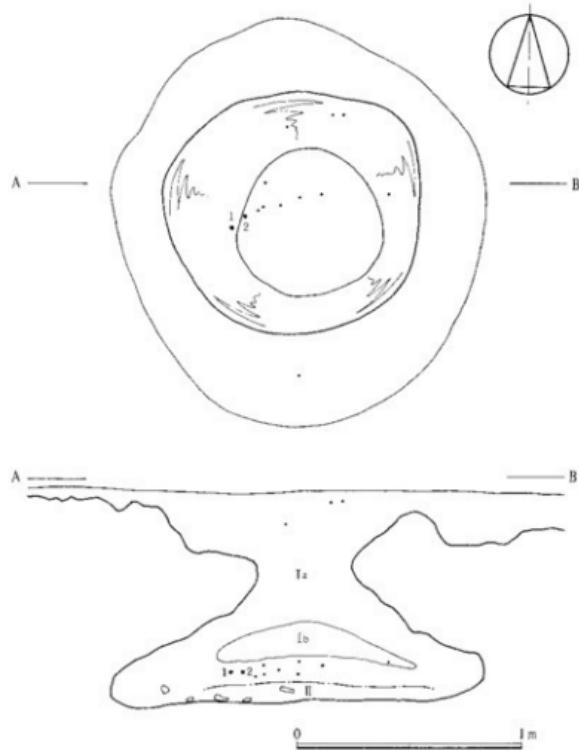
## 12 第12号土壙(第30・31図、図版第七)

第16号土壙の北側、14グリットに位置する。この付近のローム面は、全体に凹凸が多く、プラン確認に困難をきたした。

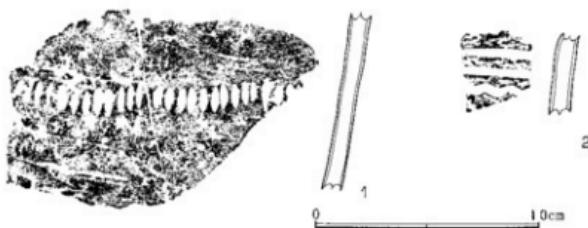
開口部の形状は、略円形であったように思われる。開口部は、皿状に浅く掘り込まれて直径約110cm、頸部は更に小さくなつて65cm、底部が大きく外方にひろがつて東西165cm、南北180cmを測る。深さは95cmである。断面形は、第11号土壙と同様に頸部が狭小で、それに比し底部が外反気味に大きく開く袋状をなしている。

埋没土は2層に大別されるが、周囲からの流入土砂ではなく、すべて人為的に埋めている。

I 黒色土 aは黒色土にローム粒・焼土粒を僅かに含む。bはローム粒をほとんど混入せず、全体に黒色味が強くなる。



第30図 第12号土壙実測図・遺物出土状態図



第31図 第12号土壙出土土器拓影

II 黒褐色土 ローム粒を多く含んだ土砂で、周縁は漸移的に変化しI層と区別が困難である。土器の破片は、非常にすくなく僅かに13個(開口部3個、I層下部10個)発見されたにすぎない。これに反し底面上からは多量(約30個)の砂岩を主体とした自然石が出土した。大きさは、最大長8×最大幅7×厚さ3cm程度のものが多い。これらの自然石をみると、底面に敷き詰めたものではなく、雑然と投げ込んだような状態であり、土壙との直接の関係はないように思われる。

土器の破片は、一般に小さく胴部に該当するものである。辛うじて図示できたものは、無文地の上に刻目を押し並べたもので、阿玉台式I・II類の胴部に意匠文としてよく施文される。また繩文を施文した上に平行沈線や波状文を配した類も出土している。

### 13 第13号土壙(第32・33・34・35・36、図版第七)

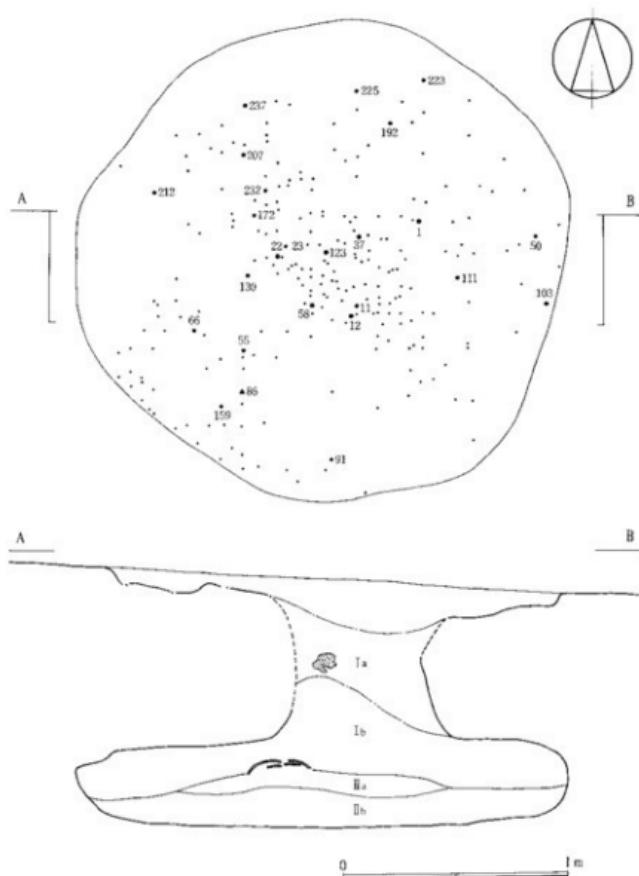
J 5グリットに位置する。開口部周辺のローム面に凹凸が認められ、明瞭なプランと大きさを確認できない。また頸部の壁面も若干崩落を受けている。

開口部は、この種の土壤から考えて略円形を呈するものであろう。大きさは90~140cm程度と思われ、頸部も軽石層が崩落し明確な掘り込みの線がでていない。直径はおそらく50cm前後であろう。袋状に張り出した底部の保存状態は良好で、東西220cm、南北215cmを測る。深さ110cmである。

土壤内の埋没土は、2層に大別でき更に細分が可能である。

I 黒色土 aは黒色土にローム粒を僅かに混入し、また頸部付近には、赤橙色の軽石層のブロックも混在する。下層のbは漸移的に変色し、木炭粒の混入が多くなる。

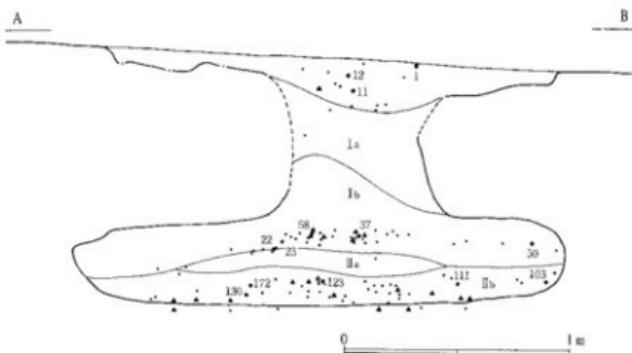
II 茶褐色土 全体に軟らかく、ロームと黒色土を搅拌した上で、bの開口部直下に相当する中央付近は特に焼土粒の混入が目立つ。また部分的にローム混入の度合によつて灰褐色を呈するところもみられる。



第32図 第13号土壙実測図・遺物出土状態図

**遺物の出土状態** 本土壙の遺物は多量である。平面分布図に記録したドットをみると、当然のことながら開口部付近に多く集積し、周縁に移行するにしたがい散布数が少なくなる。これの垂直分布の実態は、投影図のドットを観察することにより一層明瞭に理解できよう。ドットの分布は、開口部付近にまばらに散在し、I層の下部からII層にかけて帯状の集積(第34図23の土器も含む)がみられ、更に底面上にも多量の遺物が存在するというような傾向を示している。

遺物の総数は244個を数える。その内訳は、土器破片173個、四石1個、自然石70個である。



第33図 第13号土壤遺物出土状態図

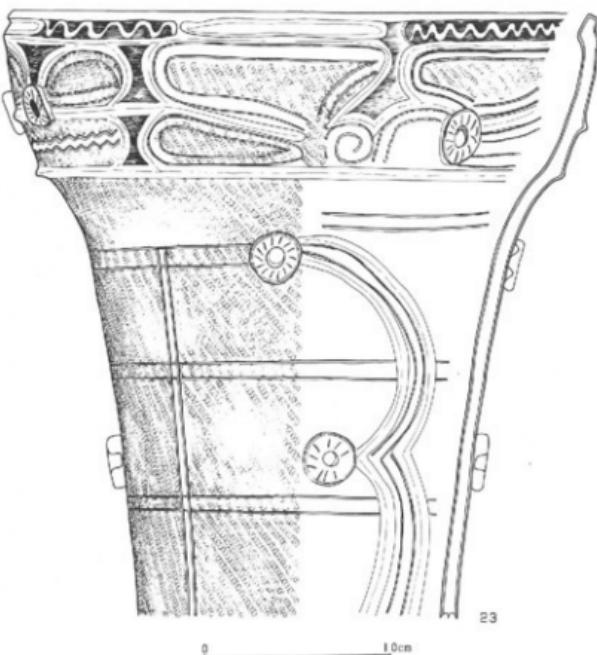
土器破片の表裏の比率を調べると、表80個(46%), 裏70個(41%), 立ち23個(13%)となる。土器は破片数が多い割りには無文の小破片が多い。

実測図と拓影図に示した土器は、層位的に区別すると次のように分けられる。

- ① 開口部付近 1・11・12
- ② 第I層下部 22・37・50・55・58・23
- ③ 底面上部 66・91・103・111・123・130・159・172・192・207・212・223・225・232・237

**土 番(第34・35図)** 開口部付近(確認面)出土の土器には、口縁に沿って半截竹管工具による有節線文を施し、内面に稜をもつ1をはじめ、複列の有節線文を伴う弧状の把手、胴部に刻目文を有するものが存在する。

第I層下部の土器は、大部分が無文の破片である。この中に断面三角形の隆起線に沿って有節線文を付した阿玉台式1類に該当する破片が若干認められる。50の胴部破片はこの仲間である。隆起線の一部をV字状とし刻目文を複合させた58、太目の隆起線上に指頭文を押した胴部破片55繩文地の上に隆起線を貼付し、その間に平行沈線を配した37(底面上部出土の225と同一個体と思われる)のような種類も存在する。第34図23の土器は底部を欠失している。器形は内湾曲して開く深鉢形である。口辺部と胴部は隆起線によって二分される。口辺部文様帶は、隆起線で2段の棒状区画が行われ、内側に平行沈線またはそれが有節線化されたもの、あるいは単独で鋸歯状に施したり、区画の接点には所々に盲孔を伴う円形浮文を貼付し、まれに沈線で渦巻文を描出する部分もある。口縁の細長い区画内にも枯土紐が波状に充填される。胴部は、平行沈線による格子状区画文、円弧を描く隆起線を組合せた文様構成をとる。ここでも隆起線の接点に円形浮文が付加される。器面全体に繩文が付され、金雲母粒を多量に混入している。焼成は良好である。

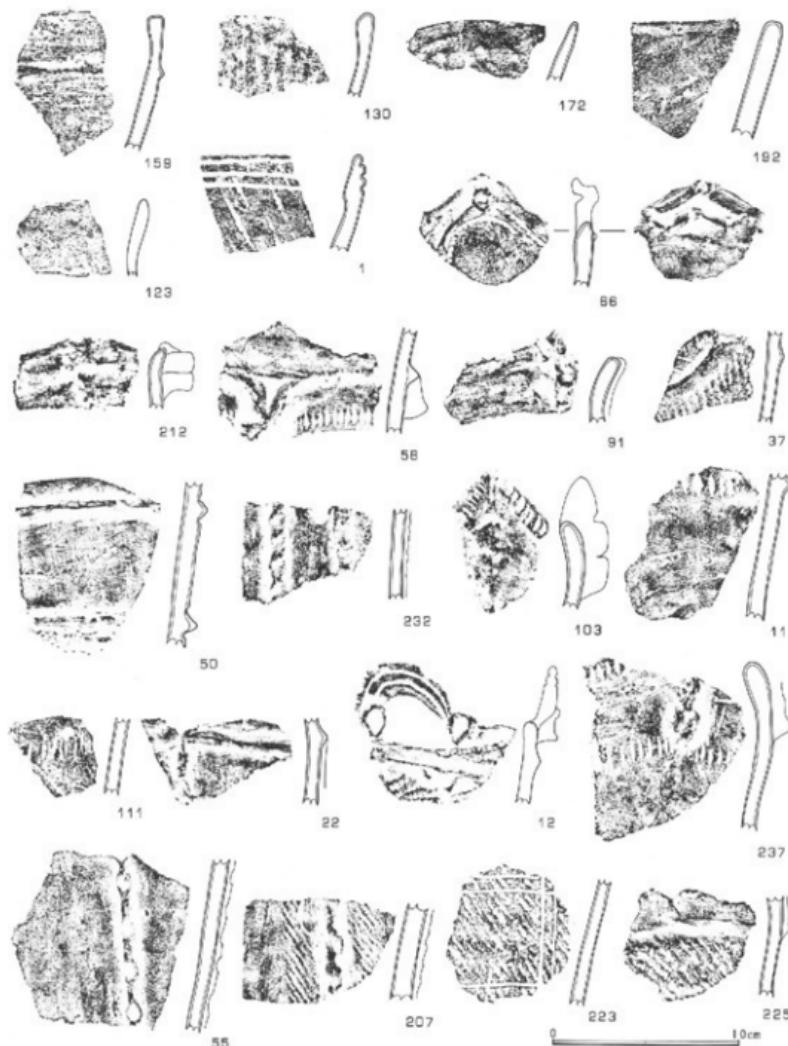


第34図 第13号上壙出土土器実測図

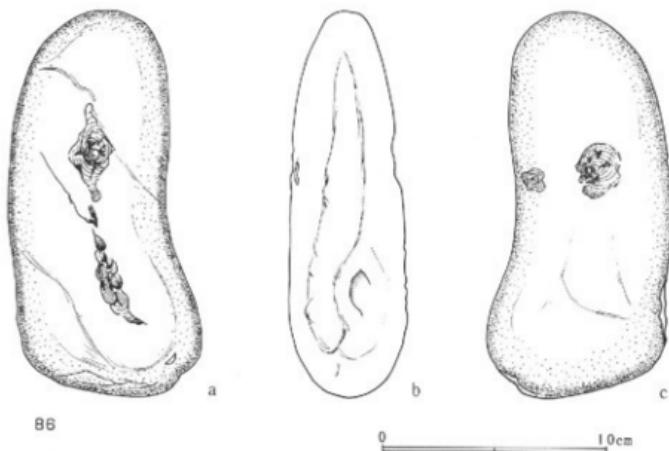
底面上部出土の土器は、波状口縁の頂部に小さなつまみ状突起を付した 66 や無文の 212 などが古手のものに該当し、前者の文様に隆起線や有節線文、口縁内面に三角形状の沈刻文が施されている。無文の中には浅鉢形に属する 192 も含まれている。237 の口辺部は突起と爪形文を複合させたものである。232 の胴部は 55 と同じ隆起線が垂下し、またこの手の隆起線区画内に縄文が縦位に押捺される 207 もある。同じ縄文施文の胴部でも 223 の場合は、半截竹管工具で縦と横に格子状に区画した文様構成を示す。この縄文は第34図 23 の原体と同一である。

**石 器(第36図)** 遺物番号 86 の石器で底面上 5 cm の褐色土から出土した。最大長 17 cm 最大幅 8 cm、厚さ 5 cm の自然石である。a・c 両面に直径 1.5~2.0 cm のくぼみがあり、b 面にも細長い使用痕をとどめている。

阿玉台式期に握削・使用・廃絶された土壙である。



第35図 第13号土壤出土土器拓影図



第36図 第13号土壌出土石器実測図

## 14 第14号土壌(第37・38・39図)

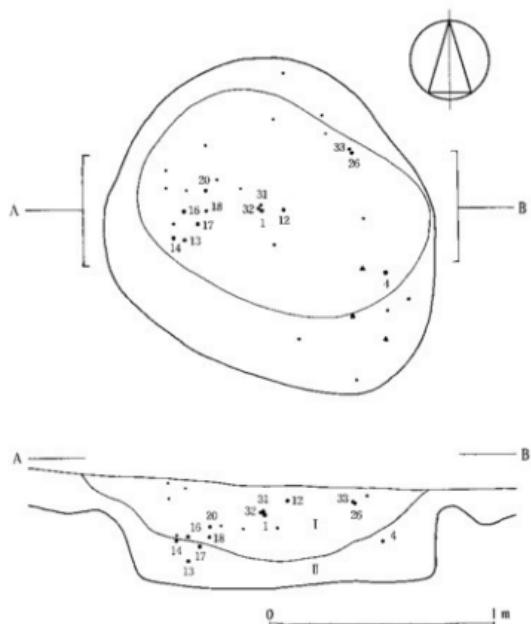
第2号住居址の北側、F・G 1グリットに位置する。本土壌は、ローム上面の黒褐色土に落ち込みらしい土層の変化を認めたが、全体の明確なプランは把握しえなかった。

開口部の形状は、不明瞭ながらも円形ではなく隅丸長方形に近いように判断された。大きさは $125 \times 85\text{cm}$ ではば東西に長い。底面は開口部よりも丸味をもち $130 \times 160\text{cm}$ を測る。深さは僅かに $45\text{cm}$ である。側壁は東側一帯が垂直に近く、西側部分が若干傾斜して掘り込まれている。底面は平坦で特にかためたような痕跡はみられない。

埋没土は2層に識別できる。I層はローム粒を僅かに含んだ黒色土である。II層はローム粒が上層よりも多く混入して黒褐色を呈する土砂で軟らかい。

遺物はI・II層中に発見されているが、その数は記録されたドットが示すとおり、決して多いものではない。平面分布を観察すると、主として東西の両側縁に多く散布していて、それが垂直的にはI層からII層にまたがっている。大部分の遺物は、I層の区分線の上部から確認面の間に収まるが、東南側周縁に散布する破片はII層内にまで含まれる。I層とII層内の土器は、特に大きい型式上の相違は認められない。

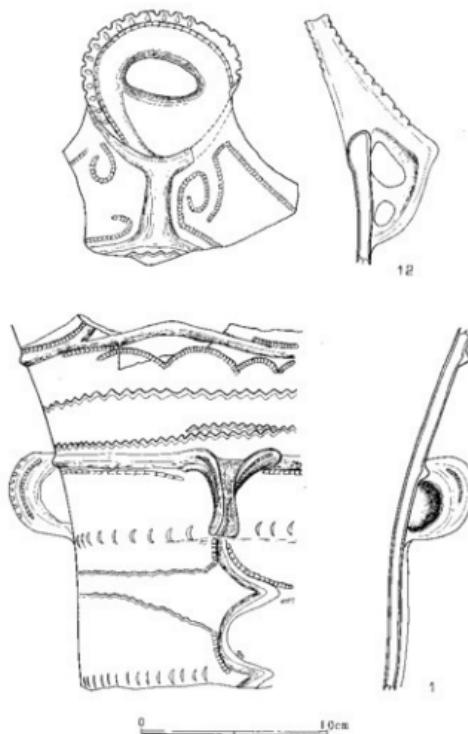
遺物の数量は記録したもの33個である。その内訳は、土器破片30個と自然石3個に分けられる。なお、遺構確認時にも約30個近い破片が出土した。



第37図 第14号土壤実測図・遺物出土状態図

**土 器** 実測図と拓影図に示した土器はすべて阿玉台式に属する。阿玉台式の前半を規制する内容は、隆起線を主体として單列の角押文や有節線文が多用され、扁状把手が発達し、更には隆起線の両側に沿って細い半截竹管工具などを用い複列の角押文・有節線文を主文様とする一群であるといわれる。前者は、本式初頭I類の意匠文を構成する要素となり、後者は、それに続くII類土器の文様指標と考えられている。

本土壇内の土器および確認時出土土器(3桁数字使用)の主要な破片は、第38・39図に収録したもののが大部分である。それらの土器を観察すると、口縁部は波状を呈するものが多く、その波頂部に円形(扇状)・横状把手を付加し、内面に稜を伴っている。口辺部は、断面三角形状の隆起線文を貼付し、波頂部を中心に三角形や長椭円形の区画文が左右に展開する。この隆起線の区画文に沿うように1列の有節線文が施される。区画文の大きさによっては、更に渦巻文や円弧文などが加飾されて、口辺部の文様帶を構成している。胴部の文様も隆起線文の使用が顕著である。縦に円弧を描く隆起線を接続させながら垂下し、口辺部の手法と同様に有節線文を施す。またその空間に锯齒状沈線や弧状の有節線文を配したり、爪形文列を加えたり、把手を取りつけるなど複合



第38図 第14号土壙出土土器実測図

的文様の構成を行っている。胎土に多量の金雲母粒を含み、黒褐色ないし茶褐色を呈するものが多くみられる。器厚は7mm程度で焼成は良好である。

第38図の口辺部と胴部、第39図18の拓影は、施文工具、施文法や胎土、焼成、色調などが驚くほどよく似ている。おそらく同一個体ではないかと思われる。この他にも胴部破片の中に近似したものがある。以上の土器は、多くの点が阿玉台式I類に相似している。

またこうした類と相違して、口縁に沿って半截竹管工具の内側で2本の有節線文を表出し、大木7b式の施文法に似通ったものや、細い繩文地の上に有節線文を垂下させているものも若干存在する。こうした内容のものは、阿玉台式II類の中に類例が求められよう。

本土壙の形状は、他の袋状土壙と著しい相違点が認められるけれども、阿玉台式期に掘削・使用・廃絶されたものと見做される。

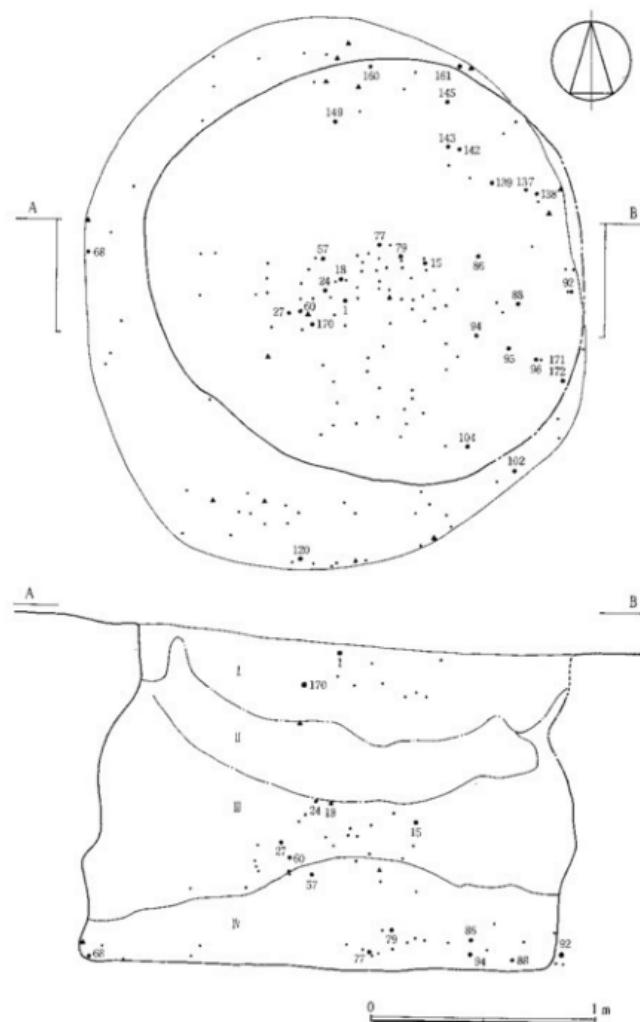


第39図 第14号土壙出土土器拓影図

### 15 第15号土壙(第40・41・42図)

本土壙が発見された位置は、I 4・5グリットに跨っている。保存状態は良好である。

開口部は、東側の一部に不明瞭な部分もあるが、略円形を呈するプランであろうと考えられる。直径は約190cmを有し、底面は東西220cm、南北240cmの不整円形で、深さは145cmを測る。断面の形状は、A-Bセクションによると円筒形に近いけれども、南東側の底辺は開口部より約60cmも外方に張り出し、この部分にかぎっていえば袋状を呈するといってよい。壁面の崩落はほ



第40図 第15号土壤実測図、遺物出土状態図

とんどみられない。底面は断面図(A-B)が示すように直線状に平坦となっている。

埋没土は次の4層に識別でき、その堆積状態はあきらかに人為的である。

I 黒色土 ローム粒を僅かに含み軟らかい土砂で、IとIIの区分線が漸移的である。

II 赤褐色土 赤橙色の浮石・スコリア・角閃石・石英粒などを混入している。

III ローム 掘削ロームを廃棄したもので、全体に固くしまっている。

IV 黒色土 ローム粒・木炭粒を僅かに混入し軟らかい土砂である。

遺物は、中央付近に多く堆積する傾向が窺われ、これと対照的に周縁部が少なくなる。中央東西方向に幅50cm範囲内のドット散布状態を断面に投影してみると、I層に少量散在し、II層が皆無に等しく、III・IV層に多くの破片が存在する。

遺物の総数は172個を数え、その内訳は土器破片151個、自然石21個である。土器破片の表裏関係は、表53個(35%)、裏79個(52%)、立ち19個(13%)という比率になる。

接合資料は5例抽出された(記載順序: 土器番号・表△・裏▽・立ち□・床上レベルcm)。

接合資料1 <深鉢形土器> 138 □12・139▽10・96▽4 IV層出土

接合資料2 <深鉢形土器> 102▽5・77△7 IV層出土

接合資料3 <深鉢形土器> 1△140・15▽66 I層・III層出土

接合資料4 <深鉢形土器> 86▽13・146▽10・68▽3 IV層出土

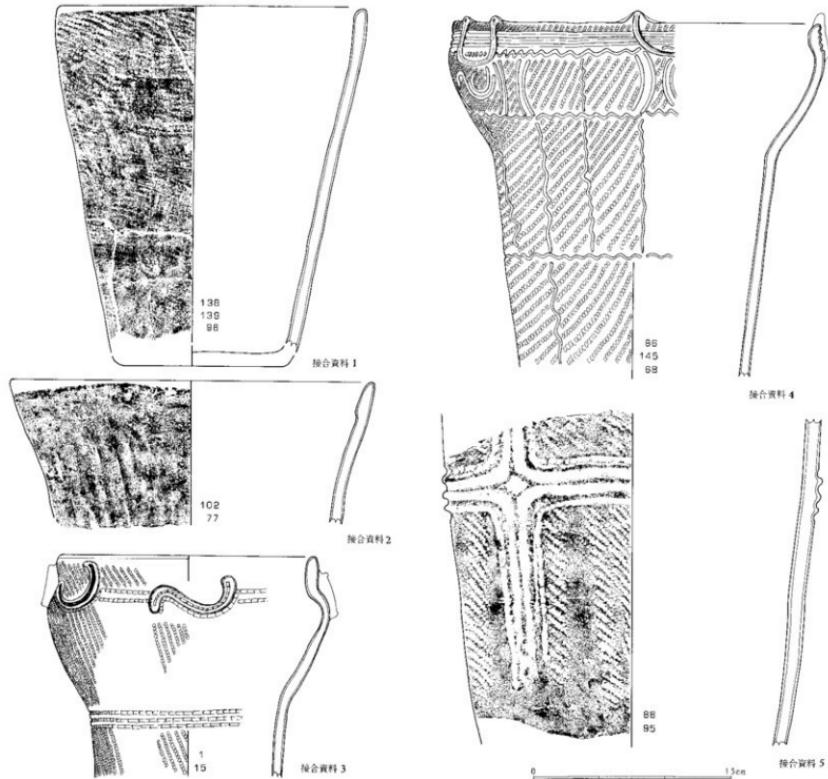
接合資料5 <深鉢形土器> 88△4・95▽11 IV層出土

以上の接合資料のうち、資料3はI層とIII層に存在し、約70cmのレベル差で接合する。この他の資料はすべてIV層内にあり、大きいレベル差はみられない。一括廃棄の資料と考えられる。

出土土器は、阿玉台式から大木8a式までのものを含む。主体となる土器は後者の方である。阿玉台式は、無文で口縁に小さな突起を有するもの、隆起線に沿って複列の有節線文・角押文・波状沈線・幅広の角押文などを施した破片が混在する。また竹管文や角押文に加えて大木7b式の撚糸側面圧痕手法を伴った142・24のようなものも僅かに認められる。

接合資料のうち1は斜繩文の深鉢形であり、2は無文で口縁内面に稜をもつていて、3は2段の繩文を押した深鉢形で、口辺部に逆S字形や弧状の隆起線を貼付し、その上に有節沈線を加えたり、また単独で口辺部や胴部にまで区画を施している。こうした施文要素は大木8a式の前半に対比して考えられよう。4は隆起線と沈線で横線文・波状文・円弧文などを複合させており、大木8a式に含めてよいと思う。5の胴部破片には、2段の繩文が縦位に施され、太い沈線で区画した内側に有節沈線・角押文を付している。近辺では日立市諿訪遺跡の資料(第7群土器)の中に良好なものが存在し、この一群は在地的性格の強いもので大木8a式の仲間から分離して考えなければならないと思う。

本土壙の廃絶は大木8a式期である。



第41図 第15号土塹出土土器実測図



第42図 第15号土塙出土土器拓影図

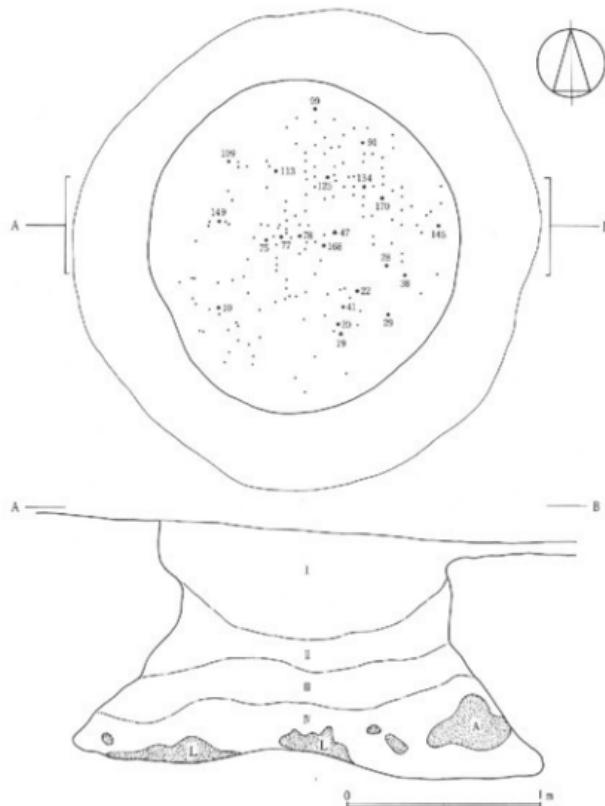
16 第 16 号 土 壤(第 43・44・45・46 図)

本土壤は、第 15 号土壤の北側、I 4 グリットに検出された。

プランは略円形を呈し、東西 160cm、南北 170cm を測る。頭部は東側の大部分が崩落している。袋状に開く底部は、東西 240cm、南北 250cm の大きさを有する。深さは中央付近が若干高くなり一定しないが、115～125cm 程度である。壁面は頭部の東南側が大きく崩落し、その土塊は東壁に接してⅣ 層内に存在する。

埋没土は、人為的に埋め戻した土砂であり、下記の 4 層に区別できる。

I 黒色土 ローム粒を僅かに混入する土砂である。



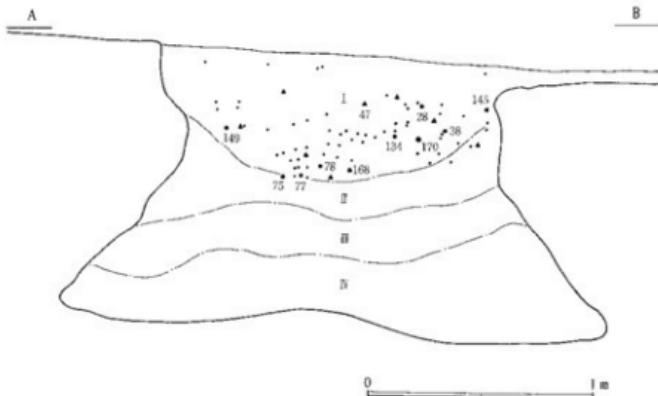
第 43 図 第 16 号土壤実測図・遺物出土状態図

- II ローム 挖削したロームを廃棄したもので、固くしまっている。
- III 暗褐色土 ローム粒をIV層より多量に混入する。中央より西側に赤橙色輕石の小ブロックが多く混在する。頭部付近の崩落によるものと思われる。
- IV 黒褐色土 ローム粒を僅かに含んだ軟らかい土砂である。下底部の所々にロームの廃棄土や小ブロックが存在する。また頭部東南壁の崩落土塊(A)もみられる。
- 本土壤における遺物の出方をみると、他の土壤の状態と相違し、ほとんどすべてのものがI層(確認面下30~55cm)内にまとまって存在しており、その平面的な散布もドット・マップが示すように中央部(開口部)に限定されている。このようなII~IV層内に全く遺物を出土しないということもめずらしい。

出土した遺物は、土器破片、凹石と自然石である。土器破片149個、凹石2個、自然石23個を合わせた数が174個となる。こうした土器の破片や石器類は、I層埋没時に一括廃棄されたものであることは論ずるまでもないであろう。

**土 器** 出土土器は、阿玉台式に属するもの、東北南部の大木7b式に対比できるもの、日立市諏訪遺跡の第6~7群土器に相似するものに大別される。

阿玉台式に該当する土器をみると、その主体的意匠は、隆起線に沿って、またはその区画内部を半截竹箇工具の内側で複列の有節線文を施した134・28・91・38などが多い。113のような幅広い角押文を配したものは少ない。繩文地の上に隆起線を貼付する99・38には刻目が付されている。この刻目は複列の有節線文を伴う隆起線の上にも認められる。またこうした意匠と



第44図 第16号土壤遺物出土状態図



第45圖 第16号土壤出土十器拓影圖

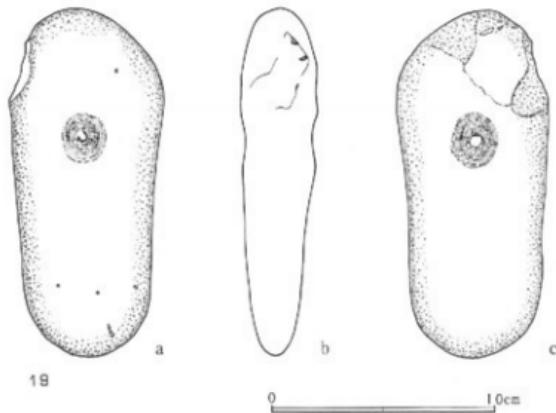


47

a

b

0 10cm



48

a

b

c

0 10cm

第46図 第16号土壙出土石器実測図

は別に、口縁に小さな突起を 1 ないし 2 個付加した 77 も存在し、168 の深鉢形も同じ仲間に入るだろう。125 は爪形文を並列した胴部破片である。これらは阿玉台式のⅡ～Ⅲ類に包括できる文様構成をもっている。

東北系の土器が本地方から出土する事例は、阿玉台式期に限ってみられる事象ではないが、その数量は非常に少ないものである。側面圧痕文系列の土器も例外ではない。本土壌内からでた拓影 12 がこれに該当しよう。縄文を縦位に押捺し、口唇に沿って 2 本の撚糸圧痕文を並列させている。これは東北南部の大木 7 b 式に対比して考えられる土器である。

以上の土器の他に、縄文地に有節沈線を口辺部や胴部に施した一群の土器がある。有節沈線は、単独で棒状に区画したり、鋸歯状に引かれたりもするが、2 条から 3 条をもって羊歯状や渦巻状に描出し、この間を連結して意匠文を構成する。22・20・29・41・145などの有節沈線は、こうした文様構図の一部に該当するようと思われる。波状口縁の 22 は、内側にメガネ状の隆起線を把手状に貼付し、口縁に沿って有節沈線を 3 条並べ、更にその下に鋸歯状の沈線などが続いている。29 には単独の有線沈線で区画文が施され、20 は左端に円弧または渦巻状の一部がみられるので、これに連結する部分の有線沈線である。145 も同様に考えられ、41 は胴下半部で垂下する沈線の末端に相当するものであろう。これらは日立市藪訪遺跡出土の第 7 群土器に近似する内容をもっているように思われる。

**石器** 石器として分類できるものは 2 個である。47 は大形の自然石(砂岩)で a 面の左上端が欠損している。くぼみは a 面のほぼ中央に大小 12 個が認められる。裏面は平滑である。最大長 28.5cm、最大幅 22.5cm、厚さ 14cm を測る。19 は小形で細長い扁平な自然石を利用したもので、a・c の両面に各 1 個のくぼみを有する。最大長 15.5cm、最大幅 7cm、厚さ 3.5cm を測る。

本土壌は大木 7 b～8 a 式期にかけて廃絶されたものであろう。

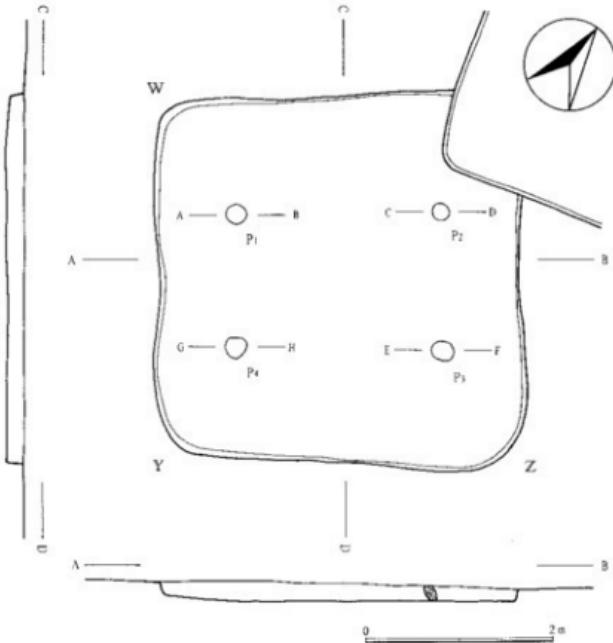
## VI 弥生時代住居址の調査

弥生時代に関する住居址は、今回の調査区内において東端に近いN・O～S・Tグリットの北側に2軒検出された。両住居址は、どちらかといえば、古墳時代五領期に多くみられる方形状を呈しており、那珂川下流域方面の長方形プランと若干相違する。この他に弥生時代後期の住居址は、全然発見されなかったけれども、なお未発掘の畠地には、同種の遺構が埋没しているものと判断される。

### 1 第4号住居址

住居址(第47・48図) 本址は、発掘区の北壁N・O 1グリットに検出された。グリットを北側に拡張した結果、あらたな住居址(第5号)が出現し、本址との重複関係が認められた。両址の新旧は、その切り合い状態から、第5号住居址が新しく本址は古くなる。

プランは、方形状を呈し、W-X辺長約4m、Y-Z辺長約3.8m、X-Z辺長約4mを測り、



第47図 第4号住居址実測図

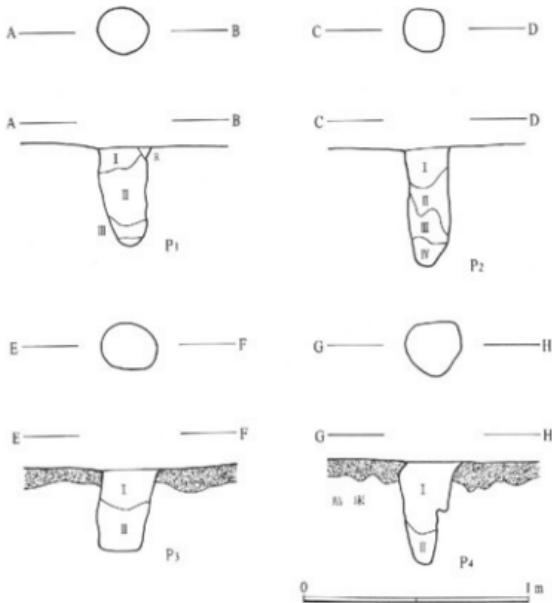
東壁(W-X)側が僅かに開いている。

竪穴内の埋没土は、全体にローム粒子を含んだ黒色土で、僅かにロームの小ブロックを混入しているところもある。自然流入の痕跡はなく、人為的埋没と見做される。

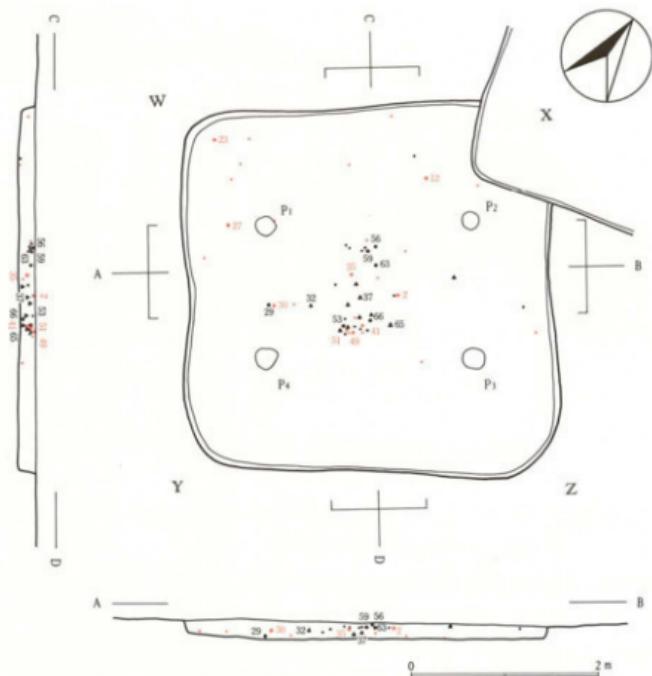
壁は各辺とも僅かに傾斜して掘り込んでいる。確認面からの高さは、もっとも高いYコーナー壁で20cmあり、他の部分は平均13~16cmと低くなる。この高低差は、ローム面が若干傾斜しているためで、実際の壁高はもうすこし高かったものと思われる。

床面は、全体にこまかい凹凸がみられるけれども平坦である。各柱穴間の内部は、全体に固く硬土3程度に踏み固められており、周辺部は硬度2の固さになっている。柱穴P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>付近の床面に厚さ5~10cmの貼床が認められる。この貼床は、床面調査中に識別困難なほどで、半蔵方式による柱穴発掘中に確認できた。炉址は発見されなかった。

柱穴はほぼ等間隔に4本存在する。各柱穴は、P<sub>1</sub>が直徑24cm、深さ45cm、P<sub>2</sub>が直徑20cm、深さ53cm、P<sub>3</sub>が直徑25cm、深さ35cm、P<sub>4</sub>が直徑25cm、深さ45cmを測る。柱穴内の土砂は、軟らかく上部から黒色土、黒褐色土、褐色土(ローム粒子混入)の順で埋没し、いずれも人為埋没である。



第48図 第4号住居址柱穴実測図

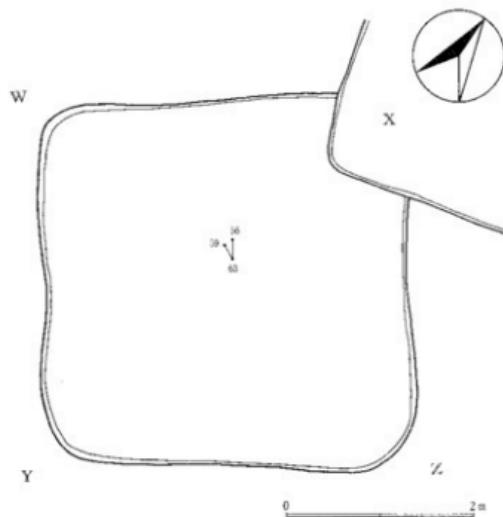


第49図 第4号住居址遺物出土状態図

遺物の出土状態(第49・50図) 本址の遺物総数は66個を数える。内訳は、土器55個、紡錘車1個、砥石1個、炉石欠損品2個、自然石7個である。土器破片の表裏関係は、表31個(56%)、裏18個(33%)、立ち6個(11%)に区分される。土器の時代別分類は、縄文土器9個、弥生土器28個、土師器(五領式9個、五領式以外6個)、時期不明3個となり、分布図のドットは大部分が弥生土器の破片ということになる。(赤色ドット: 弥生土器)

遺物の平面分布をみると、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線を境として、それより北西側に散在し、特に中央付近に弥生土器の大形破片がまとまっている。弥生土器は、ほとんど全面に散らばっているが、土師器は中央付近に集中して存在する。床面出土の大形破片を観察すると、土圧によって潰れた状態ではなく、明らかに投棄した時点で割れた破片が移動した状態を呈している。

垂直深度を調べると、弥生土器は床面から確認面までの間に包含され、土師器は中位から確認面の間に出土している。接合資料は確認面と同レベルである。こうした遺物の出土状態は、廃棄の時間差に起因するものと考えられる。



第50図 第4号住居址土器接合関係図

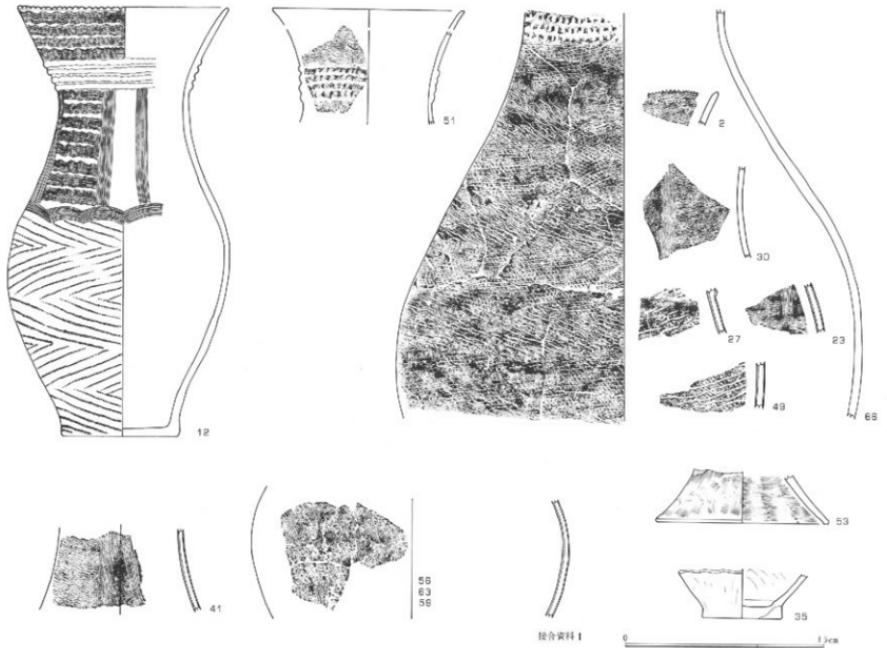
接合資料は、土師器に2例(1例は五頭式土器)抽出できた。これらの地点番号、表裏関係(表△裏▽立ち△)、床上レベル(cm)は下記のようになる。

接合資料1<土師器胴部> 56△17+63△14+59△13 (五頭式の變形土器?)

接合資料2<土師器胴部> 61△14+52△12+62△15

以上の資料は、いずれも竪穴の中央付近に存在し、C-Dセクションラインに並行して接合する。この2例の接合線が、ただちに遺物の投棄方向を示すものだと速断できないが、多くの破片がW-Y壁寄りに散在する事実を考慮すれば、遺物の投棄行為はこの方向から行なわれた可能性が強いように思われる。

なお、この竪穴には、炉石(欠損品)2個が埋没土中より発見されている。通常の場合、炉石は、一竪穴の炉址に置かれる数が1個を原則とし、竪穴廃棄時にも土器などの生活用具と違って、そのままの形で残る例が多い。したがって、この場合は、使用済みの炉石を棄てたというより、新住居の構築中、埋没住居に遭遇して、そこから掘りだしたもの棄てた可能性もあり、2軒に跨る遺物であったと考えることもできる。



第51圖 第4號住居址出土土器實測圖

**出土遺物** 本址の出土遺物は、土器、紡錘車、炉石、砥石と自然石である。土器については、中期繩文土器(阿玉台式)破片9個、後期弥生土器破片28個、土師器破片15個(五領式9個)、不明破片3個が出土している。弥生土器は、すべて後期に属する型式で、一例だけ無文らしきもののが存在する。

**弥生土器**(第51図12・51・41・2・30・27・23・49・35) 弥生土器の大部分は、実測図からも窺われるよう、山内清男・藤本弥城・滝田宏の先駆が『日本先史土器図譜』第1輯(昭和14年7月)において設定した十王台式に属する。

本土器の型式内容に関する説明は、『十王台式土器分類図譜』のI・II(昭和53年10月・同56年10月)に掲載しながら記述をすすめたいと思う。

器種別には、すべて壺形(A形)に包括される土器で、壺形(B形)、鉢形(C形)や高壺形(D形)と思われるものは出土していない。A形の12はA<sub>6</sub>(大宮町富士山遺跡第7号住居址69番土器)に該当する。51の土器も完形であればこの器形に近似しよう。大形の66は多分A<sub>2</sub>の仲間に入るだろう。

文様帶の構成は、上から文様帶I・隆起帶A・文様帶II・隆起帶C'・文様帶IIIというバタンをもつ12、文様帶Iを欠失している66のように隆起帶A・文様帶IIIを伴うものとに大別される。

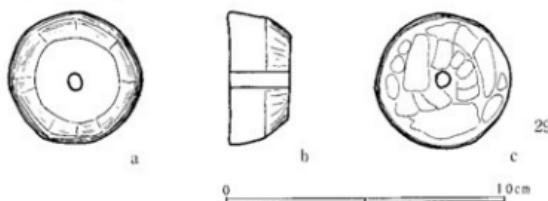
文様帶Iは、波状櫛描文に特徴づけられるd<sub>2</sub>・d<sub>3</sub>以外の種類は認められない。

隆起帶は、3~4列存在し、粘土紐を貼付しただけのものが多く、多分に後出的な要素を備えている。

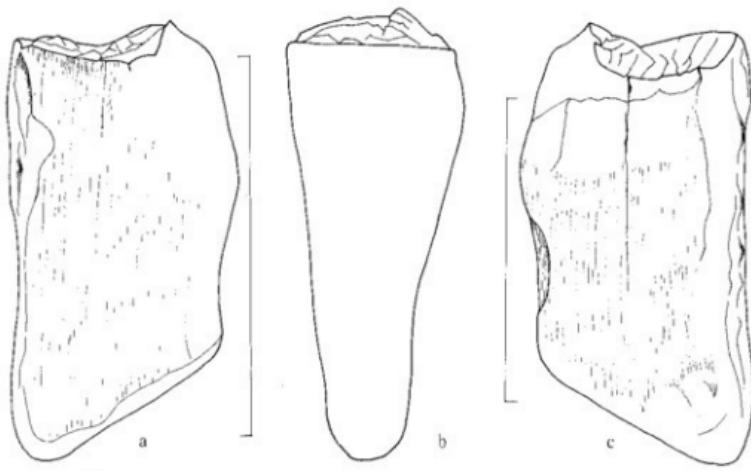
文様帶IIにおける構図は、十王台遺跡出土のd<sub>3</sub>に類するものである。櫛齒数は7本前後が多く、稀に3本程度のものもある。

文様帶IIIの胸部文様は、12・66・27・49から窺われるよう、すべて付加条縞文第二種の原体を使用している。

無文の35は、これと近似した土器が大洗町豊鎌遺跡、日立市吹上遺跡その他から発見されてきている。本土器は、胴下部半だけなので器形の詳細は不明であるが、多分広口の壺形に近いものであろう。この手の土器は、報告書に無文であると記述されていることがあるが、よく観察する

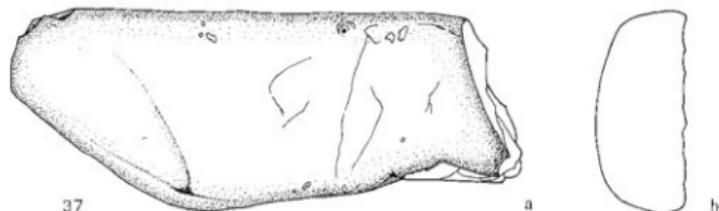


第52図 第4号住居址出土紡錘車実測図



32

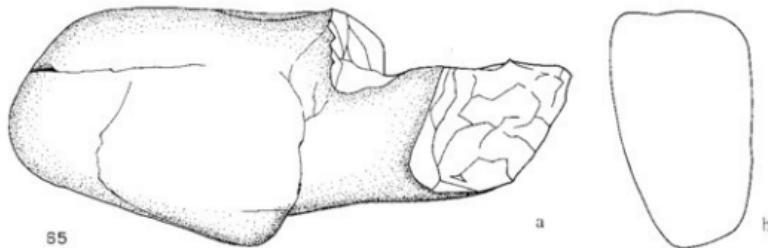
0 10cm



37

a

b



65

a

b

0 10cm

第53圖 第4號住居址出土磁石・爐石實測圖

と僅かに縄文の押捺が認められる例もあるから注意を要する。

**土師器**(第51図接合資料1・53) 土師器の破片は9個出土しているが、小破片が多く辛うじて2例だけ岡上復元ができた。接合資料1は壺形土器の胴部破片、53は高壺形または器台形の脚部破片であろう。器面には、櫛歯条線が斜位・縦位に引かれている仲間で、古式土師器の五領式の範疇に属する。

**筋鍤車**(第52図29) 完形品が1例存在する。直径48mm、厚さ中央部22mm、外周縁13mmの大きさである。円形のはば中央に貫通孔を有する。重量は57gである。a・c面に窓による整形痕を残している。この筋鍤車の所属年代は、その形状の特徴からみて、弥生時代の後期まで遡ることはむずかしく、五領式期から和泉式期の所産と考えられ、土器の破片に混じって棄てられたものであろう。

**砥石**(第53図32) 実測図上端の一部を僅かに欠失している。使用痕はaとcの両面に認められる。c面の磨滅度がほぼ平坦であるのに対し、a面は全体に湾曲し先端が薄くなっている。これは使用回数の多かった事実を意味するものであろう。長さ27.5cm、幅14cm、厚さ11cm、重量4.5kgというものは大形の部類に属する。移動または携帯には不向きであり、おそらく住居内外のある場所に固定しておき、必要に応じて使用したものであろう。後述の炉石同様に投棄されたものである。

**炉石**(第53図37、65) この炉は、すでに遺物の出土状態の項で述べてきたように、砥石と同様確実に投棄された状態で出土している。2例の砥石は、いずれも中央付近から欠損し完形品ではない。

37は、現存長23cm、最大幅9cm、a面欠損部付近が火熱により変色を受けている。

65は、現存長25cm、幅9~10cm、厚さ6cmの大きさで、a面長辺の両縁に煤が付着し、火熱による亀裂も数条入っている。2例とも砂岩質の自然石である。

炉石の年代は、大洗町毘笠遺跡の調査事例に基づけば、弥生時代後期(十王台式期)のものと考えられる。

本址の概要是、以上のように説明できるかと思う。出土遺物のうち十王台式の主要な土器は、確実に竪穴の床面上から出土している。これに反し土師器(五領式)の破片は、確認面に多く散在していた事実を考慮すれば、その間に若干の廃棄の時間差(前後関係)を認めない訳にはいかないと思う。本址は、弥生時代の終末に位置づけられると思うが、さらに類例の増加を持って充分検討しなければならない問題である。

## 2 第6号住居址

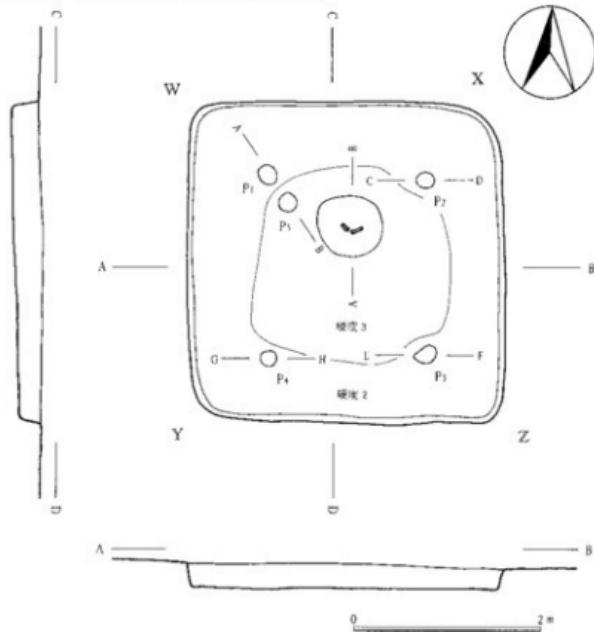
住居址(第54・55・56図) 本址は、発掘区の東端に近いS・T 1~2グリット内に発見された。本址の床面(炉址)下には、縄文時代の土壤(第1号土壤)が存在する。

プランは隅丸の方形状を呈する。W-X辺(北壁)とY-Z辺(南壁)の長さは3.3m, W-Y辺(西壁)とX-Z辺(東壁)の長さは3.35mを測る。

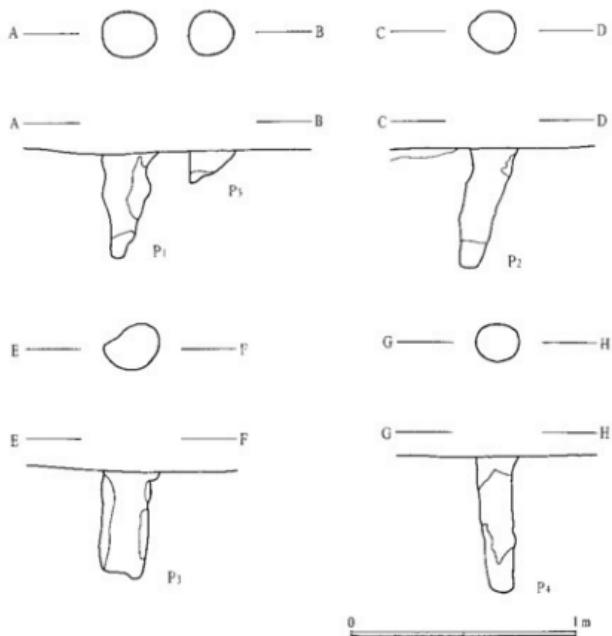
堅穴内の埋没土は、全体にローム粒子を混入しているが、部分的にロームの小ブロックを含むところもある。この層相は、A-B・C-Dの両セクション面においても全く同様であって、そこに明瞭な区分線を引くことが困難である。土層観察の所見は、壁外から流入した自然順序ではなく、あきらかに入為埋没による堆積である。

壁は各辺とも僅かに傾斜する。確認面からの高さは、W-X間の30cmを除き平均25cmを有する。

床面は平坦であって、炉址の周囲から柱穴(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)の内側にかけて硬度3、柱穴の外周の周壁間が若干軟らかくなり硬度2程度と識別された。



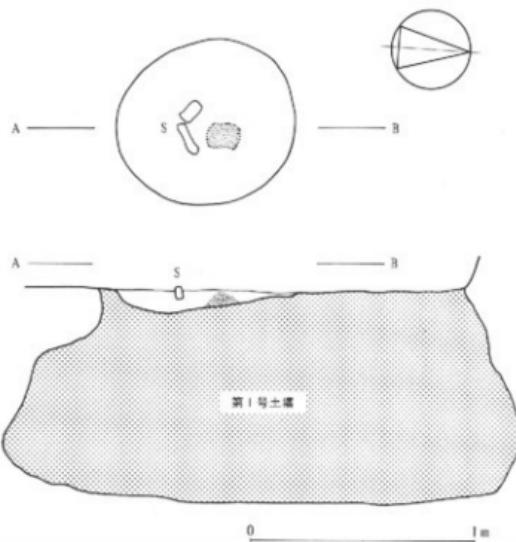
第54図 第6号住居址実測図



第55図 第6号住居址柱穴実測図

柱穴は、 $P_5$ を除く $P_1 \sim P_4$ が位置と規模から主柱穴と見做してよい。直径は、各柱穴とも 20 ~ 24 cm の大きさではほぼ共通するが、深さは、 $P_1$ が 45 cm、 $P_2$ が 53 cm、 $P_3$ が 35 cm、 $P_4$ が 60 cm を測り一定しない。各柱穴の埋没土は、I ~ III層に区分でき、ロームやローム粒子を混じた土砂を埋めたものである。 $P_5$ は、 $P_1$ の内側に並列した状態で発見されているが、非常に浅く柱穴の要件を備えていない。

炉址は、竪穴の中央より僅かに北に寄った位置に存在する。直径 75 ~ 80 cm の略円形を呈し、中央付近の深さは約 10 cm を測り、舟底状をなしている。中央より南側に細長い自然石(中央が折れている)を配し、その内側に灰の堆積も認められた。この炉址の断面調査中、北側の $P_2$ 近くにかけて縄文時代土壤の存在が確認された。土壤の上面、つまり竪穴の床面に相当する部分は、厚さ 6 cm 程度の貼床が精巧に施されていて、床面精査時には全く見分けのつかない状態であった。



第 56 図 第 6 号住居址炉址実測図

遺物の出土状態(第 57・58 図) 遺物の出土範囲は、竪穴の内部にかぎられ、壁外の確認面からは発見されていない。記録した総数は 170 個を数える。内訳は、土器 161 個、炉石 1 個、自然石 8 個である。土器はすべて破片であり、縄文土器(阿玉台式)60 個 37 %、弥生土器(十王台式)100 個 62 %、土師器(五頭式)1 個 1 % の割合で出土した。破片の表裏関係をみると、表 86 個 53 %、裏 67 個 42 %、立ち 8 個 5 % という数字を示し、これまでに調査してきた各地の住居址例(大洗町毘釜遺跡、同千天遺跡、大宮町富士山遺跡など)に徹して特別に変った傾向は認められない。

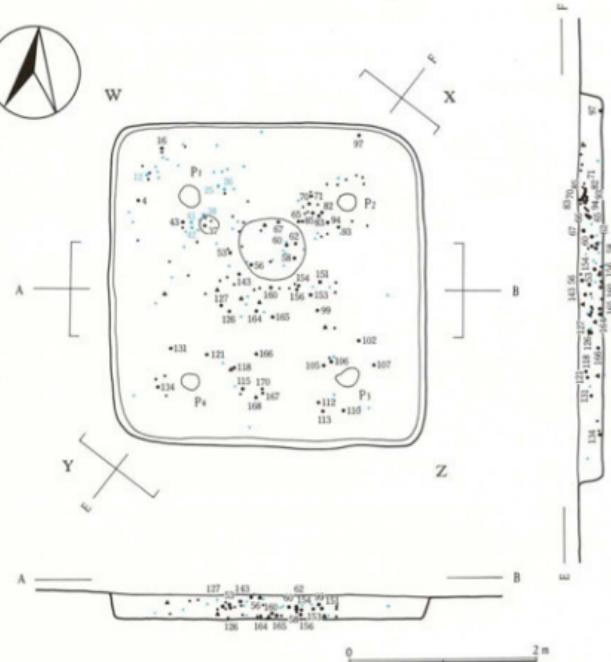
まず、ドットを使って記録した平面分布の在り方から観察すると、全体の傾向は、炉址を中心とした直径約 1.5 m の範囲に多く、P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub> の内側付近にも集積がみられ、一部は W コーナー方向にも続いている。壁内側のドットは全体にすくなく散在する程度である。この状態を縄文土器と弥生土器に分離して検討してみると、前者(青印ドット)は W コーナーから炉址周辺に多く存在し、後者(黒印ドット)は X コーナーから炉址周辺を含めて散在する。

次に A-B と E-F の幅 1 m の断面図に投影したドットによって、その垂直分布の状態を調べると、弥生土器については、A-B 断面の場合、床面から確認面までの間に介在し、E-F 断面になると様相が変り、X コーナーから炉址方向にかけて緩やかな傾斜を示し床面にまでびており、縄文土器のドット(床面～確認面の間に散在する)の傾向と若干相違する。W コーナー付近の縄

文土器ドットは、断面に投影しなかったけれども、12・25・26・41・42の破片を除きすべて床上12~20cmの間に存在し、この中に数個の弥生土器が含まれているような状態である。37と38はこれと相違し床上2~3cmの同レベルで出土している。この投影図から窺われることは、遺物の大部分が主としてW・Xコーナー方向から窓穴内に投げ込まれたものと想察できる。

接合資料は下記の 13 例が抽出できた(記述の方法は前項第 4 号住居址に準拠する)。

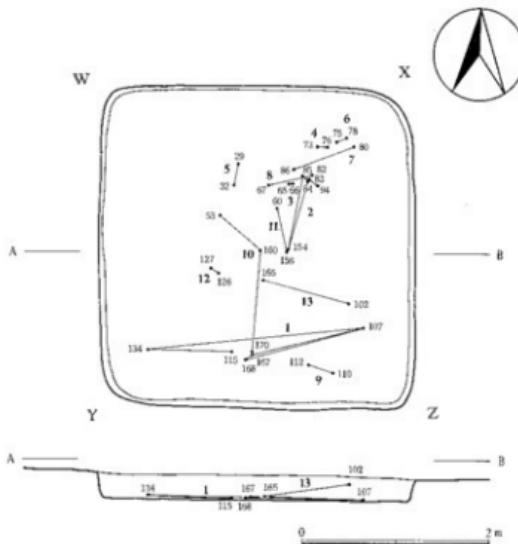
- |       |          |                                 |
|-------|----------|---------------------------------|
| 接合資料1 | <口辺部+胴部> | 107△0・167▽3・168▽3・115△0         |
| 接合資料2 | <口辺部+胴部> | 83△24・84△25・94△19・85△23・154△8   |
| 接合資料3 | <口辺部+胴部> | 65△15・66△16                     |
| 接合資料4 | <胴 部>    | 73△23・76△23                     |
| 接合資料5 | <胴 部>    | 29▽13・32▽15                     |
| 接合資料6 | <胴 部>    | 78▽21・75△23(接合資料7と9が同一個体の破片らしい) |
| 接合資料7 | <胴 部>    | 80△20・86▽18                     |



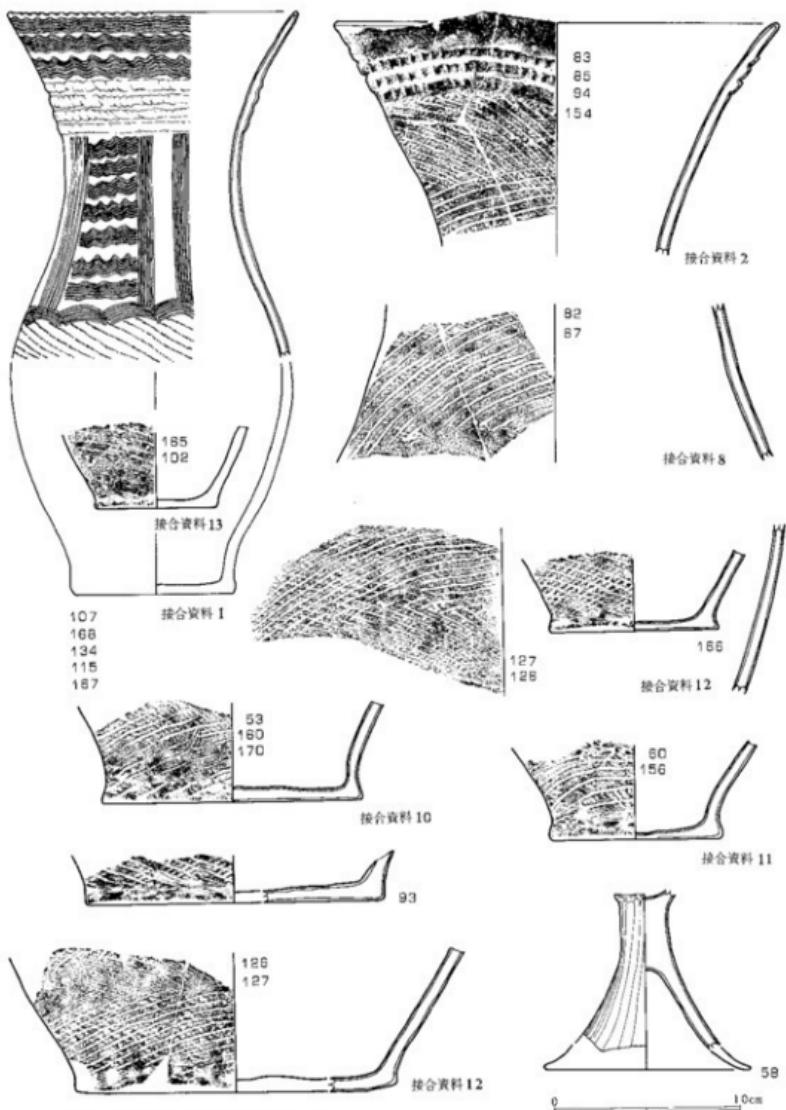
第57図 第6号住居址遺物出土状態図

接合資料8	<胴	部>	82▽19・67△18
接合資料9	<胴	部>	110▽12・112▽12
接合資料10	<底	部>	53▽14・160△6・170▽3
接合資料11	<底	部>	60△14・156△5
接合資料12	<底	部>	127▽14・126▽13
接合資料13	<底	部>	102△17・165△3

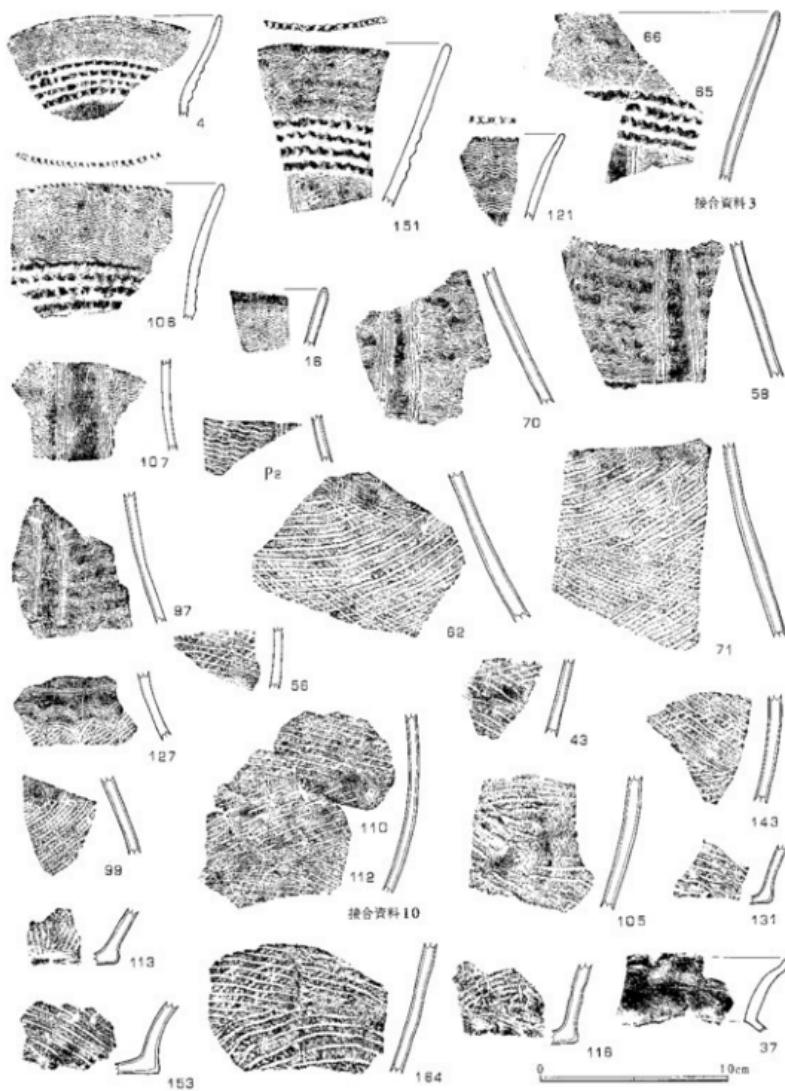
以上の接合資料は、すべて弥生土器であって、その分布の存り方は、土器接合関係図にみるような状態である。この図によると資料は、Wコーナー・P<sub>1</sub>付近の主として縄文土器の破片が多く散在していた部分に皆無であって、Xコーナー寄りのP<sub>2</sub>・炉址・P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ範囲内にまとまる傾向がみられる。接合線は、東西方向を指向する資料2・5・10の3例を除き、おむね東西方向を示すものが多い。接合線の指向する方向と傾斜角度については、投棄実験例や埋没土層の堆積状態を考慮した結果、それが人間の投棄行動と深くかかわっていることが明白である。接合距離の近接する資料3・4・5・6・12などは、投棄した破片が落下した衝撃で割れて飛散した好例であり、資料1・2・10のような比較的長い接合線の組合せは、投棄前に破損していたものを棄てた場合に起りやすい。



第58図 第6号住居址土器接合関係図



第59図 第6号住居址出土土器実測図



第60図 第6号住居址出土土器拓影図

ドット・マップ上からみた遺物の投棄地点は、Xコーナーと想定できる。接合関係図を検討した場合は、さらにZコーナー寄りにまで、その範囲が拡大されよう。このように両者の間に若干の食違いが生じることもありうるが、これはそのデータのもつ限定性によるものと考えられる。両者を総合して投棄方向を判断すれば、よりいっそう本址廃絶の実相に迫ることができるだろう。

**出土遺物** 本址の出土遺物は、土器、炉石と自然石である。土器については、すでに遺物の出土状態でのべたように、縄文土器(阿玉台式)、弥生土器(十王台式)、土師器(五領式)が発見されている。主体となるものは、後期弥生土器で全体の62%を占め、図上復元によって器形を窺えるものがある。縄文土器の破片60個は、全体に小形のものが多く、本址とは直接の関係をもたないために割愛した。

**弥生土器(第59・60図)** 器種としては、壺形(A形)と高壺形(C形)の2種類で、前者が圧倒的に多い。腹形(B形)に該当する破片はなさそうである。A形は、接合資料1に類するものが大部分のよう見受けられるが、大形の接合資料2・8などは、器形区分模式図に従えばA<sub>2</sub>の範疇に含まれる。C形は、壺部と脚部の接合面で欠損しており、細長い脚部だけの出土である。器形の詳細は不明であるが、大きく開いた浅い壺部を伴っていたものと思われる。

文様帯(A形)の構成は、①上方から文様帯I・隆起帯A・文様帯II・隆起帯C'・文様帯IIIと、②文様帯I・隆起帯A・文様帯IIIという組合せになるものと2種類に分けられる。前者には、接合資料1・3を含めた大部分の破片が該当し、後者は大形の接合資料2・8・12などが含まれる。C形は、文様帯Iの内容が有文・無文・複合口縁なのか不明である。

文様帯Iは、d<sub>1</sub>～d<sub>4</sub>に類する波状櫛描文(櫛齒工具数6本)が狭い空間を横走する。接合資料2の場合は、これが無文のまま残されている。

隆起帯Aは、4本の細い粘土紐を薄く貼付したもので、隆起帯そのものの作出技法はやや新しくなる崩しが窺える。

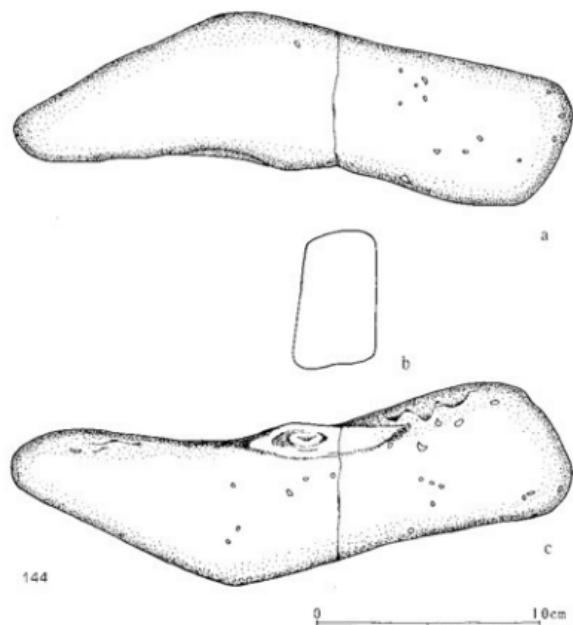
文様帯IIは、類別図Aのd<sub>3</sub>(十王台)に該当する規格的構図である。破片を観察したかぎりでは、この構図に統一されていて他の種類を含んでいない。

脚部に相当する文様帯IIIは、付加条縄文(第二種)が羽状に押捺される。その施文に関する基本的なレイアウト方式は、大宮町富士山遺跡の出土資料とほとんど変わることろがない。

以上の土器は、すべて十王台式に属するが、この他に拓影図127・99・113のような幾分古手の別型式も僅かに混在する。

肩部(文様帯II～III)付近の127・99は、櫛描文の構図に連弧文・平行線文や山形文が採用され、その下端に付加条縄文(第一種)が施されている。この仲間は、十王台式とは明確に区別できる土器群であり、那河川下流域方面の磐船山式に類例が求められる。

**土師器(第60図37)** 土師器の破片は僅かに1個数える。口頭部の小破片であるが、口辺



第61図 第6号住居址炉石実測図

部がくの字状に外方に開き、おそらく甕形の器種であったろうと思われる。口辺部下半に櫛齒条線が斜めに施されている土器で、その特徴は前期の丘頭式に相当するであろう。

**炉 石(第61図144)** 少多少曲して一方が細くなった砂岩質の自然石である。計測値は、最大長20cm、最大幅6.5cm、厚さ3.5cmを測る。断面は長方形に近く、a・c両面ともに平滑である。内溝する側縁は、火熱を直接受けて変色し、ほぼ中央から折れている。二つに折れた炉石は、炉址内に原位置のまま残っていたものと、転倒するような形で移動していたものがあったことから、あるいは故意に折損させたのかも知れない。いずれにしても自然の割れ方と相違している。

本址の概要は、以上のとおりであって、その間に弥生時代終末期の動向を窺うことができよう。

## VII 古墳時代住居址の調査

古墳時代に關係する住居址は、発掘調査区の西端と北側拡張区を中心に検出された。発掘調査した住居址の数は4軒である。これを時代別に分類すると次のようになる。

- ① 古墳時代前期の住居址 1軒 第1号住居址
- ② 古墳時代中期の住居址 3軒 第2号住居址・第5号住居址・第7号住居址

古墳時代前期の住居址は、第2号住居址により東側半分が切斷された第1号住居址が該当する。本址からは、いわゆるS字状口縁を有する變形土器の破片が出土している。本址以外にも他の住居址内に若干混在しており、破片ではあるが茨城県北部の五領期の研究をすすめる上で有意義な資料を提供できたと思う。なお、この周辺には本期の住居址が埋没しているように思考される。

中期の住居址に属する遺構は、第2・5号住居址であって和泉式期に該当し、そこからは本期の良好な資料が出土している。第7号住居址については、各時代の小破片が混在し、明確な時期の決定をくだすことが困難である。しかし、住居址の規模は第2号住居址に相似し、カマド発生以前のものと考えられるので、一応中期に属するものと見做すことができよう。

このほかに第3号住居址が存在する。残念ながら廃絶時期を明確にできる遺物が出土していない。小形で方形を呈する本址には、カマドを構築した痕跡は全く認められず、またこの確認調査区内からは後期以降の土師器・須恵器の破片も検出されていないので、おそらくそれ以前の遺構ではないだろうか。

今後、本地点周辺の発掘が実施されるようなことがあれば、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居址の出土は確実で、それらに関する諸問題が提起・解明されるであろう。

### 1 第1号住居址

住居址(第62・63図、岡版第八) 本址は、発掘調査区の西端近くのD・E 2~3グリッドに跨って位置し、東側半分が第2号住居址に切斷されている。新旧関係は、本址が古く第2号住居址が新しい。

プランは、竪穴の約1/2が破壊されているために明確ではないが、長方形に近いものであったと考えられる。大きさは、W-X辺長推定約5.8m、W-Y辺長5.2mである。

壁は各壁ともほとんど垂直に近く掘り込んでいる。確認面からの深さは、Wコーナー39cm、Yコーナー44cmを測る。壁面の崩落は全く認められない。

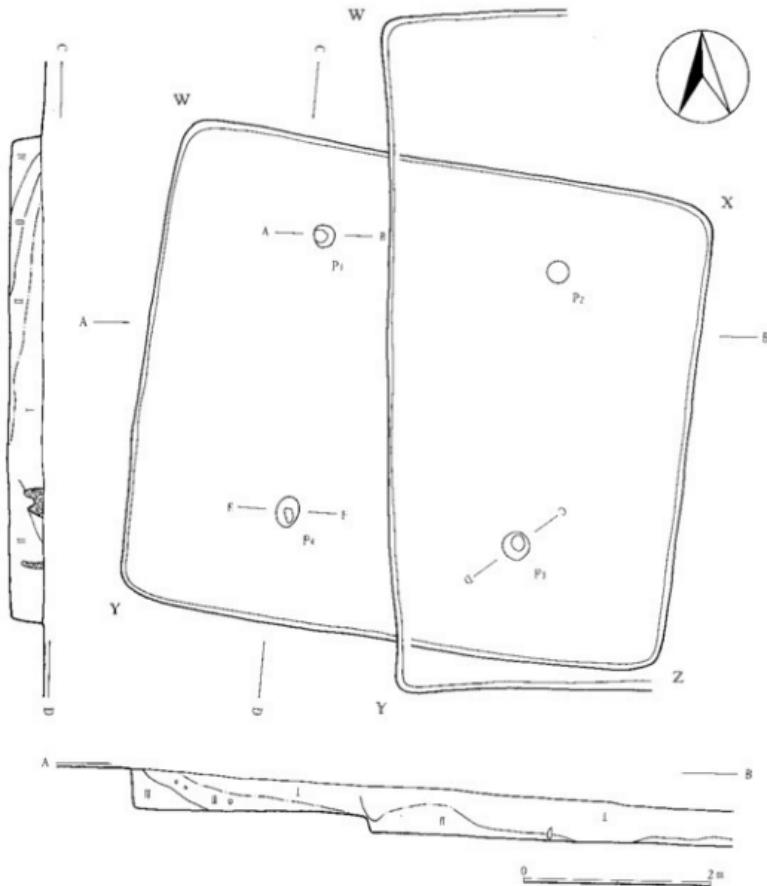
床面は平坦である。各柱穴(P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>)間の内部は、硬度3のかたさに踏み固められており、壁の近くは硬度2程度に軟らかくなる。炉址は、第2号住居址構築時に破壊されたらしく残っていない。

柱穴は、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の3本を確認した。このうちP<sub>3</sub>は第2号住居址内で検出したが、P<sub>2</sub>については、床面を10cmほど剥ぎとて探索したけれどもついに発見できなかった。

P<sub>1</sub>：直径20cm、深さ55cm、底面は掘り返したロームを埋めて厚さ5cmに突き固めている。

P<sub>3</sub>：直径30cm、深さ58cm、上面は第2号住居址の床面に相当するので、入念な貼床を施し、底面はロームを埋めて厚さ約15cmに突き固めている。中間の土砂は軟らかい黄褐色土である。

P<sub>4</sub>：直径25cm、深さ75cm、底面はロームを埋めて5cmの厚さに固めている。半裁発掘を実



第62図 第1号住居址実測図

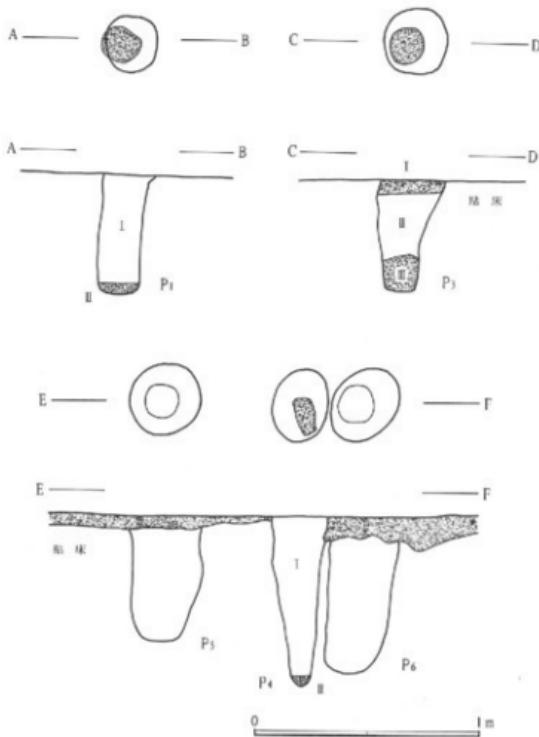
施した結果、上面に貼床を施したP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>を発見した。この2例の柱穴は、大きさ(直径30cm、深さ55~70cm)と掘り方から縄文時代中期のものと見做される。旧造構の上部に新住居址を構築する場合は、しばしばこのような構築法が行われる。2例ともロームを多量に混入した黒褐色土である。

埋没土は、A-Bセクションで3層、C-Dセクションで4層に区分される。

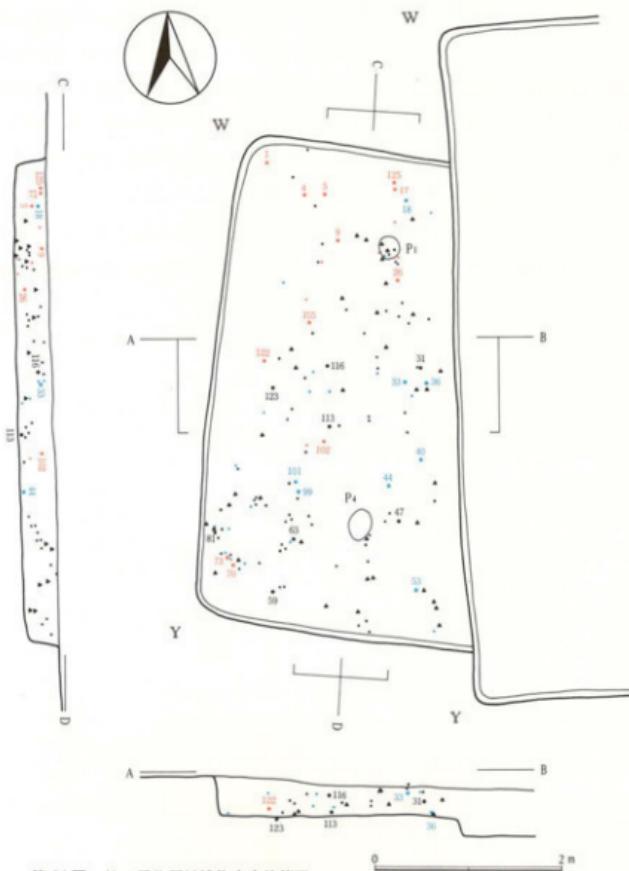
I 黒色土 ローム粒を少暈混入した土砂である。

II 黒褐色土 ローム粒はIよりやや多くなり、小ブロックを若干混在する。IとIIの区分線は漸移的であって、C-Dセクションの中央より南側の一部に区分線の不明なところがみられる。

III 黒色土 ローム粒をほとんど含まない、北壁方向より廃棄した土砂と考えられる。



第63図 第1号住居址柱穴実測図

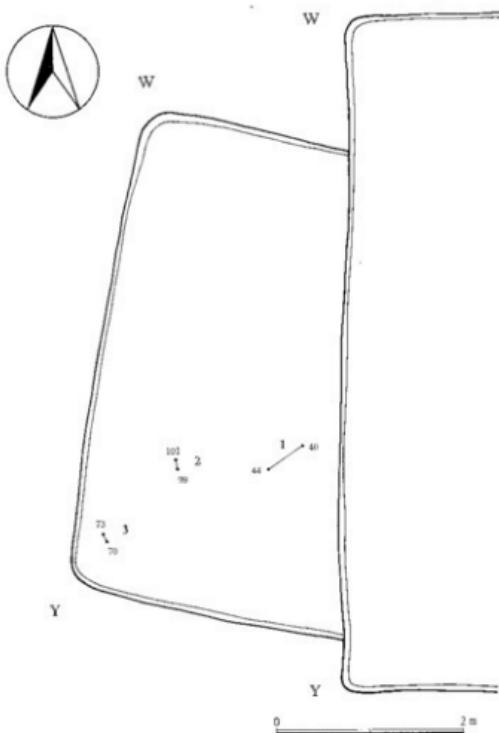


第64図 第1号住居址遺物出土状態図

IV 黄褐色土 ロームを多量に含んでいる。廃棄土砂である。

遺物の出土状態(第64・65図、図版第八) 本址からは総数156個の遺物が出土した。その内訳は、土器破片117個、紡錘車2個、自然石37個である。土器の破片については、表55個(47%)、裏53個(45%)、立ち9個(7%)という比率を示している。このうちで最も多いのは、中期前半の繩文土器で65個(58%)、ついで土師器が28個(25%)、弥生土器は19個(17%)である。

こうした遺物の平面的分布状況を観察すると、全体の分布密度は、竪穴北半部より南半部が若干高いけれども、まばらに散在し特別な傾向は指摘できない。土器の散布状況を時代別にみると、

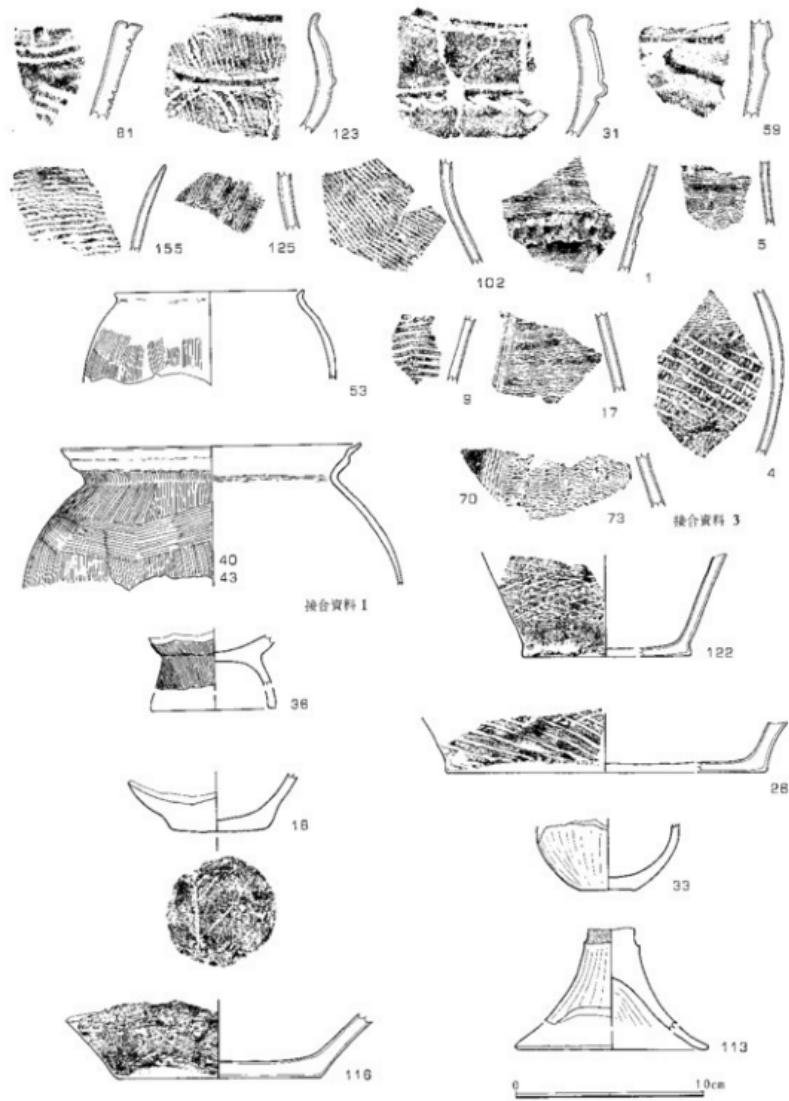


第65図 第1号住居址土器接合関係図

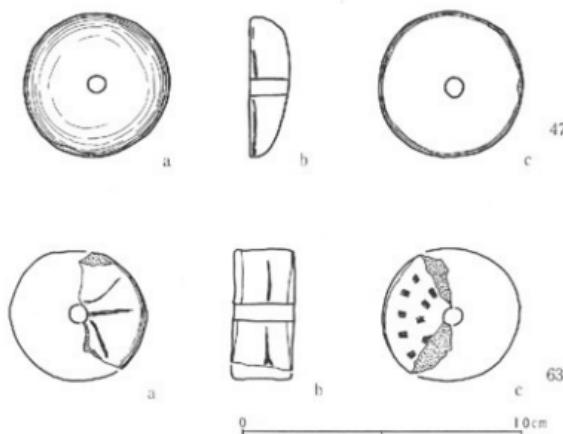
縄文土器は全体の傾向とほぼ一致する。弥生土器は、その大部分が中央より北側に散在し、南側ではYコーナーその他に数例点在するだけである。土師器は、A-Bラインより南側のYコーナー方向にかけて散在するが、その数は多くない。

この状態を垂直分布図に投影すると、各時代のドット(黒色:縄文土器、赤色:弥生土器、青色:土師器)は、いずれも床面から確認面の間に包含されている。土師器と弥生土器を抽出し、出土レベルと数量の関係を表に示すと左のようになって、両者の間には共通性が認められる。C-Dセクション(幅1m範囲)の北壁寄り弥生土器ドット群は、土層の堆積状態と一致するかにみえるが、ドット4は床

土器 床上レベル	土師器		弥生土器	
	個数	%	個数	%
20~30 cm	13	46	8	42
10~20 cm	6	23	5	26
0~10 cm	9	32	6	32



第 66 図 第 1 号住居址出土土器実測図



第67図 第1号住居址出土紡錘車実測図

面上にあって必ずしもそのような傾向を表わすとはかぎらない。

縄文・弥生遺構の跡地に竪穴住居址を構築する際、その掘削土砂は近くの廃絶竪穴内に棄てている。この場合、その土砂に含まれる縄文・弥生土器その他の遺物も例外ではない。本址の遺物の出土状態をみると、縄文・弥生土器と土師器はほとんど同時廃棄であり、イコールの関係で結ばれる。こうした遺物は、まず遺跡の性格を問い合わせし、そこに秘められた問題点を吟味する必要があろう。

接合資料は、下記の3例が抽出された(記載順序は<接合部位>出土地点土器番号・表△裏▽立ち>・床上レベルcmである)。

接合資料1 <五領式土器口～胴部> 40△0・44△0

接合資料2 <五領式土器胴部> 99▽6・101△13

接合資料3 <十王台式土器胴部> 70▽22・73▽16

五領式土器の接合資料は、資料2の床上レベルが高く、資料1が低くなり床面上である。この付近のドット群も同様なレベル関係を有しているので、この方向からの投棄が想定される。資料3の弥生土器は、この仲間に含めてよいかわからない。弥生土器の破片は、主として北壁方向からの投棄であったと思われる。

**出土遺物** 本址において発見した遺物は、土器の破片と紡錘車、自然石である。土器は、縄文中期前半、弥生後期、古墳前期に該当する型式を含んでいて、数量的には縄文>土師>弥生という順になる。

**土器**(第66図) 繩文土器は、破片の多くのものに隆起線が貼付され、単列または複列の有節線文、角押文が施されている。また有節線文を伴わない隆起線だけの破片もある。拓影図に収録した81・123・31と59が該当し、これらは阿玉台式に対比して考えられるものである。

弥生土器は、櫛描文の発達した磐船山式期に該当するものと、後半の十工台式期に属するもののが存在し、後者の破片が大部分を占める。

十工台式土器は、器種別にみると、すべて壺形(A形)に包括されるもので、甕形(B形)、高坏形(C形)と思われる破片は見当らない。文様帶の構成は、文様帶I・隆起帶A・文様帶II・隆起帶C'・文様帶IIIである。文様帶I・IIの波状文や直線文は、櫛齒数5本程度の工具を使用している。文様帶IIIの縄文は付加条第二種の原体が施文される。隆起帶の貼付は薄い紐状となり後出的様相を漂わせている。無文の底部破片18は、第4号住居址出土の35と同様に考えられる。

土師器は、五頭式期に対比でき、S字状口縁の台付壺形土器、小形の壺形土器や高坏形土器の破片が出土している。S字状口縁土器の観察所見は、焼成良好で器厚3~4mm、表面に炭化物の付着が著しい。胸部の櫛歯条線文は、縦位に施文した後、肩部付近を帯状に横走させる。

**紡錘車**(第67図) 完成品47は、直径51mm、厚さ中央部15mmで外周縁が薄くなる。円形のほぼ中央に貫通孔を有する。重量40gである。63は%を欠損している。推定直径50mm、厚さ21mm、a面は、中央の貫通孔から放射状に沈線が引かれ、b面中央にも1本の細い沈線があり、c面は円周に沿って刺突文が2列にめぐっている。現存重量22g(推定重量65g)である。有文の紡錘車は弥生式に伴出する例が多い。

本址の遺構と遺物に関する内容は、以上に述べたとおりであつて五頭式期の廃絶と考えられる。

## 2 第2号住居址

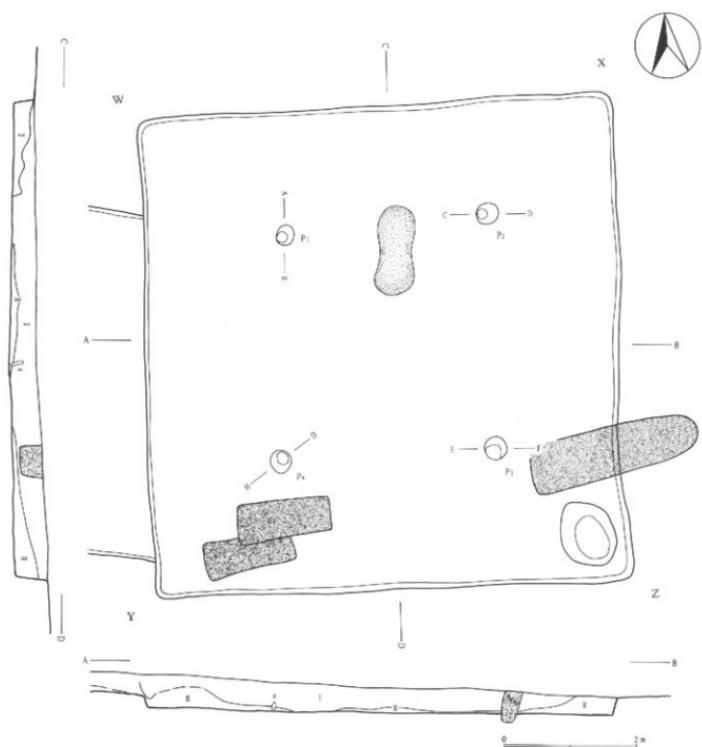
**住居址**(第68・69図) 本址は、第1号住居址の東側に位置し、同住居址を切断している。新旧関係は、当然のことながら本址が新しくなる。遺構の遺存状態は、Yコーナー付近に1.4m×50cm前後の長方形を呈す搅乱穴が2か所、東壁Zコーナー近くに2.5m×80cm、確認面よりの深さ約20cmの搅乱が存在する以外は良好である。

堅穴のプランは方形である。大きさは東西・南北の各辺長7.2mを測る。

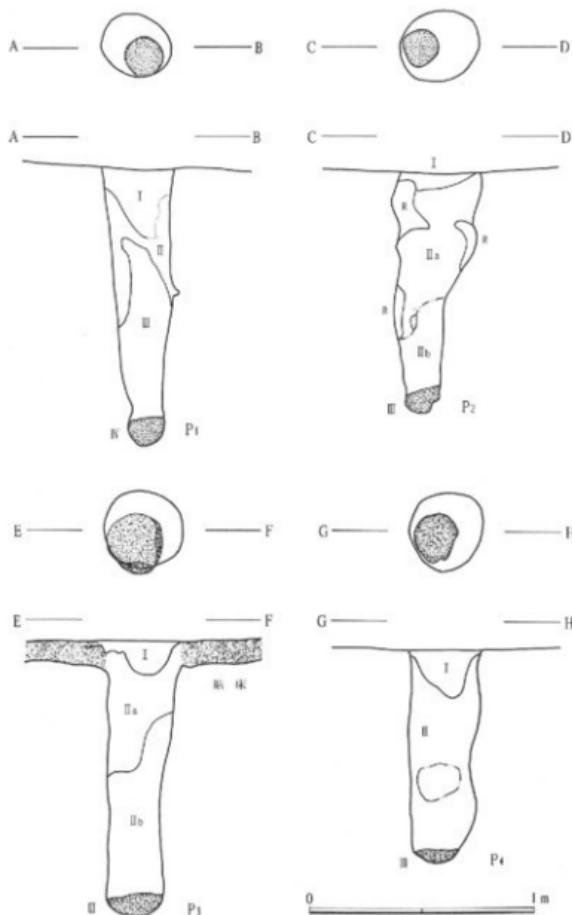
壁はほとんど垂直に近く掘り込んでいる。ローム面が若干傾斜しているために、北側壁が浅く南側壁が深くなる。壁高は、Wコーナー付近38cm、Xコーナー付近27cm、Yコーナー付近61cm、Zコーナー付近43cmである。

床面の状態は、全体に硬度3程度の固さで、こまかい凹凸が認められる。

柱穴は、床面の対角線上にほぼ等間隔で規則的に4本存在する。各柱穴を表示すると次のようになる。



第68図 第2号住居址実測図



第69図 第2号住居址柱穴実測図

第2号住居址柱穴一覧表

番号	形状	口径	底径	深さ	埋没土
P <sub>1</sub>	円形	27×31	16	123	I 黒褐色土 II ローム III 黒褐色土 IV ローム
P <sub>2</sub>	円形	31×37	16	106	I 黒色土 IIa 黄褐色土 IIb 黑褐色土 III ローム
P <sub>3</sub>	円形	35×36	25	122	I 黒色土 II ローム IIb ローム III ローム
P <sub>4</sub>	円形	33×35	20	95	I 黒褐色土 II ローム III ローム

(計測単位 cm)

各柱穴は、あらかじめ柱を埋設する位置に掘られるわけであるが、柱穴下底部のⅢまたはⅣ層の厚さ10cm前後のロームは、一度掘りかえしたものを埋めて突きかためている。これは設計ミスによる掘り過ぎではなく、柱の沈下防止と埋設深度の統一のためにあったと思われる。こうした事例は、大洗町千天遺跡、同鉾釜遺跡などで確認されている。従来の発掘法では、柱穴の深さは約10cm浅くなる。柱穴は半戻発掘を実施しないかぎり、正確なデータは獲得できないのである。

炉址は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>のほぼ中間に存在し、65×140cmの大きさで南北に細長いものである。

埋没土は3層に区分される。区分線は、A-Bセクションの西壁(第1号住居址寄り)付近に一部漸移的に変化するところが認められる。他の部分の区分線は明瞭で、すべて廃棄土砂である。

- I 黒色土 ローム粒を僅かに混入する。
- II 黒褐色土 ローム粒を多量に混入して軟らかい。
- III 黄褐色土 黒色土を僅かに混入するロームである。

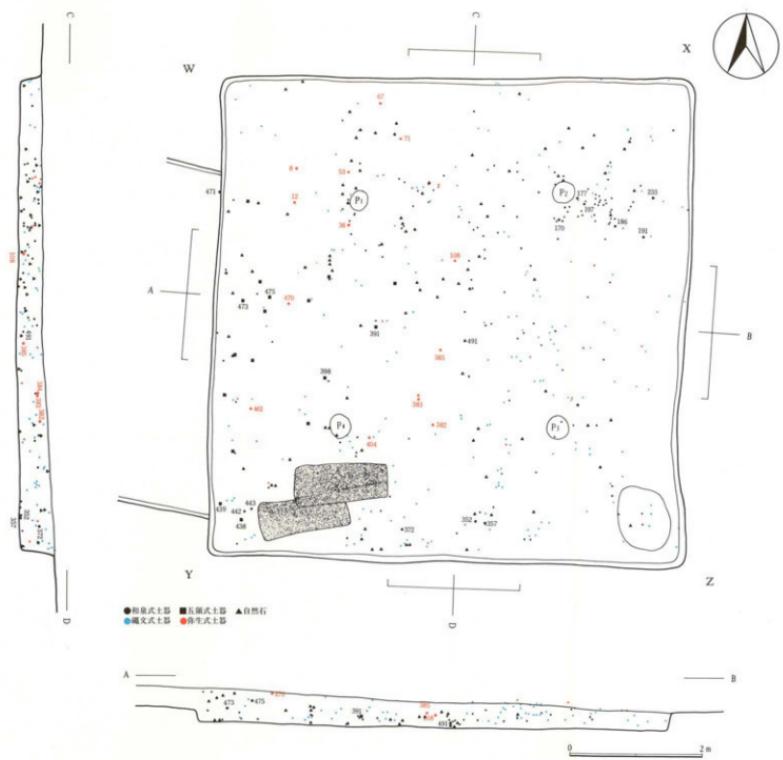
遺物の出土状態(第70・71図) 本址からは総数503個の遺物が発見された。その内訳をみると、土器の破片408個、紡錘車1個、炉石1個、自然石93個である。土器の破片は、縄文土器198個(49%)、弥生土器37個(9%)、土師器155個(38%)、不明土器17個(4%)に分れる。表裏関係は、表208個(51%)、裏138個(34%)、立ち62個(15%)という比率になる。土師器は和泉式135個、五領式21個に分れる。(黒色ドット: 土師器、赤色ドット: 弥生土器、青色ドット: 縄文土器)

遺物の平面分布は、全体的に観察すると、中央より北側部分に多く散布している。各時代別の状況は、土師器の場合、全体の傾向とはほぼ近似しており、特にP<sub>2</sub>東側付近が多い。弥生土器は、Zコーナー付近を除きまばらに散在する。縄文土器は、竪穴全面にほとんど斑なく散在するといつてもよい。

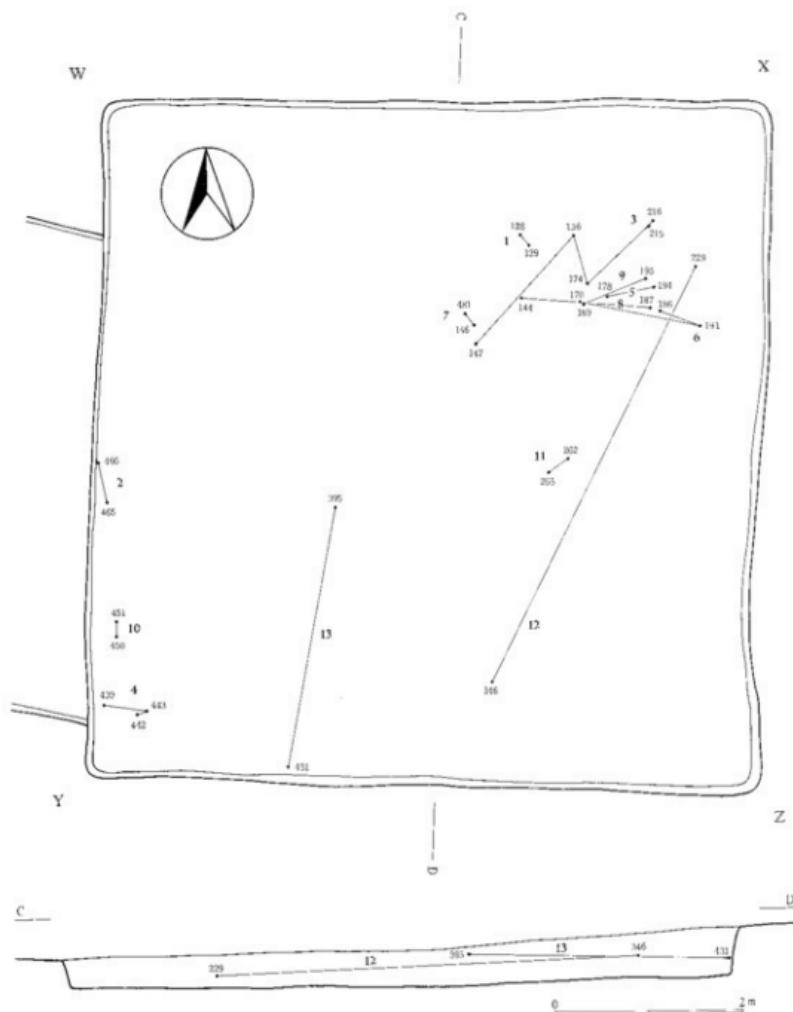
次に垂直分布図に投影した状況をみると、土師器は、床面から確認面までの範囲に存在し、土層の堆積に関係ないようである。弥生土器は、床面上に皆無であって、床上20~35cmのところに散在する破片が多い。縄文土器は、土師器の分布状況と比較して大差ない。

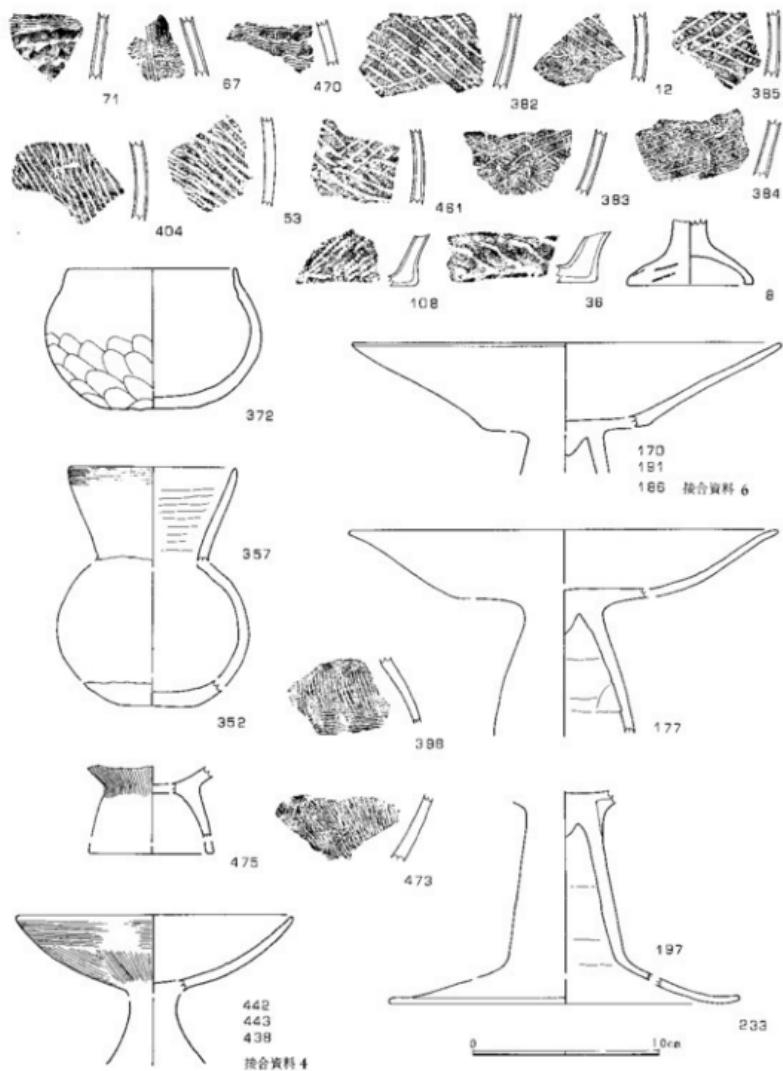
接合資料は、土師器に9例、縄文土器に4例抽出できた(記載順序は<接合部位>出土地点土器番号・表△裏△立ち△・床上レベルcmである)。

接合資料1 <壺形土器胴部>	128▽10・129▷12 (和泉式)
接合資料2 <壺形土器胴部>	466△47・465△49 (和泉式)
接合資料3 <壺形土器胴部>	147▽15・136△8・174▽3・215▽11・216△12 (和泉式)
接合資料4 <高壺形土器壺部>	442▽9・443△9・439▷38 (五領式)
接合資料5 <高壺形土器壺部>	178△6・194▷4 (和泉式)
接合資料6 <高壺形土器壺部>	170▷11・191△9・186△21 (和泉式)
接合資料7 <高壺形土器壺部>	146△16・481△10 (和泉式)

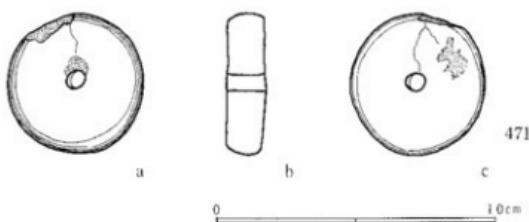


第70図 第2号住居址遺物出土状態図





第72図 第2号住居址出土土器実測図



第73図 第2号住居址出土紡錘車実測図

接合資料8 <高環形土器部> 144△10・187>10 (和泉式)

接合資料9 <高環形土器部> 169▽10・195△11 (和泉式)

接合資料10 <縄文土器口縁部> 450▽2・451▽2 (阿玉台式)

接合資料11 <縄文土器胴部> 262△18・265△13 (阿玉台式)

接合資料12 <縄文土器胴部> 229▽14・346▽23 (阿玉台式)

接合資料13 <縄文土器胴部> 395▽34・431▽17 (阿玉台式)

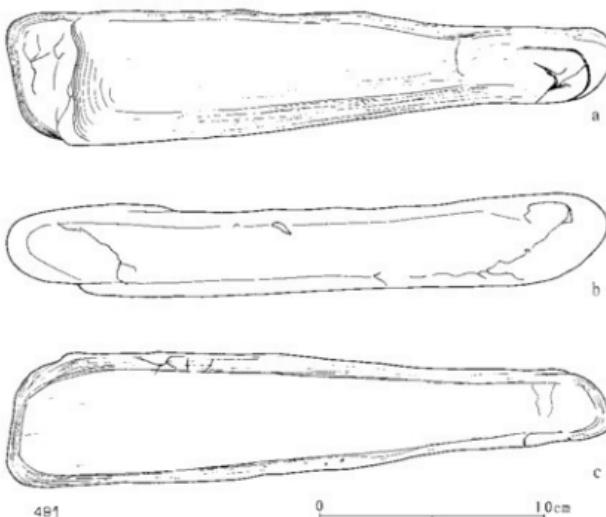
以上の接合資料のうち土師器の9例が本址に直接関係する。高環形土器(資料6・7・8・9は同一個体と思われる)を含む7例は、P<sub>2</sub>の周辺にまとまり、接合方向に共通するものがみられる。接合方向が投棄の方向を意味することは、すでに実験例からも確実であり、この一群を含む破片類はXコーナー方向から棄てられたと考えてよい。これに対し資料1・4の2例は西壁からの投棄である。更に各型式別に検討してみると、P<sub>2</sub>の周辺の接合資料は、すべて和泉式に該当している。一方Yコーナー近くの接合資料4は、五領式に対比できる破片である。そのドットは西壁に沿って限られた狭い空間にまとまっており、他の部分からは全く出土していない。以上の事実を総合すると、和泉式と五領式は全く別個に施棄されていることが理解できよう。

**出土遺物** 本址発見の遺物は、縄文土器、弥生上器、土師器の破片、紡錘車、炉石と自然石である。

**土器**(第72図) 縄文土器は、すべて中期前半の阿玉台式に該当する小破片である。文様に隆起線文を配し單列または複列の有節線文、爪形文や縄文地に幅広い角押文を施したもののが存在する。

弥生上器は、後期の十王台式とそれ以前のものがあり、前者が多い。頭部71は後出的要素の隆起帶である。縄文は付加条第二種を施文する。高環形土器8は部欠損し、粗雑なつくりで裾部に縄文を押捺する。53は付加条第一種で磐船山式に対比できる胴部破片である。

五領式は、台付甕形土器の脚部475、接合資料4の高環形土器、胴部破片398・479などが出



第74図 第2号住居址出土炉石実測図

土している。肩部の描寫線文の施文手法は、第1号住居址のS字口縁土器に共通する。

和泉式は、小形の壺形土器372、壺形土器357、高环形土器177、197、接合資料6、壺形土器の胴部破片などが出土している。高环形土器における坏部の外反して大きくひろがる形状、筒形の脚部の膨み具合、裾部の形状などは、本式の特徴をよく具備している。

**纺錐車(第73図)** 第1号住居址と接する西壁の床上12cmのところから発見された。周縁部の一端に欠損部分があるけれども完形品に近い。直徑約50mm、厚さ中央部で15mmを測る。断面は板状を呈し外周縁が丸味をもっている。円形の中央に貫通孔を有する。重量は43gである。

**炉石(第74図)** 炉址内に出土したものではなく、竪穴中央の廃棄土砂(床上10cm)中に発見されたものである。大きさは、最大長27cm、幅大幅6cm、厚さ4cmの細長い自然石(妙岩)である。重量は1kgを測り、第6号住居址の炉石に類似している。弥生時代後期～五領式期の炉石であろう。

本址の概要は以上のように説明できる。出土土器には、縄文土器は別として弥生後期の十王台式、古墳前期の五領式が発見され、その共存関係を問われるが、土器の出土状態からは両者の区別は明確である。本址は古墳時代中期に廃絶された竪穴である。

## 3 第5号住居址

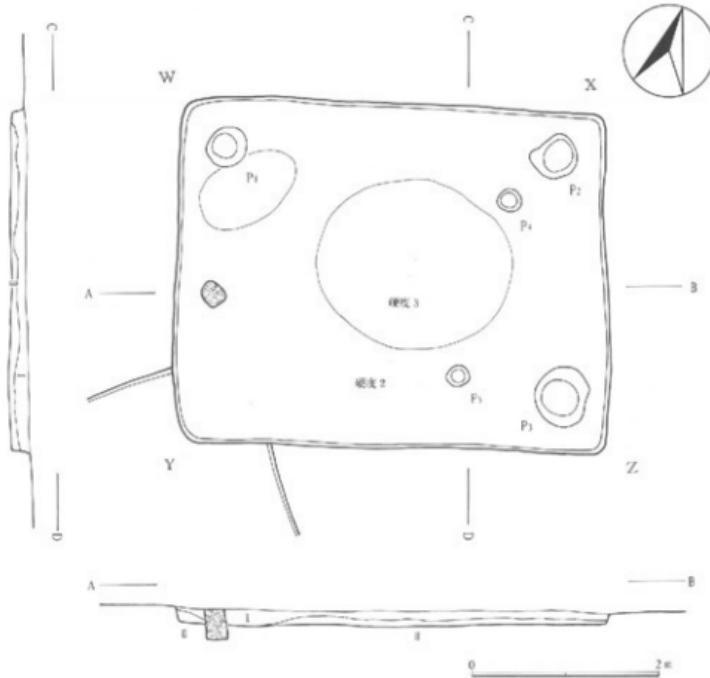
本址は、第4号住居址の北側に位置し、同住居址のXコーナーを切断して構築している。

住居址(第75図) プランは長方形を呈する。大きさは東西の各辺(W-X・Y-Z)長4.6m、南北の各辺長(3.65~3.7m)を測る。

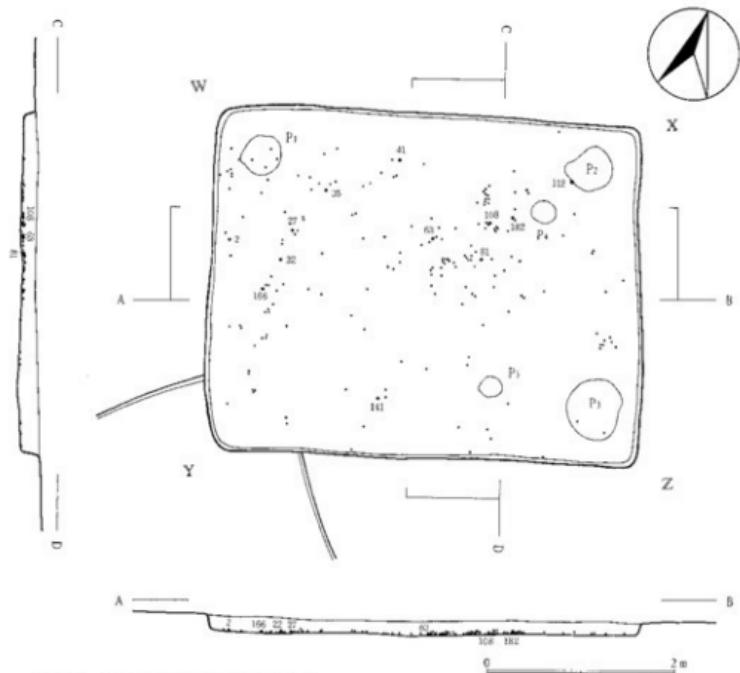
壁はほとんど垂直に近い状態で掘り込まれ、ロームの確認面からの深さは20cmである。遺構確認の時点では、黒色土中より土器器の破片が出土しているので、本址はおそらく黒色土を切って構築したように思われる。実際の壁の深さは30cm前後であろう。

床面は、中央部が硬度3程度の固さで、周辺部は幾分軟らかくなつて硬度2程度である。

柱穴は、この時期の堅穴であれば、床面の対角線上には規則的に掘られるのであるが、床面精査時にも明確な柱穴を発見できなかった。P<sub>1</sub>(口径25cm、深さ29cm)とP<sub>5</sub>(口径25cm、深さ20cm)の2例だけである。前者の位置はよいとしても後者は約30cm西南方向にずれている。この他に柱穴ではないが、W・X・Zの各コーナーに口径約45~60cm、深さ35~40cmのビットが存



第75図 第5号住居址実測図



第 76 図 第 5 号住居址遺物出土状態図

在する。P<sub>2</sub> の内部からは変形土器、高环形土器の破片が出土した。

炉址と思われる痕跡は、床面上に全然認められない。

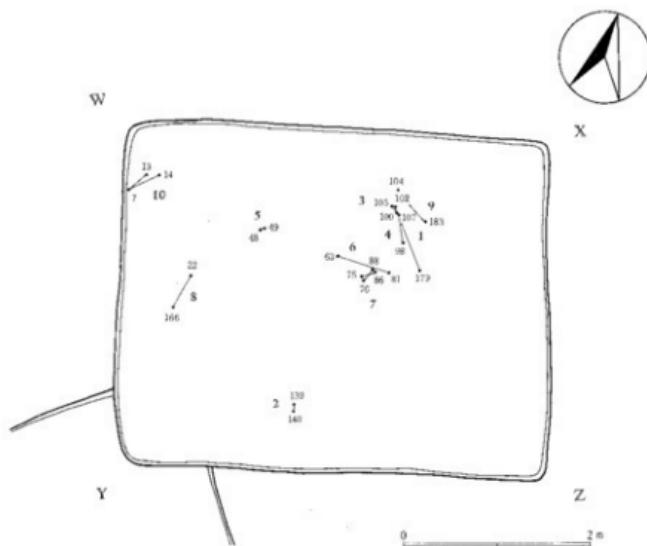
埋没土は 2 層に区分できる。

I 黒色土 ローム粒を僅かに含み軟らかい土砂である。

II 黒褐色土 ローム粒を多量に含み、部分的に小ブロックを混入する。区分線は不明瞭などころが多く辛うじて線が引ける程度である。廃棄土砂と思われる。

遺物の出土状態(第 76・77 図) 遺物の総数は 196 個である。土器破片 193 個、自然石 3 個に分けられる。土器破片の表裏関係は、表 94 個(49 %)、裏 63 個(33 %)、立ち 36 個(18 %)の比率を示す。土器の破片のなかには、縄文土器 2 個、弥生後期の十王台式を含む破片 14 個、五領式に対比できる破片 12 個が混在する。これらの破片はいずれも小さなものばかりである。

ドットであらわした平面分布の在り方は、中央より北側の空間に多く散布する。南側は僅かに点在する程度である。北側のドット群は、P<sub>4</sub> の南西側と W-Y 壁付近に多く集中している。



第77図 第5号住居址土器接合関係図

この状態を東西・南北方向に設定したA-B・C-Dセクションに投影してみると、ほとんど大部分のドットは、床面から床面上10cmのII層中に集積する傾向が観取される。

平面分布図と垂直分布図を総合した遺物の廃棄は、北壁と西壁の両方向からほとんど同時に行われたように窺われる。

接合資料は、壺形土器5例、壺形土器2例、高環形土器3例の合わせて10例が抽出できた（記載順序は＜接合部位＞出土地点上器番号・表△裏▽立ち▷・床上レベルcmの順である）。

接合資料1 <壺形土器口辺部> 179▽0・102△1

接合資料2 <壺形土器胴 部> 139▽7・140△7

接合資料3 <壺形土器胴 部> 105▽15・100▽5

接合資料4 <壺形土器胴 部> 107▽5・98▽0

接合資料5 <壺形土器胴 部> 48▽7・49△7

接合資料6 <壺形土器口辺部> 81▽8・63▽8

接合資料7 <壺形土器胴 部> 86▽7・88▽7・75△10・76△8 } 同一個体

接合資料8 <高環形土器環部> 166▽3・22△0

接合資料9 <高環形土器環部> 104▽0・183▽3 } 同一個体

接合資料10 <高環形土器部> 13△5・7△10・14▽0 ]

以上の接合資料のうち資料6・7の壺形土器、資料8・9・10の高環形土器は、いずれも同一個体の破片と思われる。接合資料の出土状態は、ドットの散布状況と大略一致し、P<sub>4</sub>の南西側床面に壺形土器の大部分と高環形土器、壺形土器が存在する。壺形土器・高環形土器の接合方向はほぼ南北を指向し、壺形土器は東西方向と破片が割れて飛散した状態を示している。西壁寄りの2例は高環形土器の同一個体の破片である。南壁に近い資料3は胴部の小破片である。

**出土遺物** 本址発見の主要な遺物は、土師器であって壺形土器、壺形土器、壺形土器、高環形土器の種類に分かれる。壺形土器は、P<sub>2</sub>内部出土のものを含めて5個体、壺形土器2個体、壺形上器1個体、高環形土器5個体と破片である。これらはいずれも和泉式の特徴を備えている。

#### 土 器(第78図)

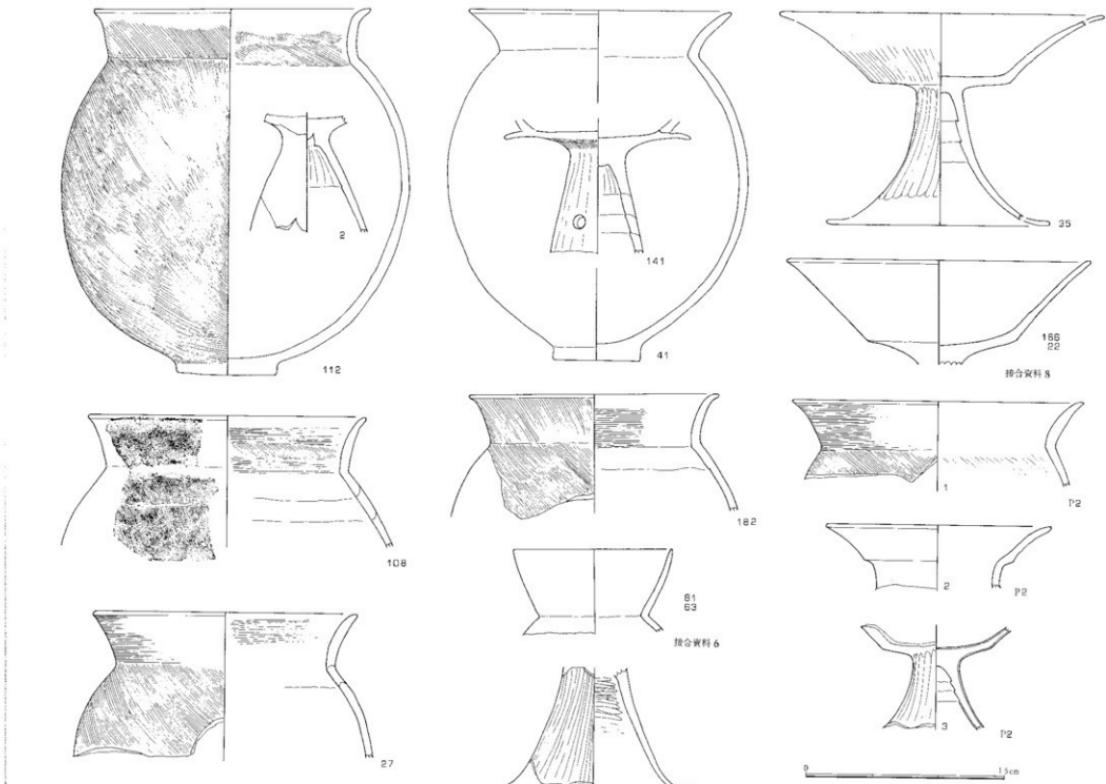
**壺形土器(112・108・182・27・P<sub>2</sub>-1)** 112は、胴部中央に最大径があり下膨れの器形を呈し、底部が突出する。口辺部は直線状に立上り外反している。これと似たような口辺部形状をとるものに108・182・27がある。口辺部内外面の調整は、刷毛状工具と櫛齒状工具を使ったものがある。胴部は上半が櫛齒状工具で斜めに、下半は斜めの箝削りが全面に施される。112の底部は変色し縁の付着がみられる。胎土に砂粒、小石を混入し、焼成は良好である。色調は、赤褐色、茶褐色、黒褐色に部分的に変色する。

**壺形土器(41・P<sub>2</sub>-2)** 41は、最大径を胴部中央にもち、底部が突出し、口辺部が外反して開く。口辺部外面は刷毛目調整、胴部は箝削り手法を残す。P<sub>2</sub>-2の口辺部形状は、頸部が短く立上り、その上に僅かに外反する口辺部を附加したもので、外面に段が作出される。胎土、焼成は壺形土器と変りない。

**壺形土器(接合資料6・7)** 口辺部は内湾ぎみに開き、頸部は「く」の字状に屈曲し球形の脚部に移行する。口辺部は、外面が縱位、内面が横位の箝調整を施している。胎土、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。

**高環形土器(35・接合資料8・22・P<sub>2</sub>-3・2・141)** 35と141に代表されるような器形がある。前者は、環部が外反しながら開き、脚部は环底の接合部から胴部にかけて外反してひろがる。後者は、中膨みの円筒形状の脚部に、円盤状の底部をのせて、その上に外反する口辺部を附加したものである。2の脚部も本類の仲間かもしれない。器の内外面は、刷毛目または箝による入念な調整が施され、焼成の良好な土器である。

以上の内容から本址は、古墳時代中期に廃絶されたものと考えられる。



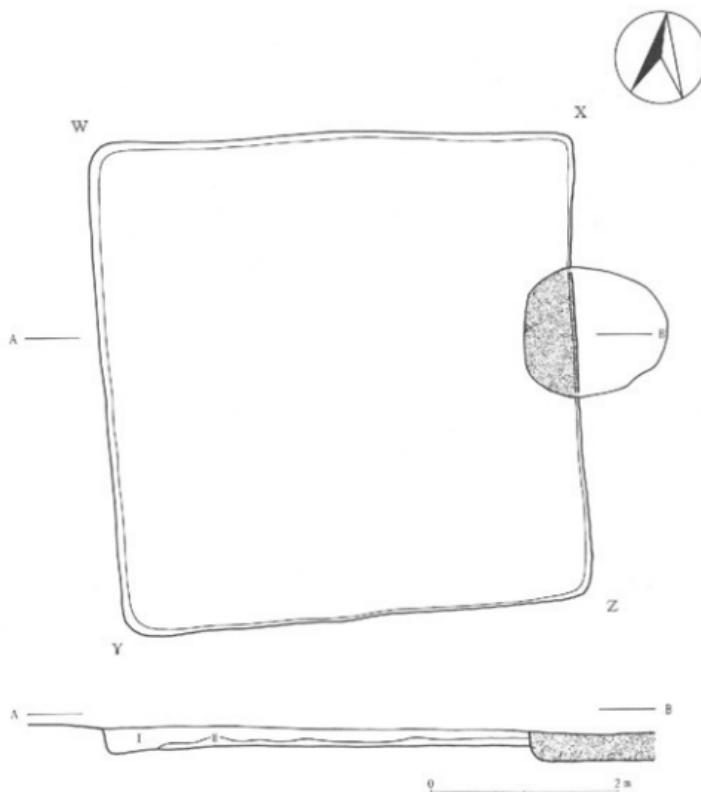
第78図 第5号住居址出土土器実測図

## 4 第7号住居址

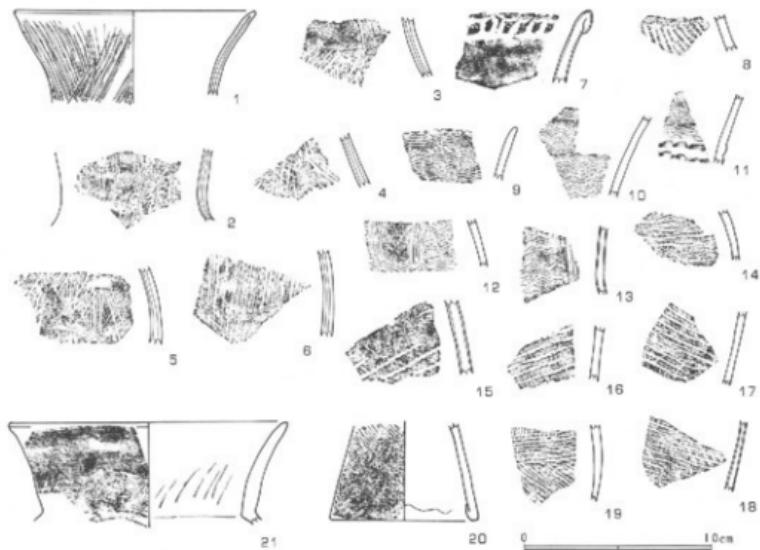
住居址(第79・80図) 本址は、発掘区の東端に近いQ-R-S, 1-1グリッドに検出された。遺構確認の際、東端北壁付近に一部を検出したので、北側に拡張した結果全容が出現した。

プランは方形状を呈し、W-X壁上面辺長約5.15m, Y-Z壁上面辺長約5m, W-Y壁上面辺長約5.25m, X-Z壁上面辺長約5mを測るが、東壁(X-Z)の中央部は、確認面よりの深さ約30cmの搅乱穴によって切断されている。

埋没土は2層に区分できる。I層はローム粒子を僅かに含む黒色土、II層はローム粒子を多量



第79図 第7号住居址実測図



第 80 図 第 7 号住居址出土土器実測図・拓影図

に含み、部分的にローム・ブロックを混入する黒褐色土であるが、層の区分線は全体に不明瞭である。自然流入の痕跡は認められず、人為的な土砂の投棄による埋没であろう。

壁は各辺とも僅かに傾斜して掘り込んでいる。確認面からの深さは平均 30 cm である。

床面は、僅かな凹凸と傾斜があるが、全体におおむね平坦である。特に踏みかためたような痕跡は認められず、全面に軟弱である。各辺 5 m 以上の規模を有する住居址であるにもかかわらず、検索の結果、炉址も柱穴も確認できなかった。(千種)

遺物の総数は約 130 個である。内訳は、土師器 47 個(五領式 4 個)、弥生土器 44 個、縄文土器約 30 個、自然石片 8 個である。土器の破片は大部分細片で、特に縄文土器はなぜか摩滅が甚だしい。

弥生土器は、後期の十王台式に該当する 9 ~ 18 と、それ以前の 1 ~ 8 が出土している。1 ~ 6 は同一個体の破片で長頸の壺形土器になるだろう。口頭部は、半截竹管の内側または櫛齒状工具で縦や斜めに条線を施し、肩部は沈線を格子状に配している。7 と 8 はまた別の種類である。

土師器のうち櫛齒条線文の 19 と 20 は、五領式に該当し、器形は台付壺形になると思われる。21 の口縁部破片は、第 5 号住居址の壺形土器に類似し和泉式に対比できる。

本址の廃絶期は、住居址の規模から考えて古墳時代中期の頃になるであろう。

## 5 第3号住居址

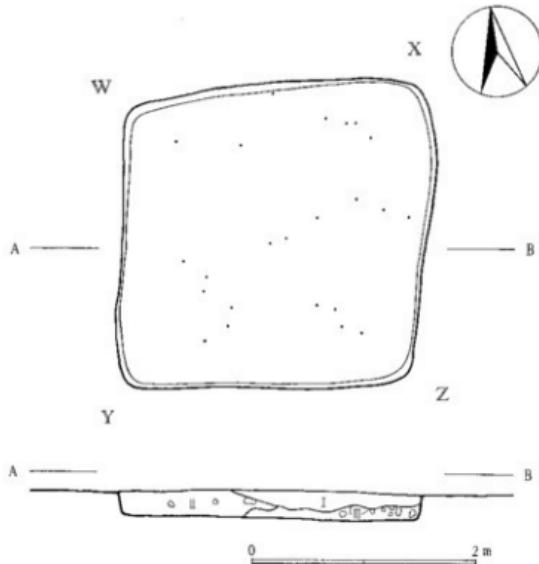
住居址(第81図) 本址は、発掘区の中央部よりやや東寄りのM-N・3グリッドに検出された。プランは、方形形状を呈し、W-X壁上面辺長約2.7m、Y-Z壁上面辺長約2.6m、W-Y壁上面辺長約2.5m、X-Z壁上面辺長約2.6mを測るが、今回調査の住居址としては最小規模である。

埋没土は3層に区分できる。I層はローム粒子を僅かに混入した黒色土、II層は多量のローム粒子とローム・ブロックを含んだ黒色土、III層はローム粒子と大小のローム・ブロックを多量に混入した黒褐色土である。この上層と堆積状態は自然流入とは考えられず、人為的埋没であろう。壁は各辺とも僅かに傾斜して掘り込んでいる。確認面からの高さは平均20cmである。

床面は、僅かな凹凸があるが、おむね平坦である。炉址と柱穴は竪穴内には検出できず、柱穴が屋外に存在することも考えられるので、壁の周辺を丹念に検索したが確認できなかった。

本址の遺物総数は23個である。その内訳は縄文土器18個、自然石5個である。出土状態をドット・マップ上から観察すると、X-Y・Zコーナー付近に多く、全体にまばらに散在する。

出土遺物は、縄文中期、弥生後期、土師器の小破片が混在し、廃絶期は不明である。(千種)



第81図 第3号住居址実測図

### VIII 発掘・確認調査区出土の遺物

発掘調査区内における表土除去、遺構確認作業中に発見した土器の破片は、大部分が縄文時代中期前半のものである。弥生時代後期と古墳時代前・中期のものは非常に少なかった。

校舎北側の農道を拡幅して通学路とする部分(B確認調査区)は、ローム面まで約50cmの厚さに黒色土・黒褐色土が堆積し、ここに道路を敷設しても直接遺構が破壊される心配はない。しかし、県文化課の指導により、この拡幅部分(55×2m)も遺構存否のための確認調査を実施することになった。確認調査の結果、3区に直径約1mの円形の落込み、4区に直径2.5m、5区に直径2.5m、11区に直径2mの土壤らしき遺構、7~8区に竪穴住居址と思われる遺構(南北埋削6.5m)の埋没していることが判明した。この事実から周囲の畠地に縄文中期の土壤、弥生中期の土壤、住居址群が存在していることは確実である。

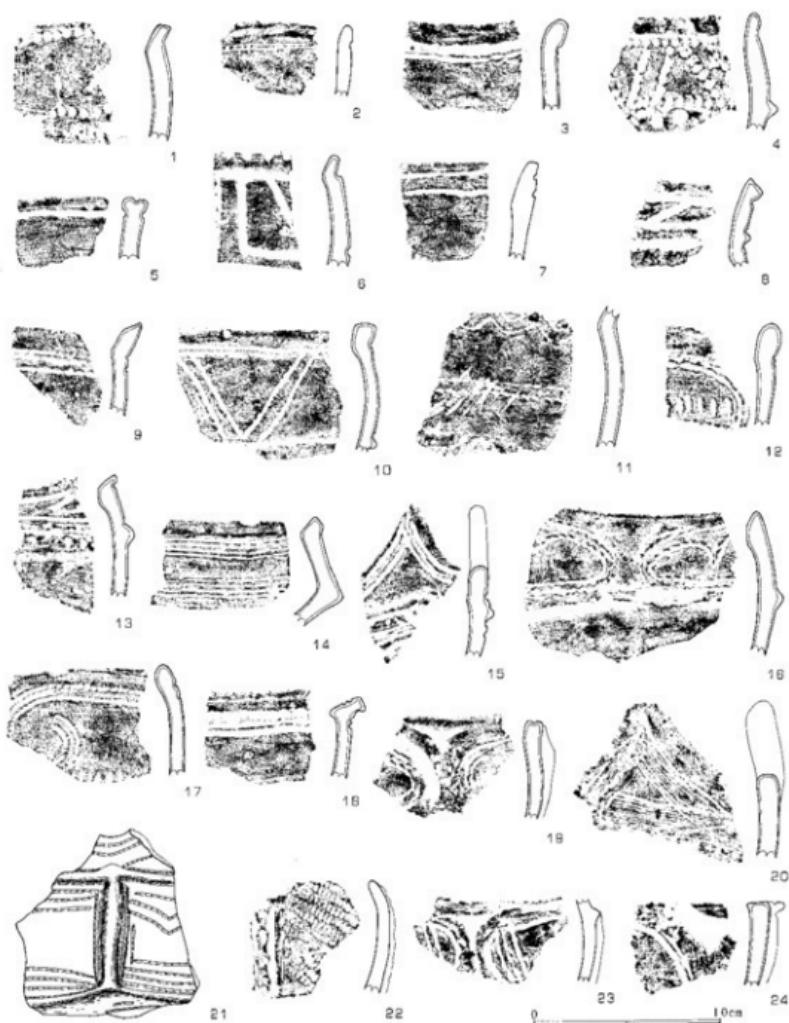
**発掘調査区の土器(第82図)** 口縁部の破片について観察すると、隆起線を配したものは、縱位と横位に施すもの、VやY字形に貼付したものがみられる。この隆起線に沿って、半截竹管または櫛齒状工具で複列の有節線文が施される。この有節線文は、また口縁をはじめ区画の内部にも単独で山形状、鋸齒状、渦巻状、棹状に描出されている。角押文的手法をとる沈線は少ない。こうした種類とは別に、幅広い爪形文を施文したもの、隆起線の上に縄文がかけられるもの、日立市歴史遺跡第7群に類似した文様の破片も出土している。こうした土器の破片は、阿玉台式から大木8a式期までの各型式を含んでいる。

**確認調査区の土器(第83図)** 調査面積が狭長なために破片の量は少ない。出土土器は、縄文中期前半の阿玉台式、弥生中期の祭式、土師器(五領式・和泉式)などに包括できる破片である。

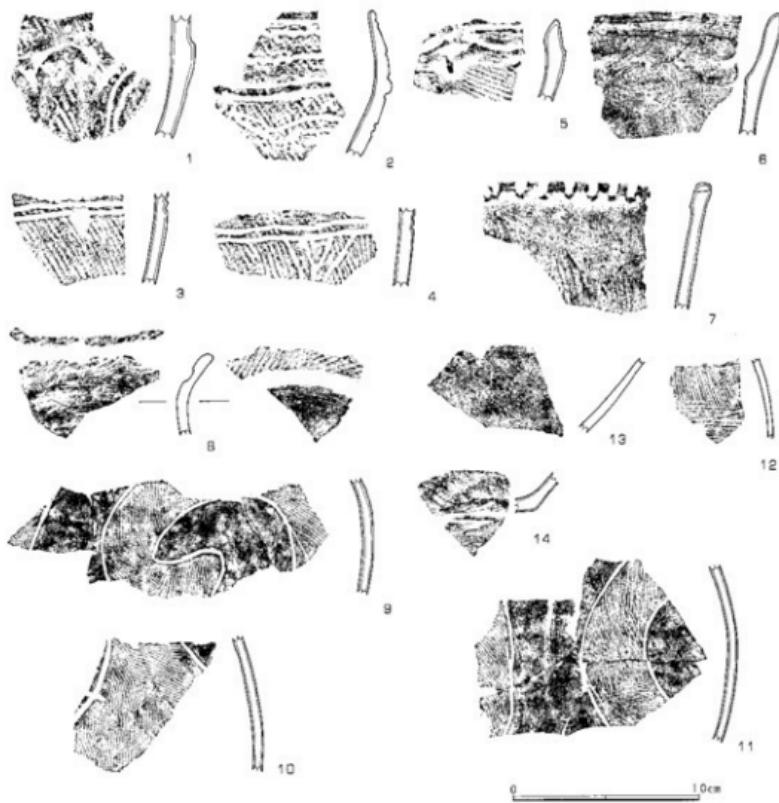
縄文中期の阿玉台式は、無文の口縁部や縄文地に沈線を施した種類である。2~4は同一個体で、細い隆起線を施し、縄文地の上から1~2本の有節沈線による平行線文、波状文、渦巻文やY字状の施文が行われる。この類は前記歴史遺跡の第7・8群土器の一部に対比でき、阿玉台式より若干新しい本地域の大木8a式の古い段階のものであろう。

弥生中期の土器は、2区内から口縁部8と胴部9~11が出土している。口縁部は小波状を呈し、内外面に縄文を押捺し頸部に無文帶を形成する。胴部は櫛状工具で渦巻文の区画を描出し、内部に縄文を充填した磨光縄文系列の壺形土器である。本地域における祭式の特徴をもっている。

土師器は、櫛齒条線文を施文した12が五領式に対比され、13と14は高环形の坏部破片に相当する和泉式であろう。確認調査区の主要な土器は以上のようなものである。



第 82 図 発掘調査区出土土器拓影図



第 83 図 確認調査区出土土器拓影図

## IX まとめ

梶原遺跡の発掘調査の内容と出土遺物の概要は、以上に記述してきたとおりである。

発掘調査をかえりみて、かぎられた調査の期間内に、ややもすると敬遠されがちな、遺物の出土状態を詳細に記録する“原位置”論的調査方法を、本遺跡において実践できたということは、発掘を担当した私たちにとって幸いであった。

今回の発掘において一番多かった遺構は、縄文時代中期前半に構築された土壙群である。本地方の中期前半は、阿玉台式またはこれに並行する上器の使用期間に該当し、昭和50年2月、鈴木裕芳氏によって日立市諏訪遺跡で約30基に近い土壙群が発見されるまで、その実体は具体的に把握されていなかった。ここに本遺跡の16例を追加し、さらにまた水戸市下畠遺跡において、これに後続する加曾利E式後半を主体とした土壙群を発掘したことにより、中期土壙の推移を解明できることになった。袋状土壙の発掘中の所見としては、貯蔵穴的性格が強いように思われた。

弥生時代の後期については、すでに富士山遺跡(昭和51年発掘)で8軒の住居址を調査しており、本遺跡の事例と合せて10軒になる。本地域における該期の動向を窺う上で重要な役割を担う遺構である。

古墳時代の住居址は、五領式・和泉式期を合せても僅かに4軒である。久慈川流域では、かつて私たちの調査(昭和42年発掘)した日立市曲松遺跡、近年では同吹上遺跡(鈴木裕芳氏)、東海村部原遺跡(茂木雅博氏)など若干の調査例があり、決してその数が多いとはいえない。こうした五領式期の住居址からは、いわゆるS字状口縁の台付甕形土器が出土し注目すべき資料である。

遺物とくに縄文中期前半から後半に移行する土器の問題は複雑である。前記諏訪遺跡に良好な土器群が発見されるまでは、資料の僅少性という制約をうけて、この問題に関して積極的に言及することはほとんどみられなかった。昭和55年に鈴木氏による資料の提示が行われ、その研究成果を踏まえて、海老沢稔氏が意欲的にこの問題と取組んでいる。このようなときに本資料が発見できたということは、中期中葉にかかる上器群の解明にとって意味のあることである。

弥生後期の十王台式から五領式期にかけても問題点は多岐にわたる。十王台式は弥生後期、五領式は古墳前期の土器である。この両者の共伴関係を問う前に、往年の山内清男博士が確立した先史土器の編年大綱は不变であることを認識する必要がある。阿玉台式・十王台式・五領式または和泉式が、発掘の過程において廃棄土層内で確實に共伴している。この場合、阿玉台式は縄文であり、和泉式は土師器に該当するので、混入または混在として処理し、十王台式と五領式は相前後する型式で共伴と解釈する。こうした発想に基づけば、相前後する各型式はすべて共伴ないし共存関係が成立しよう。もちろん土器の発生～終焉を横一線で画することはできないけれども、紙数の関係で充分言及できないが、いずれ稿をあらためたいと考えている。

### 梶巾遺跡発掘調査会役員

会長 鈴木勝一 (大宮町文化財保護審議会会长)  
副会長 大越四郎 (大宮町教育委員会教育長)  
同 吉田一満 ( 同 )  
理事 中村昭次 (大宮町秘書民政部長)  
同 中崎侃治 (大宮町産業建設部長)  
同 野沢 弘 (大宮町教育委員会教育次長)  
同 住谷順 (大宮町秘書民政部企画課長)  
同 井上義安 (梶巾遺跡発掘調査班長)  
同 高瀬淵 (大宮町文化財保護審議会委員)  
同 後藤欣也 ( 同 )  
同 藤田稔 ( 同 )  
同 細谷篤正 ( 同 )  
同 小野瀬捨次 (大宮町議会議員)  
同 広木政重 (大賀小学校用地買収委員長)  
監事 梶 実 (大宮町総務課長)  
同 奥村義三 (大宮町会計課長)  
事務局 浅川克己 (大宮町教育委員会社会教育課長)  
同 齊藤忠夫 (大宮町教育委員会学校教育課長補佐)  
同 中村淳公 (大宮町教育委員会社会教育課長補佐)  
同 齊藤幸子 (大宮町教育委員会社会教育係主任)  
同 大賀亨 (大宮町教育委員会社会教育主事)

### 発掘調査從事者

横山清司 広木義男 横山清太郎 後藤ふみ 後藤栄子 大森とし子  
後藤つや子 後藤紀子 広木美代子 戸崎ともえ 大久保なつ 戸崎とみ  
横山あきえ 後藤きさえ 後藤ももえ

### 遺物整理從事者

井上義安 植田友次 千種重樹 大芦あさ子 磯崎薰 郡司浩之

謝辞 梶巾遺跡の発掘記録が上梓されるにあたり、発掘から遺物整理の期間中、大宮町教育委員会、文化財保護審議委員の諸先生、大賀小学校からあたたかいで高配とご協力を賜わったことに対し、深い感謝の意を表する次第である。また農繁期であったにも拘らず、発制作業に尽力された地元作業員の方々にも、あらためて謝意を表したいと思う。(調査員一同)

## 図 版



大宮町の北部、大賀地区は久慈川に沿っていくつかの段丘が発達している。その一つに久慈川を臨んで南に細長く舌状に張出した小祝の台地がある。現在は標高65mの平坦な畑地である。この台上は、先土器時代に人間が居住はじめ、縄文時代中・後期をへて、弥生・古墳時代、さらには現代に至るまで食料資源の獲得・生産に適合した場所として利用されてきている。

このたび先人たちが樹を積えたこの地に、大賀小学校の新校舎が建設されることに決した。次代を担う子弟の教育、埋蔵文化財を後世に保存することも、現代の私たちに課せられた義務でもある。昭和59年の春、市教育委員会は、発掘調査を実施し、この地点から縄文時代中期の袋状土塗群、弥生時代・古墳時代の墾穴住居跡群を発見した。写真は大賀地区の方々による遺構確認の作業状況を東側から撮影した記録である。



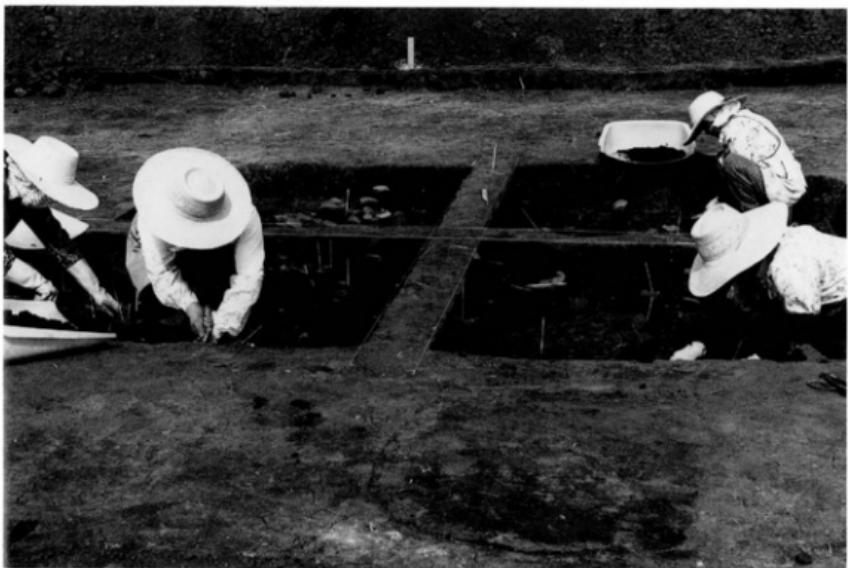
遺跡の遠景(東方より撮影)



遺跡より東方の景観



発掘調査の状況(第2号住居址)



発掘調査の状況(第6号住居址)



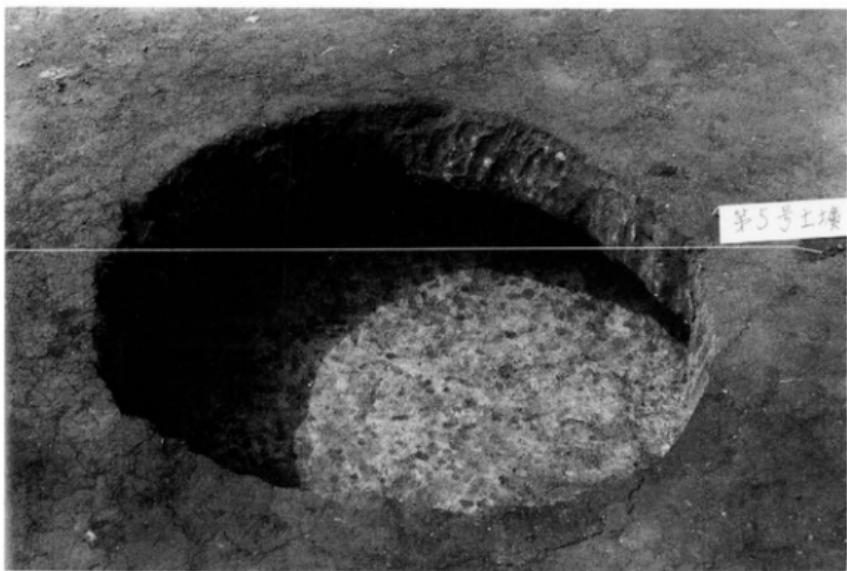
第1号土壤埋没状態(東側より撮影)



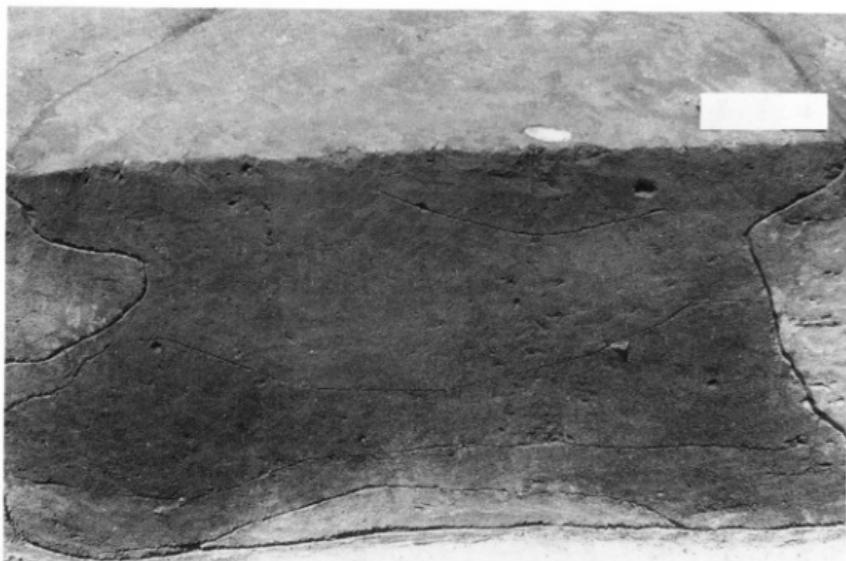
第2号土壤埋没状態・遺物出土状態(南側より撮影)



第4号土壤埋没状態(南側より撮影)



第5号土壤全景(南側より撮影)

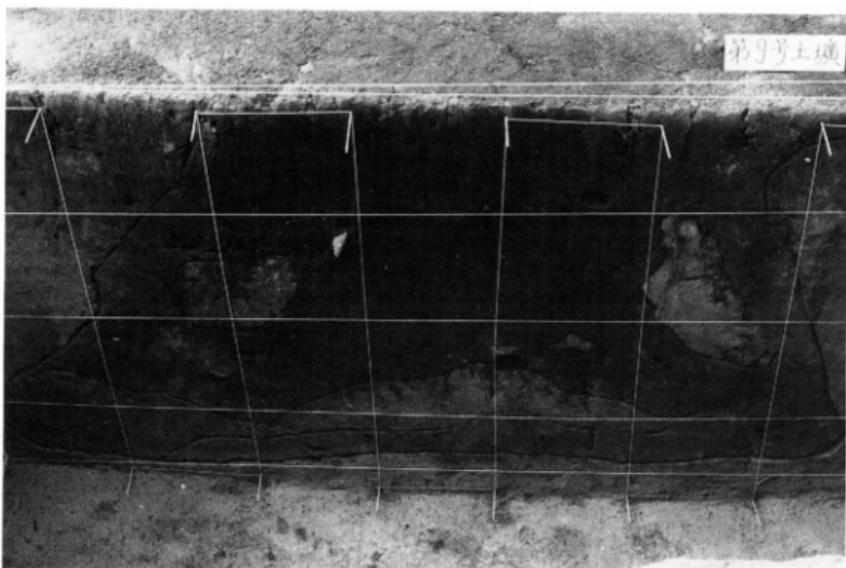


第7号土壤埋没状態(南側より撮影)

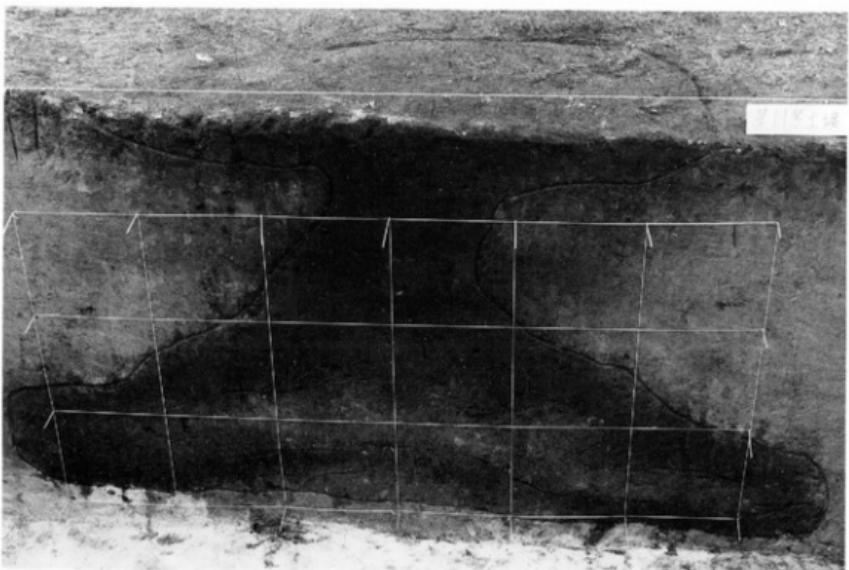


第7号土壤遺物出土状態(阿玉台式土器)

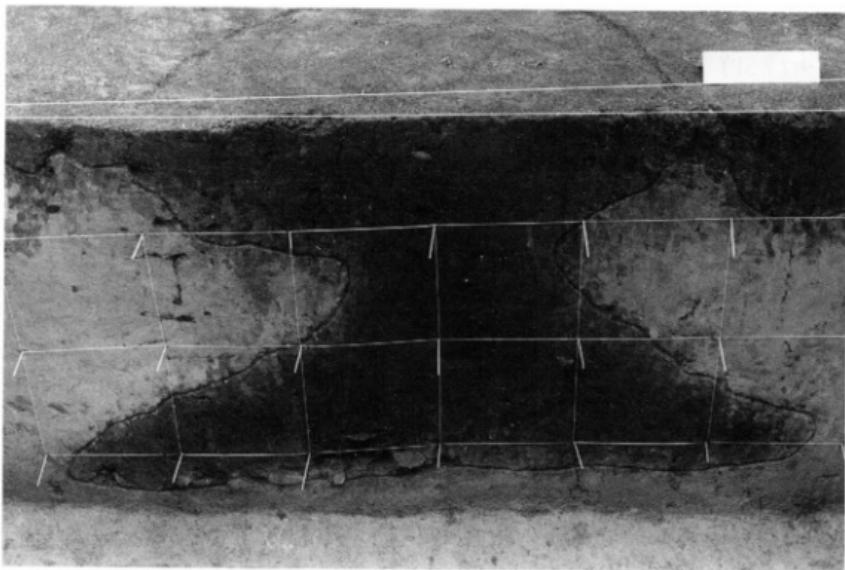
第7号土壤



第9号土壤埋没状態(南側より撮影)



第11号土壤埋没状態(南側より撮影)



第12号土壤埋没状態(南側より撮影)



第13号土壤遺物出土状態(南側より撮影)



第1号住居址全景(北側より撮影)

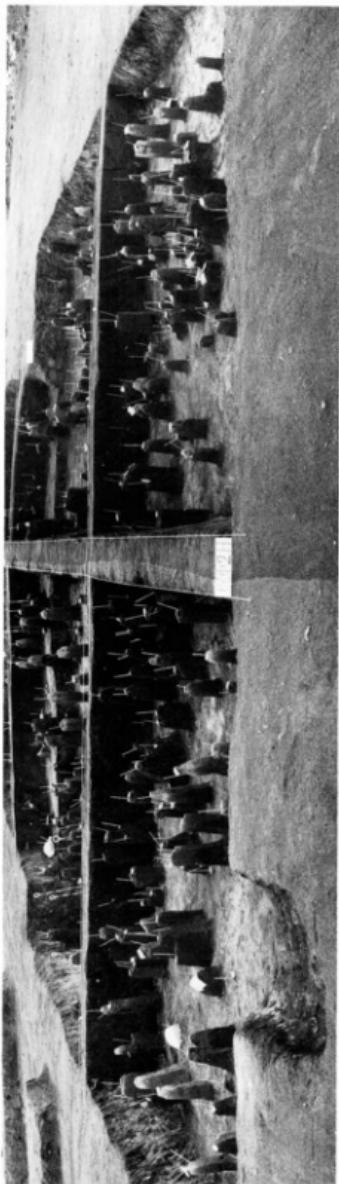


第1号住居址遺物出土状態(S字状口縁土器・紡錘車)

圖版第九



第2号住居址全景(北側より撮影)



第2号住居址出土物状態(東側より撮影)



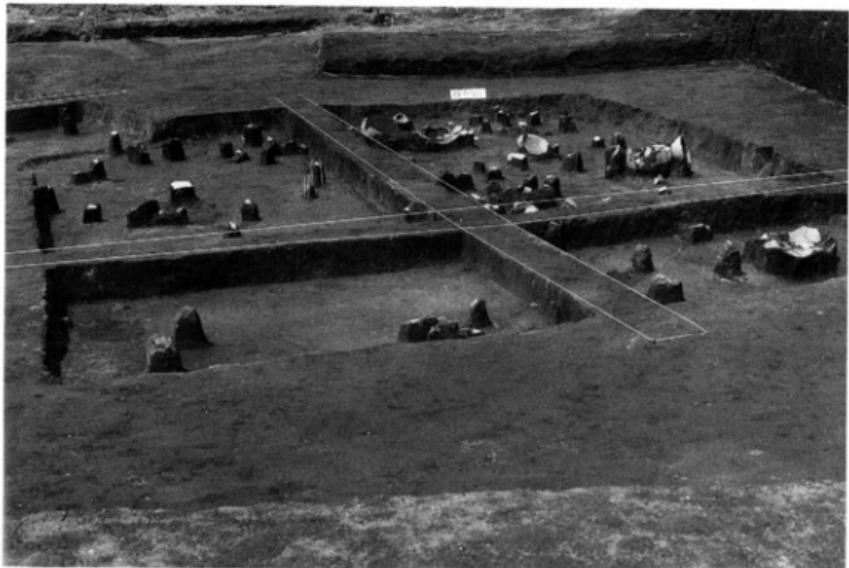
第3号住居址遺物出土状態(東側より撮影)



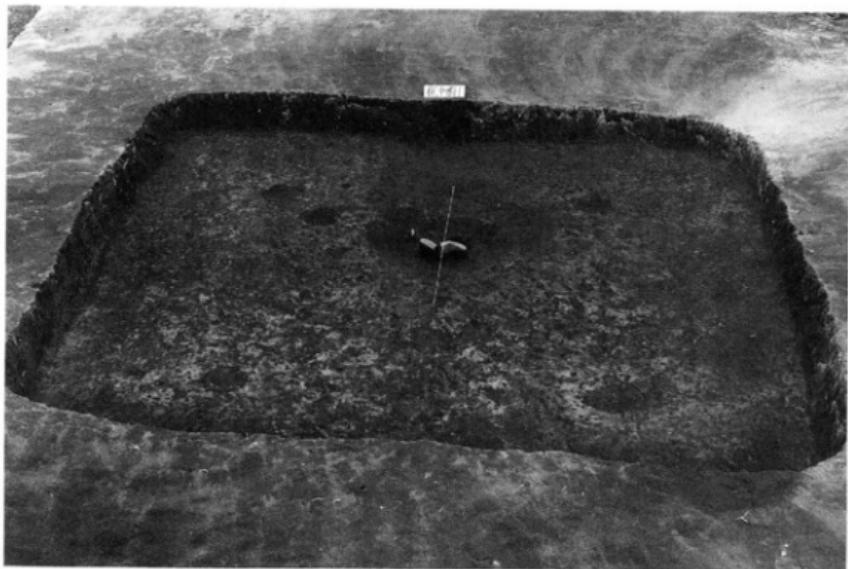
第4号住居址遺物出土状態(南側より撮影)



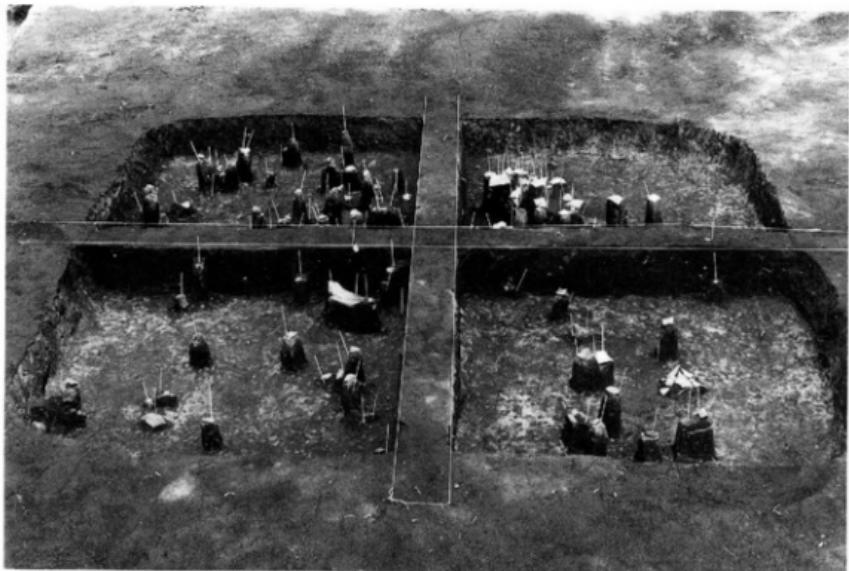
第5号住居址全景(北東側より撮影)



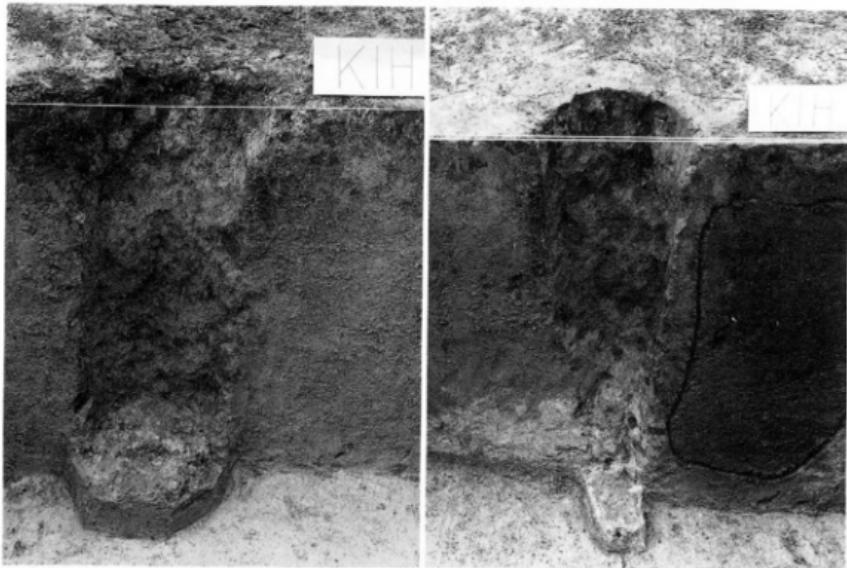
第5号住居址遺物出土状態(東側より撮影)



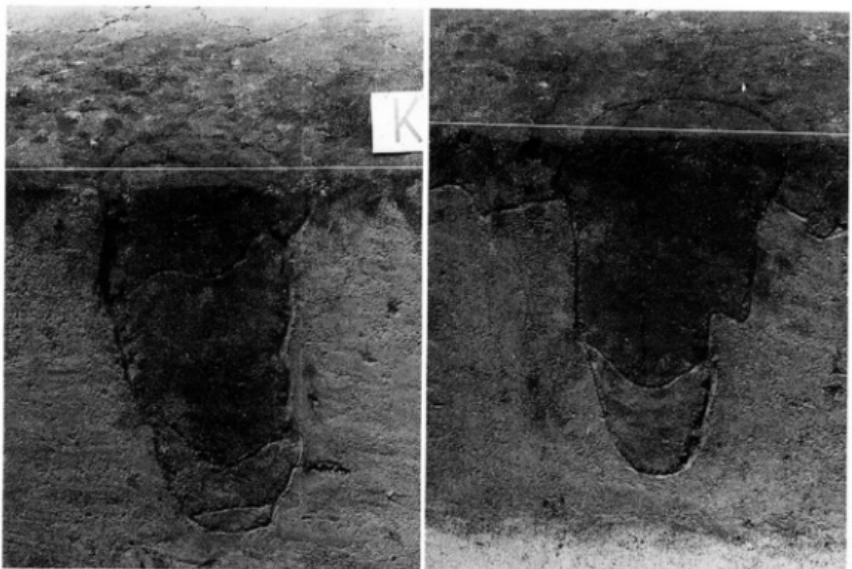
第6号住居址全 景(北側より撮影)



第6号住居址遺物出土状態(南側より撮影)



第1号住居址柱穴P1(左)P4(右)底面の状態



第4号住居址柱穴P1(左)P4(右)埋没状態



土壤出土土器 1～4（第2号土壤），5（第7号土壤），6（第11号土壤），7（第13号土壤），8～9（第15号土壤）



第4号(上2段), 第6号(下段), 住居址出土土器・炉石・砾石



第5号住居址出土土器

## 茨城県梶巾遺跡

---

発行 昭和60年3月31日

編集 梶巾遺跡発掘調査会

印刷 (有)平電子印刷所 美術写真印刷研究室  
〒970 福島県いわき市平北白土字西ノ内13

---